ペテン使いは言霊遣い

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペテン使いは言霊遣い

【Ｎコード】
Ｎ９９４６Ｖ

【作者名】
タナカ

【あらすじ】
少し捻くれた男子高校生、虚室対戯。そんな彼の特技は『嘘』。嘘つき、大法螺吹き、詐欺師、詭弁師、ペテン師…、親友には敬意をもって『ペテン使い』などと呼ばれている。そんなある日学校裏の森の中でのんびりしていると、幼女が空から降ってきた――。言葉と言霊の戦い。それと嘘つきな高校生の物語。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　俺と嘘と降ってきたもの

なんというか、人に恥じてしまう人生を送って来た。少なくとも、誰かに誇れるものとは言えやしない。

恥の多い生涯を送って来ました。

例の人間を失格された物語を引用すればそうなるのだろう。
まさにそれ。俺にとって誇れやしない、恥の多い人生は、まさに失格されるべきだろう。まぁでも、人間なのだから仕方ない、と例の作者と違い割りと楽観的に考えるのだから俺はまぁマシなものだ。
余計性質（タチ）が悪いのかもしれないが。

友達…、親友といえるのだろうか、そいつが言う俺についてのよく言う言葉を使えば、

「君の話はいっつも論理とかすっ飛ばしな法螺（ほら）話だよねー。ある意味尊敬するよー。」

やけに間延びした口調で言われた。
失礼な。けれど言い返せない。そうなのだ。俺は何を隠そう、天性の嘘つき。
法螺（ほら）話はお手の物、言い訳だってお茶の子さいさい。その上口も達者で口喧嘩には負けやしない。揚げ足取りも得意で、殴られる寸前まで相手を怒らせたりできる。
まぁ、親友によくやりすぎだ、と怒られるけど。

嘘。これが一応俺の日常の行動の中にどすんと座り込んでいる。
親友からは敬意をこめて『ペテン使い』などと不名誉な名をつけら

れているが、まだまだある。
大法螺(おおぼら)吹き。詐欺師。ペテン師。詭弁師。嘘つき。
…悪口だとは思わないようにしているさ。正直呼ばれ方はどうだっていい。
まぁでもそう呼ばれるだけの実力はある。…実力といえるかは知らないけど。
だって俺は嘘つきだって有名なはずなのにそれでも引っかかるんだぜ？親友にはなぜか通用しないけど…、それでもそれ以外は簡単に俺の嘘(ペテン)にかかる。
俺の最大の特技。もう才能だって言えるんじゃないだろうか。褒められることはないのだけど。
言葉は強い。それは簡単に人を惑わし、感情を左右できる。剣であり、盾であり、鎧だ。だから俺は嘘をつくし、やめるつもりは毛頭ない。だって嘘は俺の日常であり、一部なのだから。

とりあえずでも、嘘を除けば俺は普通の一般的な高校生だ。
超能力が使えるわけでも、魔法が使えるわけでもない、いたって日常的にいる、高校生だ。…嘘を除けば。
性格は自分で言うが微妙。成績は国語が優秀。高校一年生の、健全な男子高校生。
虚室対戯(こむろたいぎ)。それが俺の名前だ。

よし、もう一度言おうか。俺は虚室対戯、一般的な男子高校生、である。
面倒事は嫌いだし、人助けなんて自分に利益のあることしかやらない、一般的の少し性格の悪い捻くれた男子高校生、だ。
嘘ばっかで褒められる人生でもなし、面倒事はお人よしの、ヒーローみたいな、いかにも主人公のような奴がやればいいんだ。
そう、例えるなら今の状況。

「……」

普段ならぺらぺら動く口もこのときばかりはひくひくと、頬を痙攣させるばかりだった。
さて、なんなのだろうかこれは。
…一言で言うのなら、

美少女と呼べるべき幼女が落ちてきた。

……だめだ、妄想の激しい人間だと思われそうだ。俺はいたって健全です。ただ、これしか言えないのはどうしてだろうか。
ちなみに言うがここは学校。まぁあまり小さい子供が入り込まない場所だろう。
そして、ついでにその幼女の様子について一言。

傷だらけだった。

…一応言うが俺がやったんじゃないぞ？いじめ、かっこ悪い。ましてや小さい子供をだなんて。
まさか虐待？いや不良が？いや、どこかの変態が…、と、俺は立ち尽くしてぐわんぐわん考える。
犯罪の臭いがした。なんせ目の前の幼女は頭から血を流しているのだ。
そして、それがちょうど俺の上に落ちてきた。
妄想でも幻覚でもなく、現実だ。

さて、どうしてこうなったのかと言うと、話は数時間前に遡るのだ

が――――……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　ペテン使いの優雅な日常とその崩壊

嘘　…事実でないこと。また、人をだますために言う、事実とは違う言葉。偽り（いつわ）。「―をつく」「この　話に―はない」

校舎の裏で、カツアゲしている不良とされている気弱そうな少年の間に入り込む少年がいた。
琴羽野（ことはの）高校第一学年２組所属、虚室対戯。それがその少年の名前だった。

「なんだよ、正義の味方のつもりか？」

口元を歪ませてさも悪役の典型的なタイプのように笑う不良Ａ。かなり古いタイプのような気がするそれは、どこぞのアニメのキャラのように髪がモヒカンだった。
絶対学校で浮くだろうその風貌に微かな悲しさを覚える戯対。あのさ、それ全然イケてないから、と言う言葉を飲み込む。

「生憎そんなもんじゃないですけど、そいつ俺の連れなんでとりあえず穏便にすましてほしいなぁと」
「あぁ？友達思いなこった」

俺の連れ、と戯対が指す少年、今絶賛カツアゲされ中な端渡代夜（はわたりしろや）はたいぎー、と情けない声を上げている。
あぁこいつじゃなかったら無視してたはずなのに、と対戯はため息をつく。いわゆる親友？と呼ぶべきだろうか、その代夜をただ歩いてただけなのに見つけて、代夜にも同様に見つけられてしまった。
ここで助けなかったら後からぐちぐちと言われて、精神的に痛いと

ころをこいつはついてくるかもしれない。この親友は対戯にとって侮れない存在なのだ。
そのうえ、この代夜は、面倒くさがりの戯対がどうにもほっとけない人間だったりする。

「あー…、あんたさぁ、高三だよなぁ」
「はぁ？それがなんだよ」
「不祥事による学業停止制度って知ってるか？」

一瞬ぽかん、と不良Ａの笑っていた口の動きが止まる。

「その名の通り不祥事を起こした学生への特別処置っていうところか。最近お偉いさんが決めたらしいんだけどよ、近頃いじめやそういう類での自殺やら事件が流行ってるだろ？そういうのって今問題になってるよな。いじめ、暴力、強奪、リンチ、…カツアゲだってなぁ。このくらいどうってことないだろ、って思われるようなことにも学校ってのは敏感になってるんだよ」
「はっ、」

ぴくり、と不良の顔が強張るのを戯対は見逃さない。
ビンゴ。その異常に目立つ風貌や、どうにもひ弱そうな代夜を狙ったところ、その上ここは校舎裏で人通りも少なく目に付きにくい。
そして第一にこの不良Ａはピアスも何も、体に穴を開けるようなものは使用していない、と言う点だ。
つまり見かけだけの臆病者。怖がられたいだけで、避けられることに優越感を感じるタイプ。
どうせ自分より強いものには媚び諂って、弱いものには偉そうになる。けれどその実、自分に不利なことがあったら迷わず逃げる人間だ。
この学校は髪型に関してはかなり寛容だ。なんていうか、校長が自

分が染めたいばかりにいいんじゃね？というような理由らしい。ある意味尊敬するが。
つまり、この目の前の不良Ａは、寛容な校則をいいことに髪形は好き放題やってるだけ。けれどそれ以外はノータッチ。無駄な装飾具なんてつけてきていやしない。でも髪形については、内申に影響しない、ということは、

この不良Ａは停学や退学についての畏怖を感じている可能性がある、ということだ。

その対戯の予感は当たり、学校、という単語を出すとあからさまに不良Ａの空気が変わるのを感じた。
わかりやすっ、と内心で戯対は突っ込む。けれどそんな感情を表には出さず、あくまでにっこりと笑ってみせる。

「学校の不祥事ってさ、学校のせいにされるじゃん？それって結局学校の不利益になるわけよ。そういう問題がかなりあるからさ、さすがに学校側も躍起になるだろ？つまり不良行為っていう生徒の勝手な不祥事のために、自分たちが迷惑かかるだなんてありえねぇだろ、みたいな話なんだよ。わかるだろ？それならどういうことになるかさ」
「な、なにが…」
「つまり誰かによって被害を受けた生徒が、先生に、学校側の人間に泣きつけばどうなるか。被害を受けてどう感じたか、肉体的にどうなったか、心境的にどうなったか、精神的にどうなったか、そのせいでどう追い詰められたか。考えてみろよ。近頃の高校生って案外ガラスのようなもんなんだぜ？簡単にヒビが入っちまう。そんなガラスを使い続けたらどうなる。いつかはぶっ壊れるんだよ。そしてその後始末のために手を傷つける人間もいたりすんだよな」

なぁ、と対戯はにっこり笑って朗らかに歌うように言いあげる。

「停学と退学、どっちが好み？」

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「不祥事による学業停止制度、なんての僕聞いたことないよ」

呆れた目で言ってくる代夜に、むっと口を尖らせる対戯。

助けてやったのになんだその目は。非難げに見つめれば慌ててばつが悪そうに逸らす。

「んー…ありそうだと思ったんだけどな…」

「少なくとも僕の記憶の中にはないよ」

「あ、ならねーわ」

あっけらかんと、言ってのける対戯。

「どうせ嘘だし」

そう言った目の前の少年にやれやれ、と代夜は首を竦めた。

虚室対戯の特技は『嘘』、だ。

二枚舌ならぬ三枚舌。怒らせ惑わせ怯えさせ、感情操作はお手の物。

嘘だと疑う連中も騙される。ついたあだ名は数知れず。嘘つき、大

法螺吹き、詐欺師、詭弁師…エトセトラ。
この目の前の親友からは敬意を持って『ペテン使い』などと呼ばれる。皮肉だとわかってはいるが。

「…まぁ、さ。助けてくれてありがとね。助かったよ」
「おぉ？素直に礼言うのか。めずらし」
「僕は君みたいな天邪鬼とは違うからね」
「天邪鬼って…それは違うとおもうんだけど」
「違うのかい？」

少なくともそんな可愛いもんじゃねぇよ、と戯対は言うと代夜は母親のように優しく笑った。
あぁもう、この笑い方は嫌いだ、と、舌打ちしながらそっぽを向いた。

「ん…そろそろ昼休み終わると思うよ、戻ろうか」
「いや、俺はいいや、保健室にでも行ったって言っといて」
「…もう、対戯ったら…」

しょうがないなーと、やや間延びした口調で言うと、ううん、と一つ背伸びをしてからとことこと校舎の入り口に向かって歩いていった。
途端に静寂がふわり、と浮かび上がるように対戯の周りに落ち着いた。

校舎裏は小さな森のようになっており、あまり人が近寄らない。
なんにせよ高校生なのだ。冷暖房完備の校舎にいるほうがいい。まぁ中にはそれこそ子供のように屋上や校庭を駆け回るものもいるが、大抵この場所には来なかった。

だが対戯はそんなこの場所が好きだった。薄暗くはあるが、葉と葉の間から零れ落ちる光が優しい陽だまりを作り、緩やかにベールを被せるそこは、どこかしら特別な場所に見え、たびたび対戯は訪れる。
そのせいで代夜と不良Aのあの場面に出くわしてしまったわけだけど。

「ふわぁ…」

大きな欠伸を一つし、かさかさと草の生えた道をのんびりと歩く。森をちょっと歩いた先にはちょうどいい広々とした空間があり、そこに小さなベンチが置いてあるのだ。
初めて見つけたときには汚れていたが、わざわざ雑巾を持ってきて綺麗に拭いたのだ。それはもう隅々と。
そのおかげでか、それは綺麗な光沢を放ち、座って申し分ないものになった。それに森とそのデザインが不自然のないくらいにマッチしていて、どうにも絵になる。
その場所に寝転がって過ごすのが戯対は好きだった。だから今回も行こうとした。それだけ、だった。

…確率はいくつだろうか。偶然にしてはありえないことだった。もしくは、これを運命というのか。それとも神様が『あ、これおもしろそうじゃね？』みたいなノリで引き合わせたのか。
どっちにしろ言いたい。ふざけるな、と。

気づいたのは、がさっと葉と葉に掠れる音だった。風とは思えないような音だったので、鳥でもぶつかったか？と何の気なしに上を向いた、瞬間顔に衝撃と共に暗闇が広がった。

「んなっ！！！？」

いきなりのことで反応も出来ずに後ろに倒れこむ。顔と背中に同時に衝撃。痛っ、と悲鳴を上げようとしたが、顔の前にある柔らかい何かにその音が阻まれる。

なんなんだよ、と起き上がりながらその顔の前にあった重くて柔らかいものをどかす。そしたら、

傷だらけの幼女だった。

「……は？」

まぁすぐに反応できないのはいうまでもない。

一応言うが、これは危ない妄想でも夢でもない。実際痛みはあったのだ。そして幻覚でもない。現実であって、リアルタイムで起きていることなのだ。

けど対戯の頭の処理速度が追いつかない。

幼女が空から降ってきた。

ちょうど自分の上に。

傷だらけで。

……だめだ、わからない。

「あの、だいじょーぶ、です、か？」

頭の中が真っ白で、混乱なまま、一応問いかけてみる。幼女はうぅ、と身じろぎ、息もしていたので、死んではいないらしい。それにはほっとする、が、おかしいことがある。

いや、それは当たり前の疑問なのだが、なんで幼女が空から降ってきた？ということ。

木登りでもしてたのか？と空を見上げてみるが、ちょうど対戯の上

の部分には、葉っぱは固まっているが登れるような枝はない。その上ここは高校だ。普通の小学生程度の子供が入ってくるようなところでもない。

どうしようか。

「…ほっとくか」

出たのはなんというかまさに最低と言うべきその言葉。
傷だらけにしたの俺じゃないし大丈夫だろ、とあえて自分本位の考えでその場を立ち去ろうとする。
死んでるわけじゃなし、生きてるのだ。それなら平気だろ、と軽い気持ちで考え、幼女を自分の体からどかす。けれど地面の上もどうかと思ったので抱き上げベンチの上に寝かせた。
呼吸も安定してるし、傷もそれほどまでもないだろう、と観察した結果を機械的に脳内に並べ、その場を立ち去ろうとする。
面倒なことには関らないほうがいい。平穏が一番なのだ。自分の人生に大きな岐路なんて必要ない。
幼女の眠るベンチを背にし、歩き出そうとした、その瞬間、

ばさり、

鳥の羽のような音が、天高くから聞こえた。
天高く？そう考え不審に感じた。
空を飛んでる鳥の羽の音が聞こえるような大きな鳥なんていたか？
少なくとも、都会には、雀やカラス、時々ツバメが関の山だ。
なのになんだ今の羽の音。
対戯の耳にはノイズのような、ごみ箱をあさるような、不快を感じさせるような羽の音が、確かに聞こえた。

異質だと、何かが直感的に伝えていた。
現実的ではないと、伝えていた。
振り返ってはダメだ。振り返ってはいけない。本能のようなそれはアラームを鳴らしながら危険だと知らせる。
そうだ、そうだよ、さっさと戻ればいい。代夜に言ったように保健室へ行ってしまえばいい。あそこの先生とは案外仲良いから大丈夫だ。振り返らず、何も気にせず、現実の中で生きれば良い。それが一番だ。それが良い。そうじゃなきゃいけない。現実的に。日常に。平凡に。

あの女の子は？

「……ったく！」
生きてれば良い、生きている、それならほっとけばいいんだ。
けれど嫌な予感がした。嫌な予感ほど良く当たる、と誰かが言っていた。
考えてみたら、その嫌な予感には嫌な伏線もあった。
なぜ、幼女が空から落ちてきたか？
なぜ、鳥の羽の音が聞こえるのか？
ありえない。まるで妄想だ。けれど直感的に残った予感は相変わらず警報を鳴らしているし、それは止みそうもない。心臓がばくばくと耳の奥でいやに響き続けている。
ありえないだろ、現実的に、考えて、そんなの、まさか。
対戯は振り返った。
そして、その空に見た。

異形の、鳥を。

「っ…！！！！？？？」

それこそ幻覚じゃないか、と思う。ありえない事態が目の前で発生して、起こっている。この現実に。見慣れた現実に、混ざる異物。その鳥は、鳥とはいえなかった。その羽は大人二人分の体をあっさりと覆うくらいあり、その体も２ｍを超えている。
普通の鳥ではありえない、言うなれば化け物。羽は朱色に染まり緑色の鬣を生やしている。目は金色でぎょろりとしており、嘴は剣のように鋭い。
妖怪が現代に甦りました、的な？ありえない、ありえないありえないありえない。
叫び声を切れかけた理性で必死に堪える。頭の中はパニック寸前だ。まだぎりぎりで保っていられるのは、半ば予想できていたからだろう。まぁその予想を軽く飛び越えてしまうものだったのだが。
その鳥はばさばさ、と羽を振りながら地面に降り立とうとしてくる。その視界に入っているのは、多分、ベンチで寝かせた――――――女の子。
どうする、と自問自答する。もし助けようとしたとして、自分に何が出来る？所詮ただの高校生。すごいパワーとか、超能力とか、そんなの持ってるわけじゃない。ただのペテン使いでしかない。鳥に会話なんて出来るものか。
ありがたいことに鳥は戯対には気づいていないようだった。ただ、真っ直ぐに幼女を狙う。まだ幼い、傷だらけの小さな女の子を。別に家族でもなんでもなく、ただ自分の上に降ってきた迷惑なものじゃないか、あんなの気にせず逃げればいい。最初はほっとくつもりだったじゃないか。全部夢にして忘れてしまえばいい。夢だ。ただ自分は森の奥に入ろうとして、それをやめて保健室に行って、寝た。それだけだ。それだけなのだ。幼女が降ってきてもいないし、変な鳥も見ていない。だから逃げろ。見捨ててしまえ。忘れろ。忘れろ。忘れろ。
女の子は、生きてるのに？

「あぁもうなんだよくそおっっ！！！」

半ばやけくそのように大声で叫びながら対戯はベンチの方へ駆け寄り、その幼女を背負う。鳥はいきなり視界に入ってきた対戯に一瞬だけ動きを止め、それから起こったようにクエーッ！！と鳴いた。生きてるなら、ほっとけばよかった。

でも、その生きてるものが、殺されてしまうかもしれないとしたら？天邪鬼（あまのじゃく）、なんて親友に言われてしまった意味がなんとなくわかった気がした。

結局甘いのだ。生きてるのはいい、死ぬのはだめ、と両極端に位置づけしたつもりなのに、その中間に関しては自分が不利になることを選んでしまった。

ふざけるな、ちくしょう、ありえねぇ、なんなんだよ、これ。

鳥は木々が邪魔だったのか、降りてくるのに時間がかかったことが幸いして、背負う時間は簡単に確保できた。だが、鳥が地面に足をつけた途端、そんな安心は打ち消される。羽ばかりに気をとられていたが、その足は大きく普通より太い。そのため、走るスピードが半端なく早かった。

「ちくしょう飛べるダチョウだあれっ！！！」

ものすごいスピードで駆けてくる鳥に似た化け物は、対戯に向かってくる。多分追いつかれたら、死ぬ。そんな恐怖を頭の中でぐるぐると回しながら、それでも逃げる。

女の子を落としてしまえば良いじゃないか、と何度も思ったが、そんな考えとは裏腹に体は動かない。

逃げるために戯対は校舎とはさらに反対の、森の深い場所へ自分が走ってることに気づいた。しまった、と思う。校舎の方に行けたのなら、助けが呼べるかもしれない、そう思いながら、あれ、とふと

考えが過ぎる。

こんな大きな鳥に、どうして誰も気づかない？

え、と思った。そういえばそうだ。こんな大きく、異質な鳥、普通なら誰か気づくはずだ。あの不快な羽の音だって。気づかないのはなんでだ？あれ、じゃあ、

なんで俺は気づけた？

おかしい。おかしすぎる。空から降ってきた幼女。異質な鳥に似たもの。そしてその異常に気づかない者。

こんなキャパシティが崩壊するくらい非現実的なことが起こってるのに、それなのに今学校では平然と授業が行われてるし、相変わらず平和な街だし、変わらず世界は回る。

異常すぎる。なんだよこれ。

「あ、れ…、なん、じゃ、ここは…、背景が、移動、しておる…」

寝ぼけたような声が不意に後ろから聞こえた。なんだか年寄りが使うような言葉を使う幼女に、違和感を感じつつも、おいっ、と対戯はその少女に向かって叫ぶ。

「今、でっかい鳥の化け物に追いかけられてんだよ！！」

「およ？へ？え？あれ？なんじゃ、これ？え？」

「なにパニクってんだ！俺が一番このありえねぇ状況に困ってんだ！お前知ってんだろなんか！なんか言え！」

「む、なんという乱暴な言葉遣いじゃ！ぬし、私を古くから由緒正しき言霊遣いの名家、万葉（まんよう）家の行く行くは当主となりしこのやどり

になんという乱暴な言葉を使うのじゃ！」
「あぁもうそんな言葉言ってる暇あったら後ろ見ろ後ろ後ろ！！！」
まったくなんなのじゃ、と言いながらしぶしぶ背負われながら後ろを振り向けば、途端体をぶるりと震わせてきゃあっと可愛らしい叫び声をあげながら対戯にしがみついてきた。途端に言葉の一つ一つに溢れていた自信に似たような声は、怯えの色を含ませたものに変わる。
「な、なんなのじゃあれは！！？とっとっと、鳥かのっ！？あ、ああああそうじゃあれは私を攫った憎き鳥！怪鳥江蛾留侘（えがるた）じゃっ！！あぁぬし！もっとはよう走れ！追いつかれてしまうではないか！！！」
「無茶言うな！なんだよ偉そうに！お前は姫かなんかか！」
「ううぅううう、なんじゃなんじゃなんなのじゃぁ…こ、このままでは食われてしまう…」
泣きそうな声で言ってくるやどりと名乗った幼女。確かに対戯の足はすでに疲れのためにスピードが遅くなっている。鳥に似た何かはクエーッ！！と叫びながら相変わらずのスピードで走る。
「ぬぅ…仕方ない、一般人相手に気が進まんが使うしかないか、のぅ…」
ぼそり、とやどりが相変わらず泣きそうな声で何かを呟いた。対戯は特に気にせず、森を掻き分け走る。幸いこの森の中は熟知していた。ただ好きなだけじゃないのだ。どこに障害物になりそうなものがあるのか頭の中にしっかり入っている。以前切れた不良に追い回されたときもここで上手くまいた。あの鳥相手に通用するかはどうかわからないが。

「あぁくそ、足は速くてよかったあぁぁ…！！！」
「ぬし、ぬし、」
「なん、だよっ…！」

ふ、とやどりが顔を戯対の近くに寄せた。耳元に息が微かにかかる。
何だよ、と文句を言おうとした、そのときだった。

「『もっと、速く』」

耳に何かが入り込んだ気がした。声ではない、何かもっと別の力が。
え、と聞き返す前に足の力が一瞬抜けた。え、と焦りかけた瞬間、
足に変な力が湧き上がった。

「ぬなっ！！？」

『もっと速く』、その言葉通りに走るスピードが格段に速くなった。
驚いてる間に、鳥に似た化け物を引き離していく。
呆然となっている戯対の背中で、やった成功じゃっ！とはしゃいだ
声をあげる幼女がいた。

「な、なんだよこれっ！？なんでいきなり足が速くなってんだおい
っ！？これ俺のせいじゃないぞっ！？」
「なんてことはない、ぬしの体に私が告げたのだ、もっと速く走れ、
とな！」
「はぁ！？意味わかんねぇ！言ったからどうなるってんだよ！」
「ぬっ！？ぬしは『言霊』を知らんと申すのか！？言霊と言うのは
言葉による力、声に乗せ力と為すもの、じゃ！常識じゃろうっ！？」

「そんな常識俺の近くにはねーよっ！！」

言霊、とか言葉による力、とか後ろでぎゃんぎゃん騒ぐやどりの言葉を聞き流しながら、対戯は走り続ける。幸いに、偶然に、走る速度が上がったおかげで、鳥に似た何かをなんとか引き離せた。

後ろをちらりと振り返っても、あの派手な色は見えない。森の中ではあの色は目立つ、から、ないと思えばないのだろう。

逃げ切れた、と感じ、微かに息を吐く。このまま校舎のほうへ行こう、さすがに建物の中には入って来れないはず、だ。それから警察に電話して、このやどりと名乗った女の子を引き渡して、それでもうオサラバ、だ。忘れよう。この女の子も、あの鳥も、それで日常の始まりだ。これは夢だった、そう思おう。

速く、速く、はやく。

ばさり、と。

「…っ！？ぬし、上じゃ！！！」

「…んなっ！？」

迂闊だった。走ることが出来たって鳥は鳥。当たり前のように空を飛ぶ。体より大きなその二対の羽で、人間には出来ないことをやってのける。

鳥の支配せしは空。

それを領域として、生きる。

「これは…やばい、な…」
「や、ややばいとはっ！！？そんな、食われてしまうのかっ！？
あああいやじゃあああっ！私はまだ死にとうない、私は万葉家の当主となるべきものぞ！ぬぬぅ…私の言霊がせめて、物理的な力を持つものならいいのじゃがあああ！！！」
「暴れるな叫ぶな！！だいたいさっきからなんだよ『言霊』って！」
「し、知らんとなっ！？言霊とは、言葉に宿りし力じゃ！それくらいのことも知らんのかこのあほんだらっ！」
「あああああもううっせぇ！！！それよりあれどうすんだよ今にも襲い掛かってきそうだぞ！！」
「ふにゃあああああっ、助けて葉桜（はざくら）あああああああっ！！！！！」
「葉桜って誰だよ…」

限界がきたのか、やどりはとうとう泣き出してしまった。いや、今まで泣いていないほうがすごくないか？と思う。まだまだ子供なはずだ。そう考えれば、この子はまぁ、頑張ったのだ。
だからといって、この場がどうにかなるとは言えないが。
ちくしょう、ここでまさかのエンドか？ありえねぇ。
ありえねぇ。
ありえなさすぎる。
今日初めて会ったよく知らない幼女と一緒に死ぬ？ふざけんな。
なんでこんなところで心中しなくちゃいけないんだ。
死にたくない。
死にたくない。

「……ぬし、私を置いて逃げろ」

「……は？」

一瞬意味がわからなかった。
やどりは相変わらず泣いているし、声だって喋り方は偉そうだが、
声は弱々しい。
なのに、

「多分、あやつの狙いは私じゃ。私が走れば、やつだって追いかける。ぬしはここまでようやってくれた。もうよい。礼を言う。私を置いて逃げろ」

ぐず、と鼻を啜る音が聞こえた。
あーはいはい、狙いはやっぱりこいつだけってことか。ならこいつを置いていけば俺助かるじゃん。
最初からそうすればよかったんだよ、だいたい人助けなんて俺らしくない。
嘘だけついてればいいんだ結局。俺らしいことを俺らしく俺がそうやればいい。
たった、それだけなんだよ、それだけ、そう、それだけ。

「…そうか、ならそうさせてもらうぜ」

びくり、と確かにやどりは震えた。けれど何も言わない。悲痛な意思を固く貫いている。
馬鹿だな、対戯は思う。馬鹿すぎる。

「……教えてやるよ、やどり。俺のあだ名をな」
「…ふぇ？」

「俺はペテン使いさ」

対戯はやどりを背負う力を緩めるどころか逆に強める。え？え？とやどりは動揺したように目をぱちくり、とさせる。
さて、と対戯はこちらに狙いを定める鳥の化け物に視線を向けた。

こいつに俺の嘘が通用するか。

なんてことはない、と自分に言い聞かせる。
俺はペテン使いなんだぜ？
皮肉を交えたその名を、嘘つきのその名を、今こそ俺はここに出す。
死ぬのは怖い。死にたくない。痛いのだって嫌だ。逃げたい。
なのに体はそうは動かない。後ろに背負った小さな子供を守ろうと動く。
死ななければいい。生きてるなら、いいんだ。
だから、守る。死なないように、死なせないために。

対戯は、空にその羽を広げ、ぎょろりとした目で見つめてくる化け物の鳥を見つめる。
体より大きな羽。発達した足。狙うのはやどり。そしてここは森の中。
見つけろ。導き出せ。その答えを。どうすればいい。考えろ、考えろ、考えろ。
ペテン使いの名に恥じぬよう。

「…御覧に入れて見せましょう、ペテン使いのその力」
「え…」

優しく、対戯は微笑む。

「騙してやるよ。あの鳥を、な」

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　怪鳥にペテンを

「ば…ばかか！ぬしはばかか！！」

背負ったやどりが泣きそうな声で、いや実際に泣きながら叫ぶ。

「『言霊遣い』でもないぬしがどう勝つと！？無茶じゃ！はよう私を降ろせ！ぬしのような一般人に守られとうない！！」

「あーはいはい、黙れ黙れ。ってか言霊遣いってなんだよ…、職業？ったく意味わかんね…だいたい『ぬし』、じゃなくて俺の名前は虚室対戯だっつーの」

「たいぎ…？ってそうではなく！そうではなくて、私が言いたいのは…！」

「うるせー、ガキはおとなしくガキらしくしてればいいんだよ」

「ガキ…っ！？」

ガキではないっ！と怒り出したやどり。はいはい、と対戯は相手をせずに、返事だけをする。

やっぱり子供だな、と少しだけ安心したように息を吐く。

ぎょっとしたのだ。あのとき、『私を置いて逃げろ』と言った、あのとき。

驚いたと同時に、恐ろしくもなった。

ほっとけなく、なってしまうくらいには。

「お前はガキだよ」

「なっ！また…っ」

「だから、おとなしく守られとけ」

そう言うと、ふえぇ?、とやどりは一瞬すごく驚いたような顔をして、それから恥ずかしそうに両頬を赤くした。
あぁ慣れねぇ、と対戯は思う。
子供は子供らしくあればいいと思う。けれどそれは自分の見ていないところで勝手にやればいい、などとも思う。
勝手に生きて、勝手に笑ってればいい。それを平和というのならそうなのだろう。でも、自分が関わる理由がどこにあるという。
こんなの、俺のキャラじゃない。

なのに、この手を離せない、だなんて。

対戯は出来るだけ時間を稼ぐために走っていた。いくら鳥の化け物が空で自分たちを視界に捕らえていたとして、実際に捕まえなくてはどうしようもない。
その場合どうなるのか、食われるのか、引き千切られるのか、抉られるのか。嫌な想像が頭の中に過ぎって、それを打ち消すように足に力を込める。
時折背中からやどりの声が聞こえるが、そんなの気にする余裕なんてない。
頭の中をフル回転で、自分のするべきことを考えた。
『嘘』。自分の持つ最低で最悪で醜悪で劣悪で、最大の武器。自覚はしてるからあまり煩く言われたくないけれど、少なくとも最も惨めな武器。
それが、人助けのために使われるとか。馬鹿みたいだ。そう思いながらも、必死に考える。
考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考える。
相手は鳥だ。言葉なんてもちろん通じない。

けれど言葉だけが嘘を作れるわけじゃない。
俺を誰だと思ってる。嘘で紡ぎ嘘で絵を描き嘘で歌い嘘で奏でるペテン使い。
憎まれ嫌われ疎まれたって、嘘を吐き続けて、そんな俺が、鳥くらい騙せないわけがない。
怖がるな。恐がるな。何一つだって畏れるものはない。
お題は揃った。鳥と森とやどり、ここから生み出すものは？

「…やどり、お前、走れるか？」
「へ？」
「耳を貸せ、俺が今から言う内容をしっかり聞け。チャンスは一回。この賭けに乗るか乗らないかはお前次第だ」
「ど、どういうこと、じゃ？」
「そういうことだよ。お前の選択で決める。リスクのややある逃げ方、ノーリスクの逃げ方、それと、…ハイリスクでの倒し方。お前が望むのを選べ。ちなみに走るってのはハイリスクの方だから」
「…倒せる、というのか？」
「わからねぇからハイリスクって言ったんだよ。失敗したら終了。勝つか死ぬか。そんだけだよ。あー…なんだろう俺。達観しすぎてきたんだけど。今のテンション怖えー…、なんかこの状況悪夢に見そうだわ。怖くて仕方ねぇくせに、なぁ」
「対戯…」
「どうする？俺はどれでも構わない。あの鳥むかつくから騙してやりたい。だからなんだっていい」
「…ぬし、は…」

やどりは何かを言いかけたが開いた口を、閉ざした。しばらく黙り込み、考えるように目を瞑る。それから、開く。
おずおずと、とでも言いたげに、先ほどの偉そうな態度を引っ込めて、小さく、呟く。

「あの鳥を、倒したい」

対戯は微笑む。

「了解、お姫様」

鳥はクエーッ！！と高く雄叫びをあげながら、空をくるくると旋回する。森の中をその鋭い目で自分が狙うべきものを探す。
万葉家の次期当主となる万葉やどり。それを攫うため鳥はいた。
そして、いざとなったら殺せ、という命令も鳥の中に存在している。
それだけを考え鳥は探す。浚うべき、殺すべき、ものを。
他の事を何一つ考えず、ただ自分の遂行すべきことを。
『主人』の言葉に従い、『主人』の『言葉』の意のままに、『主人』の願いの通り、『主人』の望むことを。
それが鳥の化け物の存在する理由なのだ。
怪鳥江蛾留侘（えがるた）それがその鳥の名前だった。鳥の姿を為して、鳥ではなき物。怪鳥。

「うわあああああああっ！！！！！！！！！！」

ぴくり、と自分が狙うべきものの叫び声が甲高く空にまで届く。大きな首をぐるりと回し、その声の出所を探す。
ちょうど木々の境目に、微かに見えるその姿。攫え。できなければ殺せ。『主人』の命令が江蛾留侘を動かす。

ばさり、と朱色の羽を大きく広げ、体を下のほうへ向ける。ちょうど斜めになった辺りで、羽を仕舞う。
やどりへと真っ直ぐ向かうように。
今度こそ、仕留めるかのように。
羽を仕舞い斜めにしたその体は、重力に従い落ちると共に、空気抵抗を少なくしそのスピードを速くする。
鋭い嘴で狙うように、方向を多少修正しながら風を切りやどりへと向かう。
ちょうど向かった先は、対戯のお気に入りのベンチの近く。
攫え、殺せ、攫え、攫え、殺せ、攫え、殺せ、攫え、殺せ、攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ。

「俺流ペテン術うううぅ！！！！『口が駄目なら体で行動』！！」

ベンチの影に、それは、いた。
いきなりの乱入者に鳥の焦点はそちらに合う。ちょうどやどりを追っていた視界の真ん中に立たれて、化け物の鳥の単調な思考回路が混乱する。
一瞬だけ、鳥の体が揺らいだ。対戯はきっ、と鳥を睨みつけながら、その動きを見極める。

「俺流ペテン術、『どんな相手でも観察すべし』！！」

化け物の鳥はやどりを狙ってきた。それはやどり自身も入れている。
初めて見たときも鳥はやどりだけを視界に入れて、対戯のことは見向きもしなかった。
つまり自分の存在は鳥にとってどういうものなのか、と考えた。

邪魔な存在？殺すべきもの？必要のない？考えてみたが当てはまらない。それで、考えて考えた末の結論。
鳥にとって自分の存在はないものとされている。
見えているいないの問題じゃなく、鳥にとって対戯はそこらへんの石ころと同様の存在だということ。
つまりどうでもいい。それだけ。
かなりむかつくような結論だが、ちょうどいい、と対戯は思う。
それだったら無理矢理自分の存在を認識させればいい。
石ころだって投げられればそれ相応の反応を人は返す。当たると痛いし、時には傷つく。それに人だって殺せる。
もし眼前に取るに足らないはずのものだったものが、存在を認識すらしていなかったものが現れたら、どうするか。
もちろん、慌てる。

「クエーッ！！」
「黙れえええっ！！！」

怪鳥江蛾留侘は大きく口を開けて威嚇する。邪魔だ、どけ、消えろ、とでも言うように。
その嘴で対戯を食いちぎらんと言わんばかりに対戯に襲い掛かった。
きっと化け物の鳥にとって自分は弱くて脆いものにしか映らないだろう
だけど言いたい。石ころ舐めんな。

「これでも、喰らえええええっ！！！！！」

言葉通り、文字通り。その鳥に向かって、投げ込んだ。
取るに足らない路傍の石を。認識すらされない石ころを。
その、大きく開かれた口に向かって。
投げられた石は上手い具合に鳥の口の中に入り込む。その石はがき

ん、と嘴と嘴の間に挟まり、口を閉められなくする。
いきなり起こった不測の事態に、鳥はバランスを崩し、対戯のすぐ横を通り抜けて地面に激突する。
嘴の石を取ろうとするが、取れない。じたばたともがくがぴったり嵌ったそれは少しも動かなかった。
対戯は急いで重いベンチを引きずって、鳥の足の上に倒す。今度は鳥はクエーッ！！と叫びながら足もじたばたさせた。

「チェックメイト」

やりきった、とでも言いたげな顔で額の汗を拭う。
石を外そうと地面に嘴を突き刺したり横に振ったりしてる鳥は足のことに無頓着だ。
ダチョウのように発達している足を無防備に晒しながら、ひたすら自分のしなくてはいけないことのために嘴の石を取ろうとする。
足を封じてしまえばその朱色の翼を羽ばたかせても足に置かれたものが邪魔で飛べない。かといってその翼ではベンチをどかすことさえできない。

「俺流ペテン術、『騙しならぬ騙し討ち』」

完璧だ。やりきった。てか疲れた。すごくテンションがあがっていたんだな、と自分でも思う。怪物相手に嘘つくとかまじありえねぇ。どんだけ頑張ったんだ俺。久々だこんなに疲れたの。怖くて死にそうだったのに一時のテンションまじすごい。意味わからないこの状況でここまで出来るだなんて、ペテン冥利に尽きる。

「…やどりー、そこで何突っ立ってるんだ。さっさと来い。これどうにかしてくれ」
「ど、どうにかと、何を申すのじゃああ！！」

木の陰に隠れて怯えている幼女一名。

「そ、そこでまだ動いておるのじゃぞっ!? 怖いに決まっておろう!!」

「あーまぁそりゃそうだよなぁ…でも俺もどうすりゃいいかわかんねぇんだ。え、なに、処理しろってか? 無理無理無理。」

「ふにゃあああ葉桜あああああっ!!!」

だから誰なんだその葉桜って。

そうやって泣いて叫んでもその葉桜さん? とやらは来な…、

「やどりさまあああああああああああああっ!!!!!!!!!」

…、

「ってか来たああああああああああっ!!!?」

声が聞こえたがぶんぶん、と周りを見ても人影が見当たらない。え、あれ幻聴? と対戯は思ったが、不意に嫌な予感がして、上をむけば、そこには黒髪でポニーテールの女が。

え。

「空から降ってくるの流行ってんのかよっ!?」

思わず突っ込んだ。いや突っ込むべきだよなこれ。

内申パニクりながら空から落ちてきた女を見る。女は対戯の上に落ちてくるでもなくすたっ、と優雅に地面に着地する。

それから頭上で括られた長い黒髪をふぁさっとかきあげながら立ち

上がる。どうやら年上のようで、大人のような雰囲気が漂っている。
ちなみに言うと美人だ。
首元までである黒いシャツにジーンズを履き、背中には長い棒らしきものを布に包み背負っている。
どうにも落ち着いたような雰囲気がある人で、それで…、

「やどりさまあああああこの葉桜、心配で心配で…あああああああお怪我をしていらっしゃるのですね、なんていうことを…やどり様の美しくも柔らかである肌を傷つけるなんてなんということでしょうこの葉桜がいながらにしてこんなことになろうとはあああああ真に申し訳が立ちません現当主様になんと言えばいいのかこの葉桜もう腹を掻っ捌いて…！！！」

…うん、幻想抱いてたよ。もちろん、さっきあんなに叫びながら落ちてきた人が落ち着いた雰囲気があるわけないじゃないか。気づいてた、けどなんだよこれ。キャラが痛すぎる。
ふっと暗い笑みを浮かべながら対戯はテンションの違いすぎる二人を見つめる。
葉桜というらしい女は叫びながらやどりに掴み掛からん勢いで半泣きで捲くし立てる。一方のやどりはやどりが来てくれたことに喜びながら安心しつつも若干引いていた。

「せ…切腹はしなくてよい。そ、それで葉桜、頼みがあるのじゃが…、」
「はいっ！！この葉桜、やどり様のためならなんなりと！！」
「あれ、どうにかしてほしいんじゃ」

あれとは？と振り向いて、初めて気づいたような顔で化け物の鳥を見た。

「こ、これは怪鳥江蛾留侘！！！？そうか、これがやどり様を攫ったのですね…！！！あぁこの憎き鳥の分際でやどり様に触れるとはいったいどういう了見で…、んっ！？」

そこで葉桜の視線が対戯に向いた。いきなりのことでびくっと肩を震わす。

「あなたですか」

「へ？」

「やどり様を攫ったのはあなたですかって聞いてんだよこの野郎！！！」

「まさかの予想外に俺巻き込まれたっ！！？」

いやいやいやいや何言ってくれちゃってんのこの人、と慌てていると葉桜は背中の長い棒をその背中から降ろし、布を取った。そこから出てくるのは鋭利な刃。

薙刀（なぎなた）。

それを、対戯に向けてくる。

ええええ。

「ストップストップ！！俺何もしてねーから！！人攫いとかしてねぇし、幼女に興味がある危険な性癖もってねぇから！！」

「何を！！やどり様に対してそういう目で見れないというのか！！」

「お前怒ってるところ違うくなってる！？」

完全に周りが見えなくなってる葉桜に、対戯は後ずさりながらも説明しようとするが、聞き入れてもらえない。

先ほども死ぬかどうかの瀬戸際だったのに、今もそんな状況に陥っている。今日は厄日か？と泣きたくなる。

「ちょ…、葉桜！！！」
「お下がりくださいやどり様！！この葉桜が、この不埒な悪党をぶった切ってやりましょう！！」
やどりの言葉も聞かず、間違った敬語を使いながら薙刀の刃を向けてくる葉桜。え、これ俺ピンチじゃね？とか思いつつも、体が動かない。
というか、むかついてくる。
命賭けて鳥を騙しぬいてやったと思ったら今度はやどりの従者っぽいのから？冗談じゃねぇ。
まぁいいか。
自分本位の行動がそもそもものキャラだ。遠慮することはない。
「――あのさぁ、あんたって馬鹿？」
「は？」
人助けなんて柄にもないことしたばっかりに刃なんて向けられてさ。これでも危険だったんだよ。それなのになんで怒られる必要があって憎まれる必要があって殺される必要があるわけ？
くだらなくてうざったいし面倒くさい。
確かに俺は嫌われるべき人間だけどさ、これでも必死に守ろうとしてたんだぜ？子供の癖に大人ぶってるあの小さな少女を。
嫌われるくらいなら構わねぇさ、でもよ。
「…もし、それで俺を刺したとして、その光景をやどりに見せる気か？」
「っ！！？」
「やどり様やどり様言ってるくせにお前はちっとも何一つ考えていないな。怪我とか攫われたとかその事ばっかり連呼するくせに肝心なことはちっともだ。少しは思わないのか？攫われて怯えただろう

とか、殺されかけて怖かっただろうとか。俺に構う前にちっとはそんくらいの思いやりってのを見せてみろよ葉桜さん？見苦しいよ守れなかったからってそんなことすんの」

こんなの嘘をつく価値もない。怒ってるんだ俺は。
口喧嘩なら負けやしないし、今回のは、嗜好を変えて『正論』で勝負に出てみる。

「俺が悪党だって決め付けて罪滅ぼしのつもり？はっきり言って見当外れだし無意味だ。その上迷惑。こっちは必死にさっきまで走っていて疲れてんだよ。あんたが出来なかったやどりを守り続けたのはこっちなのにさ、何も聞かずに薙刀向けるって人としてどうなの？はっきり言えば最低だよね。少なくともあんたの大切なやどりの話さえも聞いていないんだから」
「う…え…あ…、ああ…、」
「結局あんたがしたかったのは勝手な自己満足。やどりがあんたを呼んだのだってあの化け物の鳥をどうにかしてもらうためだったのにあんたは何勘違いしちゃってんの？けっきょくあんたはやどりこと何一つ考えてないわけよ。まったく、見苦しい見苦しい見苦しい見苦しい。勝手な正義を振りかざして何がしたかったのかわからない。なさてその薙刀でどうするの？俺をぶった切るの？それをやどりに見せ付けるの？どうしたいの？褒められたいの？」
「だ、黙れぇえええぇっ！！！！！！！！！！」

あ、やべ、やりすぎたか？
ふ、と正気に返る。今まで口にしていた言葉を思い返し、酷いこと言ってるな俺、と気づく。
イラついていたからと言って、さすがに自分でも思うくらいには女に対して傷つけるようなことを言っていたと思う。
あの化け物の鳥のために頭を使っていたから、いろんなストッパー

が外れていたんだ。
やばいどうするか。いつもはぎりぎりで止めてたりするけれど、今回のはそれも出来てない。
うっわー…、どうするか。

「わ、わたし、は…わたしは、そんな…！そんなんじゃ…！！！」
「あー…わかった、なら早くやどりのとこに行ってやれ。それとあの鳥どうにかしてくれ」
「わた…しは、わたしは…！そんな、わたし、は…！」
「あ、やべ、聞いてないわ、これ」

微かに沸き起こる罪悪感。さすがに女を追い詰めて喜ぶようなサディストではない。むしろ紳士的でありたいと思ってる。…嘘だけど。これは本気でぶち切れてその薙刀で切られるんではないか、と思うとなんだか気分が沈む。怖いというより、さっきまで上がっていたテンションが下がる感じだ。
どうするか。

「…う、」
「う？」
「うわあああああああんっ！！！」

……え？
……ええ？

大人っぽかった雰囲気を打ち消し、葉桜は耐え切れなくなったとでも言いたげに酷く大きな声を上げて泣き始めた。
ええええ、これ、かなり予想外なんだけど。

「すみまぜんすびばぜんんん、わ、わだじのぜいでえええっ！

！！」
「あ、あんた大人の癖になに泣いてんだっ！！」
「わだじまだじゅうざんざいでずううううっ」
「まさかの俺より年下と言う新事実っ！！？」
嘘だっ！？こんなさっきまで大人の色気的なのを出していたのにっ！？身長だって俺より高かったはずなのに…、ちくしょう。
「あ、あの…葉桜…、」
いつの間にかこっちへと来ていたやどりが、対戯の足にしがみ付きながら泣き喚く見た目年齢２０歳の１３歳に対しておずおずと言う。
「あのな、来てくれて私は嬉しかったぞ？だから、その…泣かないで、欲しい」
「やどり…ざま……？」
「葉桜は、美人だから、笑ってて、ほしい…！！」
顔を真っ赤にして、例のあの偉そうな態度をおくびにも見せずに葉桜にそう言うやどり。
あぁこの子根はいい子なんだな…、と対戯はほのぼのとした気分になった。
……ん、でも、
「ってかお前ら何者なんだよ…」
従者みたいなのを引っさげた次期当主とかなんとか言うやどり。
背中に薙刀を背負った２０歳に見える１３歳。
そして今もなおじたばたとしてる化け物の鳥。
そろそろ誰か説明してくれ、と、抱き合っているやどりと葉桜を半

目で眺めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　言霊とその力

「真に、申し訳ございませんでした…」

そう言って、正座の状態で地面に手をつき、深々と頭を下げる葉桜。

「いや、そういうのいいから…」

そしてそれをうんざりした顔で止める対戯。

傍から見れば高校生相手に大人が何やってるのだという話だがいかんせんさっきまでの内容がアレなのだ。まとめると、幼女が落ちてきて化け物の鳥もやってきて倒したら見た目２０歳の１３歳が降ってきて…。

あやべ、意味わかんねぇ。

それから、いきなり切れて、薙刀をこっちに向けてきた葉桜に、対戯が逆に切れた挙句、大泣きされ、この状況に移る。

「やどり様のお命を助けて頂いたのにそうとも知らず私はなんて失礼なことをしてしまったのでしょうかあぁぁもうこうなったらこの腹掻っ捌いて…！」

「癖みたいに切腹しようとするなっ！？俺性格良い方じゃないけどそこまで極悪でもねぇからっ！！」

「ではどうすればいいというのですか！！」

「どうもしなくていいから落ち着けええぇっ！！！」

めんどくせぇ！！こいつすごくめんどくせぇ！！

説明を求めようとしても目の前の女は本気で天パっているようだった。責任取るための切腹？そんなグロいもの見せるな！！対戯は頭

が痛くなってくるのを感じた。
もうやだなにこれ。
いっその帰ればいいと思うのだが、どうにも説明をしてくれないと気持ちが悪い。
あの化け物の鳥のことや、やどりのこと。どうにもおかしすぎるこの状況。

「なーやどりー。これどうにかしてくれよ…」
「は、葉桜は、真面目すぎて時折爆発するんじゃ…そんときになったら、私でも手がつけられん」
「まじかよ…」

これじゃあ話が進まないじゃないか、とこちらの方が泣きたくなった。
確かに先ほどはイラついた。いきなり刃物を向けられるとか、はぁ？意味わかんねぇ、ふざけんな、とか思ったが、さすがにそれを引きずる程でもない。
…殺されそうになったくせに引きずらない対戯も対戯なのだが。
だから別にもう謝られなくても構わないし、逆にそこまでされるのも居心地が悪い。
真面目って難儀だな、とため息を吐く。
ん？まてよ、と対戯は思う。逆にこれを利用すればいいんじゃないか？

「…つまり、お前は何か罪滅ぼしをしたい、というわけか？」
「…！！はい！！そうでございます」
いよっしゃビンゴオオオォッ！！！内申でガッツポーズをとりながら、対戯はさらに言葉を紡ぐ。

「俺としてはもうどうだって構わないからさ、正直何もしなくていいんだけど、お前がそこまで何かしたいというんだったら俺も考えなくはないな」
「ほ、本当でございますかっ！！」
「あぁあぁ、もちろん。やっぱり罪悪感ってのは苦しいものだからな。わかるさもちろん。だから俺は別になんだって構わない…けれど、考えてみるとやっぱりどうしても聞きたいことがあるんだよな」
「はい！！私でよろしければなんでも！！」

やったかかった。隣でやどりがジト目でこちらを見てくるのは気のせいだとしよう。
かなり嫌な言い回しだったのに葉桜は心底キラキラした目で対戯を見てくる。そこで確信した。
真面目だけじゃなく異常に純粋だ、この子。

「まず、あの鳥の化け物はなんだ？」

未だ放置され続けてる化け物の鳥を指差しながら対戯は尋ねる。鳥はもう疲れたようでぐったりと地面にへばりついていた。
あぁ、と今更思い出したかのような声を上げる葉桜。

「はい、あれは怪鳥江蛾留侘（えがるた）です。古より言霊遣（いにしえ）いの従者（ことだま）として付き従ってきたものなのです。ですが最近はめっきり数も少なくなってきております。どうやらこいつはやどり様を狙うものの仕業で、無理矢理言霊で思考回路を遮断し、やどり様のことだけを考えるようにさせてしまい、その上での命令、でしょうね。あ、あなたにも見えたのはやどり様に触れたからでしょうやどり様にかかっていた人から認識させなくなる言霊の影響を受け、あの江蛾留侘と同調してしまったわけですね」
「は、おい、ちょっと、ちょっと待て」

今なんて言った？はぁ？言霊ちょっと待て、確かにそれはやどりも言っていたけども、どういうことだ。今、真面目な話だよな？

「も、もしかして厨二病患者とか…？」

「はい？それはなんの病気でしょうか？」

「いや、なんでもない、はは…。あ、あのさ、その…言霊って、なんだ？」

「知らないんですか？言霊は、言葉に宿る力。発した言葉通りに現実とする力、ですよ？」

「いやいやいやいや、待て、待てよ、なんだそのファンタジー？いやファンタジーと言えるのか？っていうか何だよ、言霊って。」

「へ？ん…なんていうか、私たちは『言霊遣い』ですから、使えて何もおかしくはありませんよ？」

「っ…！？」

どうにも嘘をついているようにも見えなかった。かといって、頭がおかしくなったようにも見えない。

あくまで普通で通常で日常的に、葉桜は話している。

どういうことだ？言霊？いや、ちょっと待て、思い出せ。そうだ、あの時も…

『もっと速く』

「……っ！！！！？」

まじか？まじでか？確かにあの言葉の後に、俺の足は不自然に速くなった。

偶然でもなんでもなく、あの言葉のせいで？

言霊？

「…お前たちは…何者だ？」
「何言ってるんですか？言ったでしょう？」

「言霊遣いですよ」

「っ……！！！！！！！！」

まじか？まじなのか？これを俺は信じるべきなのか？
さも当たり前のように言ってくる葉桜。自分たちは言霊遣いだと。
言霊を遣うものだと。
ありえない。この現代にそんな変な能力的なものがあるのか？けれど、否定したくとも心当たりがありすぎる。

「対戯、どうかしたのか？」
「やどり…、俺のキャパシティそろそろダウンしそうだよ…」
「きゃ、きゃぱしてい？」
「ええと、言霊遣い、ですか…、あの、それ、どういう職業ですか」
「…なぜに敬語になるのじゃ？職業と言うよりは…言霊が使える者を言うのじゃが」
「スキル系統かよおい」

すきる？と首を傾げるやどりをうさぎみたいだな、とほのぼのと思いつつも、現実的にありえない話のせいで、思考が拡散し、現実逃避の方向に逃げ込む。
超能力とか、霊能力とか、それに近い言霊遣い。
ありえねぇ、と頭の中で繰り返し呟く、が、冷静な思考がこれは本当のことだ、と静かに答えを出している。

認めなくてはいけない。聞いたのは対戯自身なのだから。
はぁー、と大袈裟なため息をひとつつき、頭をがしがしとかく。深く考えないようにしよう。どうせもう俺とは関係なくなるんだ。

「まぁ、信じるにしても、なんか頭の中ふわふわしてるよ…、ところでその言霊遣いってどうやったらなれるもんなんだ？やっぱり血筋？みたいなもんか？」
「ぬ？違うぞ、本来人間と言うものはもともと言霊というものが使えるものじゃ」
「へ、どういうことだ？」
「例えば…、『頑張れ』と言うと、頑張りたくなる。『ありがとう』と言われれば嬉しくなる。『ごめんなさい』と言えば許したくなる。これだってもともとは言霊の力じゃ。優しい心は言葉にだって乗る。対戯の言う嘘だって言うなれば言霊と似ているようなもんじゃ。ただ、言霊と言う概念を自覚しておれば、私の言ったように肉体を強化することや、物理的に何かをしたりすることも可能じゃ」
「物理的？」
「炎を出したり水を出したり…、」
「それもはや魔術じゃね？」

そう言うとやどりは魔術に例えるなぞ心外じゃ、とでも言うように頬っぺたを膨らました。
失礼に値(あたい)するのか。基準がわからない。

「…ん、ちょっと待て、概念を理解すればなんか、そういう変なの使えるんだよな」
「まぁそうじゃな。言霊の存在を理解してしまえば、言霊遣いとして資質があるものは使えるぞ？」
「俺概念理解しちゃってね？」

……。

「そういやそうじゃな」

「ですね」

「予想以上の反応の薄さっ！？」

「まぁ、かといって一般人にはそう使えるものでもないしか。余程のことが無い限り言霊を発動させたり使いこなすことなどありえん。安心しててもいいぞ？」

「まぁ、言霊という概念と言うものを知らなくても、最初から素質ある人は無自覚無意識に使えたりしますから…、そういうのも無いらしいし大丈夫でしょう」

「…んなら、いいんだけどさ」

どことなく腑に落ちない点があるが、まぁいいとしよう。さっき決めただろ、深く考えるなって。

自分に言霊などと言うものが出来るとも思えないし、ただのペテン使いでしかない俺にはそれを使う理由も無い。

一般人なのだから。自分は。

「…ところであの鳥はどうすんだ？」

「あぁ、江蛾留侘は万葉家に持ち帰り、刻まれた言霊を解除します。操られていただけなので、元を正せばちゃんと気の優しい鳥になりますよ」

「あのカラーで気の良い鳥、か…、まぁいいけど。ついでに聞くけど、万葉家…って？」

「万葉家はやどり様の実家…、言霊遣いとしての名家です。やどり様はその次期当主で…、そのせいで狙われることも多々ありますが…、あ、ちなみに私は楠木葉桜（くすのきはざくら）と申します。楠木家は代々万葉家に仕える身なのです」

「いわゆるぼ、ぼでーがーど、だな！！」

「ボディーガードっていいたいのかそれ」

あぁもうなんだかどっと疲れた、気がする。
頭の中がパンクしそうだ。聞いた量じゃない、その内容のせいで、思考が回らなくなる。
言霊。
あぁもう意味わかんねぇ。わかるけどわかんねぇ。
ふらふらと対戯は近くの木に寄りかかる。それから腕を組んでぎゅっと目を閉じた。
整理しようと思う。まずは言霊の存在。これは実際に体験した上で聞いたのだから信じるほかない。疑いたくても疑う理由も無い。非科学的だ、と切り捨てることも出来ない。
現実に起こっている。これは信じる以前の問題なのかもしれない。あの鳥だって、その言霊遣いのことを考えれば、そうおかしくないことなのかもしれない。だって言葉で何かが動くらしいあいつらの世界の中にいたって不自然でもなんでもない。非現実的なことに非現実なことは、同じでなくとも混ざり合わないわけでもない。理解しなくてはいけない。そうだ、理解しろ、それから。
全て忘れてしまえば良い。

「あー、もう大体わかった。もういいだろ、帰れ」
「帰れ…！？いえ、私はまだ…！！」
「罪滅ぼし的なのは十分だから。俺はもうだいぶ満足したよ。やどり怪我してるんだろ？帰って治してやれ」

精一杯の、人のよさそうな笑みを浮かべてみる。すると葉桜は瞳を潤ませて、酷く感謝したような顔を浮かべてきた。
対戯は内心でたじろぐ。先ほど酷いことを言ったという自覚はあるが、目の前の少女はそれを自覚しているのだろうか。純粋すぎるのは少し恐ろしい。

嘘つきを信じてもいいことは何も無いのに。

「あ、あの、対戯…、」
「ん、どうした？」
「いや、その…、……ありがとう、な」
「っ、」

やどりは柔らかく微笑んで、そう、言った。

「……うん」

対戯はつい曖昧な返事を返す。やどりは訝しげな顔をしたが、すぐに笑顔に戻り、葉桜に行こうか、と手をとりながら背を向けた。葉桜ははい、と笑いかけながら、鳥のほうに近寄り、なにやらぶつぶつと呟いている。それからベンチをどかし、嘴に挟まった石を取る。すると鳥はばたばたと羽ばたきながら、やどりには見向きもしないで飛んで行ってしまった。
それから二人は歩き出す。ときたま振り返りながら手を振るのを、対戯はぼーっとした目で見ていた。機械的な動作で振り返す。やどりたちの姿が見えなくなるまで、対戯は立ち尽くしていた。先ほどの台詞を、頭に反響させながら。
先ほどまでの騒がしさは消え、元々の森の静寂さが戻る。

「…また、ありがとうって、言われた…、」

ぽつり、と零れるように呟く。
二回目だ。今日代夜にだって言われた。それなのになんだろう、この違和感。
頭に不愉快な反響音と共に繰り返し再生される、その声がなぜか頭の中にしつこく留まり続ける。

たった一言なだけなのに。

「なんか気持ち悪ぃ…」

さっさと全部忘れてしまおう。頭をがしがしとかきながらそう決める。自分には自分の日常があるのだ。今日たまたま介入してしまっただけで、本来ならば知ることもなかった立ち位置なのだ。知るだけ知って後は忘れる。無かったことにしてしまう。卑怯だろうか。でも、どうだっていい。俺の世界は俺だけのもの。そう、それだけなんだ。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「へぇ、なるほど…虚室対戯、ねぇ」

見知らぬ女が対戯を屋上から見下ろしていた。大人として成熟した色気の漂う風貌の女は、面白いものでも見るように口元を歪めてにやり、と笑う。かつ、と革靴の音を響かせてくるりと背を向け歩き出す。

「いいもん見つけた。あれは面白い。対戯…、大疑ねぇ、良い名前だ」

あれ欲しいかもなぁ、とくつくつと喉を震わせ笑う。細められたサングラスの奥の眼には怪しげな色と共に鋭さを持った何かの暗い光が紛れ込んでいた。

「嘘つき嘘吐き嘘憑き…嘘は憑いてまわる。過去も未来も現在でさえ。それをほぼ才能でやってみせる、…面白い。面白い面白い面白い。あれ、買えないかな。あたしだったら作り上げてあげれるのに」

傍から見れば意味不明な言葉を口から吐き出して、またにやり、と笑う。

「作りあがっていくというのも、それもまた一興、か」

そう言った顔は、酷く楽しそうで、ぎらついた瞳を隠そうとせず、懐からタバコを取り出して、火を、つけた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「言霊？」

帰り道に言霊って何かわかるか、と聞くといきなりどうしたの、と代夜は不思議そうな顔をした。

まだ幼さが残る顔ですんな表情をされると、同い年かたまにわからなくなる。

「いやいや、別になんでもないよ、ただちょっと聞きたかっただけ」

下手に嘘をつくとこの親友は簡単に見破ってしまうので、言葉を濁すことで踏み込ませなくする。

たまにこれ心読んでるんじゃね？と思うくらい鋭いときがあるが、こうすればその鋭さのあまり踏み込めない事情だと特に聞いてこない。
そんな代夜を内心ではすごいな、と素直に思っていた。
案の定、多少ジト目で見つめてきたくらいで、何も聞かなかった。

「…言霊とは、日本において言葉に宿ると信じられた霊的な力のこと。言の魂と書いて言魂とも書く。声に出した言葉が現実の事象に対して何らかの影響を与えると信じられ、良い言葉を発すると良い事が起こり、不吉な言葉を発すると凶事が起こるとされ、祝詞を奏上する時には絶対に誤読がないように注意された。結婚式などでの忌み言葉も言霊の思想に基づくものである。日本は言魂の力によって幸せがもたらされる国「言霊の幸はふ国」とされた。…以上」
「さすが人間辞書。いや、辞書人間？」
「どっちでもいいよ…」
「いやいやお前記憶力もう異常だぞ？なのにテストじゃわざと悪い点取るからなー。お前なら満点も楽勝だってのに」
「えらく僕を褒めるね…、それにご機嫌だ。いいことでもあったの？」
「…は？ご、ご機嫌？俺が？」
「そうそう。なんだか嬉しそう。そうでなきゃ僕を褒めないよ。…あれ？なんか自分で言って悲しくなってきたんだけど」

うーん、と悩みだした代夜を尻目に対戯は考え込んだ。
ご機嫌？嬉しそう？どうして？思い当たる節といえば先ほどの言霊遣いやらなんやらのことだけど、そこに嬉しいことなんてあったか？
対戯は本気でわからなさそうに首を傾げる。
幼女が降ってきて、変な怪物がやってきて、戦って、倒して、そしたらまた変な女が降ってきた。あれ、おかしい。いいことなんて一つもない。

…やっぱり機嫌よくないんじゃ…。

「対戯はさー天邪鬼だかんねー」
「…は、また言うか。いいかげんやめろそう言うの」
「ツンデレのがいい？」
「……天邪鬼で」
「天邪鬼はねー、本心とは逆のほうを言っちゃう妖怪なんだよ」
「知ってるけど…は？俺別にそんなことしてないぞ？」
「対戯はねー悪いことに気持ち的にも嬉しいはずのことを嫌なことだと考えちゃうんだよねー」
「どういうこと、だ？」
「さらに自覚なし。もう悲しすぎるよなんかー」
「はぁ？」

意味わかんねぇ殴るぞお前、と睨みつけながら言うと、きゃーこわーい、などと茶化された。
へらへら笑って代夜は謝る。が、嘘だ、とか冗談だ、とかは言わない。対戯はわかっていた。こいつは正直なだけ、と。
正直者は本当のことしか言わない。ただ言えない事は隠すだけだ。
その分代夜は自分とは正反対だ、と思う。
なんだかむかついたからぽかり、と対戯は代夜の頭を殴りつけた。
いったぁ、と情けない声を上げる代夜。
ふん、と対戯は怒ったような顔で代夜より先に進み始める。待ってよぉ、と弱々しい声が後ろから降ってくるが、無視だ無視、と振り向かず歩いた。

そんな時、だった。

ばたん、と何か倒れる音が対戯の耳に聞こえた。思わず振り返ると、そこで、なぜか代夜が倒れていた。

「…は？」

転んだのか、と思いきや、なぜか起き上がらない。
どこか調子が悪かったのか、と慌てて駆け寄ろうとしたときだ。

「『近づくな』」

声は違うはずなのに、どこかで聞いた響きだと、思った。
瞬間、体はがちり、と鎖で雁字搦めで縛られたかのように動かなくなる。

「っ…！？」

この感覚に、どこか、覚えがあった。
体の内部に違和感。どこかがぎち、と締め付けられる。動けない。
足も、手も。動くのは口だけ。
これ、は。

「お前だな？俺の江蛾留侘を邪魔しちゃってくれたのは」

口調は軽いのに粘着質を纏わりつかせた声で、対戯の目の前に現れたのは、金髪に、顎に髭を生やしたパッとみて柄の悪そうな男。口調とのそのギャップに一瞬背筋が凍った。
にこにこと口元だけで笑いながら、ステップのように足で軽く跳ねながらやってくるそいつは、得体の知れないもののような気がする。

「困るんだな、勝手に邪魔してくれちゃあ。せっかく上手い具合に

いってたのに、わざわざ俺が来なくちゃならなくなっただろう？どう、責任、とってくれるんだ？」

やばい、これはやばい、本気でやばい。頭の中の警報がフル稼動で鳴り続ける。一歩一歩近づいてく男は、時計の針のようにカチコチ、とカウントダウンをしているようだ。

もちろん向かうのは死。

なんだよこれ、俺また命の危機？とふざけて考えてみる、けれど笑えない。

どうするんだ、時間を稼げ、俺。相手の動きを、少しでも、

だめだ、無理だ、そんなの、こんな、状態で、

もう無理だ、このまま殺されるんだ。そう、思った、対戯が本気でそう思った、ときだった。

「うあああああっ！！！」

だん、と男の体のバランスが崩れる。倒れてたはずの代夜が男に体当たりを食らわせていた。

対戯は半ば呆然としながらその光景を眺める。

「対戯、逃げよっ！！こいつなんかやばい！！」

そういって代夜は大戯の腕を掴み、駆け出す。いとも簡単に体は動いた。

どうして、と思う。なんで、動くんだ…？走りながら頭をフル回転で動かす。

言霊であの男がやったのは体を固めたのではなく動かなくさせるということだったら？

つまり一時的に体の動きを止めるが、それは自分の意思で動けなくするだけであって第三者による何かの衝撃で動けるようになるので

はないことなら。

「お、前倒れてたんじゃっ…！？」

「なんか頭にぶつけられて倒れたけど気を失ってない！！ところであのヤバイ人誰！？知り合い！？またなんか変な嘘ついてちょっかいかけたのっ！？」

「んなことしてねぇよ！俺だって初対面だっての！！」

気を失ってなかった？はて、と思う。倒れただけならあの言霊の声が聞こえていたはずだ。そのせいで動けなくなって、ここまで駆けてくることなんてできなかったんじゃ。

もしかして、あの言霊は対象を設定しないとできないんじゃ？そう、ふと思う。標準を合わせるように設定しなければ、言霊の効果を相手に浴びせることができない。現に代夜は動いていた。

それに代夜に対しては頭を殴って気絶させたということは『言霊』と言う存在を、先ほど知った俺にはともかく、一般人の代夜に対してはあまり知られたくなかった、ということ？

考えろ。この現状を打破する方法を。あいつは追ってくる。どうすればいい？

どうすれば、いい？

「『速度を上げ突き抜けろ』」

がくん、と代夜の体が揺らいだ。

いつの間にか代夜を対戯が引っ張る形になっていたので、思わず自身もバランスが崩れる。

「……え？」

掠れた代夜の声が、ただ疑問の音を小さく漏らした。
世界がスローモーションのように崩れていく。目に映るのは、地面へと倒れていく、代夜の体と、
赤い、鮮血。

「し、ろや？」

わからない。意味が、なにも、わからない。
崩れてく風景がいやに現実味を帯びている。嘘だ。全部これは嘘なんだ。そうだろ？そうじゃなきゃ、なんなんだ。警報が、鳴り止まない。危険、危険だと。
崩壊、後悔、崩れて、崩れて、崩れて、何も、そんな、嘘だ、こんなの、壊れて、壊れ、て。

「あ、はははははははっ！！！当たっちゃったな、間単に人って死ぬもんなぁ？パチンコ玉でこれだ」

なぜ男は笑っているのだろうか。人が倒れたのに。血を流しているのに。
今にも、死んでしまいそうだった。なのに、どうして、平然としていられるのか。
警報が、アラームが、頭の中に響くのが止まない。

「たい、ぎ…、」

弱々しい声が、代夜の口から漏れるように溢れる。

「っぁ、しろや…、」
「はや、く、」

「え？」

「はや、く、に、げて…」

がん、と、対戯の頭の中の警報が、叩き壊される気がした。
男の笑い声と代夜の口から漏れる今にも途絶えそうな息。
狂ってる。こんなの、おかしい。

こんなの、間違ってる。

「あ、」

こんな風に、回る世界も、

「ああ、」

それを受け入れてる奴らも、

「あああ、」

それを日常と、ごまかしてきた、自分も、

「あああああ、」

全部、

「あああああ、」

間違ってる。

「ああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！」

だったらもう、こんなもの、壊してしまえばいいか。

叫びを止めた対戯が、ふらふらと、前へと歩き出す。
面白そうに口元を歪ませて笑っていた男は、不意に気づく。怒りや悲しみよりも先に明確な、殺意を目の前の少年が出していることに。

「なんだ、その顔は、お友達に穴あいてそんなにショックだった？そうかごめんごめん。でもさ、彼のほうが悪くないか？俺の邪魔をして、こんな…こと…、」

喋っていた口が不意に、止まる。
ぱちり、と男は対戯を見た。それから顔を歪ませる。

眼は虚ろながらもひたすら男を映し出し、無表情ながらも、殺意の溢れ出すその姿。
普通の高校生には出せるものとは到底思えなかった。そこまであの友人が大事だったのか？とつい考える。
男にとって、そんなものはどうだって良かったのだが。

「代夜は、巻き込まれるはずじゃ、なかった」
「ん？」
「俺だけなら、まだ、良かった、けど、お前は、間違えた」

かつり、と一歩踏み出す。
それからゆっくりと、対戯は口を開いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　繋ぐ縁

端渡代夜という少年は、良くも悪くも、対戯とは正反対な人間だった。
嘘つきと正直者。これだけの違い、これだけの大きな違い。
正反対の癖に、居心地が良かった。逆の存在の癖に、酷く落ち着くその場所。親友と名づけるべきなのか、これまで唯一、対戯が守らなくちゃいけないと、思ったその人。
背筋をぴしっとして歩くくせに、つついたらすぐに壊れてしまいそうで、酷い言葉を吐けばすぐ泣いてしまいそうな顔のくせに、いくら、どんな言葉を吐いても、彼は顔を少しも歪めることなく、飄々と笑ってみせる。
ある意味それは、対戯にとって必要な存在だった。彼だけは何をしたって―変わることはない絶対的に、対戯にとっ―存在しなくてはならないものだったのだ。
だから、今のこの状況を対戯は、理解してはいけないと思っていた。唯一絶対、変わることのないと断言できる目の前の少年から、鮮血が溢れ出し、その存在の終焉を迎えることなど、あってはならないからだ。
そう、あってはならない。
けっして、あっては、ならない。

「ははは、なんでそんなにキレてるんだ？おいおい、今は自分の命の方が危ないんだぞ？まったく、そんなにお友達ゴッコが楽しいわけか？近頃のガキにしたらいい方なのか？」
「……」
「まぁなんだっていいさ、こちとらも本来の目的があるんでね。お前が助けた女の子を俺たちのところへ持ってこなくちゃいけないわ

けよ、わかる？お前のせいで台無しになった計画が、さ」
「……」
「だんまり決め込むわけ？まぁいいさ。俺たちはお前が邪魔だって踏んでる。なんたって言霊遣いでもないお前があの江蛾留侘を倒したって話、かなり話題になってるんだよ。これでもし、あいつがお前に興味か何かを持って…いや、これから死ぬ奴に聞かせる話じゃないな」
「……」
「最後まで何も言わないのか？ふん、なら、せめていい悲鳴でも聞かせてくれよ、俺だってすぐ向かわなくちゃいけないからな。恐怖のどん底にでも落ちて悶えながら、死ねよ」
「……が」
「…ん、」

「格下が」

ぴたり、と男の動きが止まる。
対戯の口から、温度のない言葉が次々と溢れ出す。

「弱者には強気で戦いに望むか、典型的な下っ端だよなお前。どうせならさっきのパチンコ玉で俺たちが気づかれないうちに殺せばよかったんだ、なのにお前はわざわざ俺の前に出てきた。それからグダグダと喋りやがって、自分が優位に立ってるからってそんなに余裕を振りかざしてさ、そんなの俺は見てもなにもすごいと思わねぇよ、冗談じゃねぇ。それほどまでに自分の力を誇示したいか、格下風情が」
「…なに、言ってんだ？そんなこと言える状か？」
「黙れ。代夜、…関係ない一般人巻き込んだ挙句どういうつもりだよ。狙うのが俺だけならまだ良かった。それなら、まだ良かった。むかつくけど、イラつくけど、俺だけなら、まだ、良かったんだよ」

「はっ、…意味わからない、ね。それはお前の責任でもないといえるのか？」
「あぁ俺のせいだ。俺が変なことに関わったからこうなった。俺のキャラじゃないことをやって、俺は何やってたんだろうな。…でも、こいつは、代夜は、何も関係なかった。俺一人だけ、関わったのに、なんで代夜まで巻き込まれる必要があるんだよ、どうして、」
「ごちゃごちゃうぇせぇな…、そんなにお友達と一緒にいたいんだったら、すぐに俺が送ってやるよ。あの世にだけどな」

口元をひくひくとさせながら、あくまで余裕の姿を変えようとはしない男。だけれど対戯の言葉はかなり男の怒りの線に触れていた。けれどそれをおくびにも見せずに、男はにやり、と笑ってみせる。今すぐにでも殺してしまいたい衝動に駆られていたが、それでは面白くない、と頭の中で誰かが囁いた。
恐怖でひたすら甚振ってから、残虐な方法で殺してしまおうと。

「くだらない」
「…あぁ？」
「お前の攻撃なんか、俺に効くもんか」
「本気で言ってるのか？それは」
「本気で思って何が悪い？」
「…馬鹿が」

男はポケットから小さなパチンコ玉を取り出す。それを空に放り投げて、掴む。
最初は肩を狙ってやろう。次は腕、足、腹、だ。
痛みに耐え切れなくなり、自分に泣きながら跪いて許しを懇願してくれば、その頭を踏みつけてやろう。
そう考えればあまりの愉悦に口元がにやつく。
パチンコ玉の標準を対戯に合わせた。それからぴん、と弾く。

「『真っ直ぐに突き抜けろ』」

力と成りし人の言葉。残酷な人間は冷たく人を文字通り『傷つける』言葉を吐く。

何も知らず、何もわからず、ある意味それはもっとも純粋な感情。

だからこそ、ここまで非道になれる。

放たれたパチンコ玉は真っ直ぐ対戯を貫くために発射され、勢いよく向かう。

このままでは代夜と同じように、体に撃ち込まれてしまうだろう。

けれど対戯は避けようとしなかった。ただ、すべて抜け落ちてしまったように、ぶらりと虚ろな目のままでいるだけ。

けれど、ただ、ぽすん、と。

「……え？」

パチンコ玉が対戯に当たっても、貫かれることも無く、鮮血を溢れさせることも無く、ただ重力に従って、落ちた、だけ。

「…は？」

慌てて男はポケットからパチンコ玉を取り出し、対戯に向かって言霊を吐きながら投げつける、が、何も先ほどと変わらず、ぽとん、と落ちる。

何回も投げても。

何度言葉を紡ごうと。

玉は、届かない。

「どういう、ことだ…っ！？なんで攻撃できない！！」
男に焦りの色が見え始める。慌てながらポケットに手を突っ込むが、もうすでに使えるものは無くなってしまっていた。
攻撃が、当たらない。いや、当たってはいるのに、傷一つつけることが出来ない。
「…言った、だろ？」
酷く落ち着いた声で。色も光も感じられない空虚しか存在しない声で、対戯は、ただ呟く。
一歩、踏み出して。
「と…、『止まれ』ぇ！！！」
「…」
止まらない。
「な、なぜだっ！？なぜ止まらない？なんで、『止まれ』…！！！『止まれ』ぇぇ！！！」
「お前の、」
「と、とま、『止まれ』！！『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』！！！！！！『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』『止まれ』ええええええぇぇ！！！！」
「お前の、」
一歩、また一歩。言霊が確かに対戯に響いてるはずなのに。それなのに、何一つも対戯はそれに従わない。

狂ったように言葉を吐き出し続ける男。言い知れない不安が内部に暗雲のように広がり始めた。
にんまり、と初めて、酷く感情の感じられない顔で、形だけ、笑う対戯。静かに、呟く。

「『お前の攻撃なんか、俺に効くもんか』、ってな」

ただ、一言だけ。
それだけだった。

「は…？」

けれど、男を絶望させるのには、十分だった。

「こと…だま…だと…？」
「さぁ」
「お、お前、普通の、人間なんじゃ…？」
「普通の人間だろ。言霊遣いだって、所詮人間だ。汚く、穢れて、壊れて、狂って、愚かで、イカれて、崩れた、…愛おしき、人間だ」
「…っ！？」

恐怖。目の前の、ただの少年のはずの対戯に、酷く重い恐怖を男は感じた。
言うならば黒。深いその色の中に引きずり込まれていくような、闇ほど優しくもない、『黒』。
虚ろな、光を消したその瞳はただ冷たく男を見下すように見つめる。
冷たく、冷え切った、何も灯さない瞳。
ペテン使いは許さない。自分の大切なものを傷つける奴は。

嘯いてあげましょう。嘘さえも真実にしてしましょう。
ペテン使いは許さない。何一つだって、許さない。

「…さて、どうしようか？」
「は、」
「刺して絞めて斬って抉って千切って？いで潰して壊して崩して、どうされたい？どれだけやってやろうか？お前が望んでたんだよなぁ？残酷な殺し方。お前がやりたかったこと、全部俺が代わりにお前にやってやるよ。それこそ、バラバラのぐっちゃぐちゃになるまで」
「お、お前みたいにガキに出来ると思ってるのか…！？」
「出来ないとでも思ってるの？愚かな言霊遣い」
「…っ！？」

こいつは本気だ。男は思う。
本気で自分を殺そうとしてくる。一般人が。ただの、一般人に。なんなのだ、この不安は。恐怖は。絶望は。自分は言霊遣いではないか。言葉により力と為し、強く在るそれ。なぜ、なのだ。自分は強い。選ばれた存在だ。なのに、なぜなのだ、なぜ、なぜ？なぜ自分は、一般人であり、普通でしかない、ただの高校生に、こうも、畏怖しているのだ。自分は強い。強いのだ。それなのに、なぜ？
男は気づかぬうちに一歩後ずさっていた。その瞬間、バランスが崩れ、体の力が抜けて地面に尻餅をつく。
冷えた、軽蔑しきった視線が男を貫いた。ぐわんぐわんと、男の揺れる視界の中、対戯が、ゆらり、と歩み寄ってくる。
やめろ、やめてくれ、お願いだ、許してくれ。男は必死に喚くが、対戯はまるで聞こえてないとでも言うように歩みを止めることはない。
男との最初の場面のように。死ぬまでの、時計の、針のように。単調に。確実に。迫る。

恐怖や緊張などが交ざりに混ざって、男はパニックを起こしていた。死ぬ、死ぬんだ。死ぬ。死んでしまう。なんなんだこいつは。死ぬ。化け物か？死ぬ。言霊遣い相手に。死ぬ。ここまで。死ぬ。するなんて。死ぬ。
自分の下半身が濡れていると気づかず男は泣きながら叫ぶ。ただ対戯は冷たい眼でそれを見るだけ。

「格下が」

冷たく、そう、呟いた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「ったく、あのおっさん、俺が代夜のためなんざにあんなになるとお思いかなー…」
「え、それ、酷くない…？結構僕大怪我なんだけど。あのままだったら出血多量で僕死んでたよ。まぁでも結局僕を見捨てず助けてくれたもんねー」
「最後にあんな台詞吐かれて逃げたら俺へタレになっちまうだろ。お前なんざどってことねーよ」
「うわ酷い…。まぁ照れ隠しだって知ってるけどさ」
「お前が眠ってる間俺死ぬかと思ってたんだぞ。まぁ、ぎりぎりだったけどさ」
「そういえばいったい何してたの？あのおじさんって誰？」

「覚えてない。知らねぇ」
「対戯ぃ…」
腹部が血だらけの代夜を背負い、対戯は病院に向かって歩いていた。代夜の打たれたところは、急所を外れていたので一命を取り留めていた、のだが、さすがに顔は青ざめていて、時折顔を顰めていた、が一言も痛い、と漏らさなかった。
とりあえず、目覚めた代夜の言葉に従い止血して、今に至る、と言うわけだった。
あの男は倒れたまま縛り付けて口にガムテープを端って放置し、警察に不審人物を捕まえましたと匿名で電話をしておいた。

「ねぇ、対戯」
「ん？」
「ありがとね」
「…」
「僕知ってるよ。対戯はさ、本当はこう言われるの苦手なんだよね」
「…苦手？」
「うん。知ってる…、と言うより、わかるんだ。僕は嘘が、わかるから」
「…」
「天邪鬼っていうより、対戯はさ、自分にも嘘ついちゃうから。だからさ、僕がどれだけ感謝してても対戯はなんにもわかってくれないっての、僕は知ってる。だからさ、あんまり、言わないようにしてた、けどさ。これまでも」
「…」
「でも、たまに思うんだぁ。それって寂しくないかって。今日不良に助けて貰ったとき、僕、『ありがとう』って言ったでしょ？そのとき、対戯、どんな顔してたかわかる？…泣きそうな顔してたんだよ？」

「…まじか」
「まぁ僕にしかわからないだろうけどね」
「…」
「ありがとう、対戯」
「…」
「あの時だって、どの時だって、僕は君に感謝してたんだよ。今しか言うときがないから、こういう時じゃないと君は聞いてくれないから」
「…ん」
「あ、素直になった」
「お前の恥ずかしさにしんどくなって血吐きそうだったところだ」
「酷っ！？」
「ひどくねー」
「えぇー…」

軽口を叩きあいながら、病院への道をゆっくり歩く。速く歩いてしまったときに、傷が痛むのか微かな呻き声を上げていた。出来るだけ傷に負担がかからないよう、歩く。
ふと見上げた空は、むかつくくらいに雲一つ無い。本日は晴天なり。くそったれだ。

「ねぇ対戯ー」
「んー？」
「何もさー、聞かないけどさー」
「…」
「気をつけてね」
「…俺たまにお前がわかんない」
「人の心がわかる人間なんていないよ。僕だってそれで歯がゆく思うときがあるさ。でもさ、それでも気づくことだって、あるかもしれない」

「…」
「こういうとき対戯あまり喋らないよねー…。僕意識飛ばさないように必死だってのに」
「お前が喋るから俺は喋らないの。人のせいにすんなボケ」
「うう、やっぱ対戯酷いなぁ…、やっぱ影で対戯はツンデレだって広めるか」
「…地味に嫌なんだけど。俺そんな萌えステータス頂いたことはございませんが」
「いやいや、需要はあるかもよ？嘘つきで意地っ張りで皮肉屋の上でツンデレ。案外女子に受けるよ？そういうアニメキャラも多々いるとして」
「そういう乙女ゲー要素を俺に入れろと？女子相手に甘い言葉を囁けと？それこそキャラじゃねぇだろ」
「ううん、そういうのじゃなくてツンデレを全面に押し出すことのがいいな…。ほら、よくあるじゃん。『お前は眼を離すと危ないから俺の傍にいろ』、的な？」
「いや無理。ていうかどっちかって言えばツンデレは女子だろ。金髪ポニーテールで真面目っ子。『男子！掃除しなさい！』みたいな子」
「んー、僕は素直になれない幼馴染系で。『ほら、早くしないと遅刻するじゃない！』って毎朝起こしに来てほしい。僕幼馴染いない上に早起きだけど」
「ベタだなー…、いや、だからいいのか。俺だったらアパートに一人暮らしで、毎朝未亡人の管理人さんが起こしに来てくれたらいい」
「それエロゲじゃないの…？あえての未亡人で来たか…、じゃあ僕は近くに住んでる大学生のお姉さんで。免許もっていて、たまに車乗せて行ってくれたり、彼氏に振られたとか言って泣きついてきてそれに付き合ったり…最終的にいつのまにか身長を追い抜き男らしくなり、お姉さんを女として意識し始めた主人公にお姉さんが『あれ、私…恋してる？』って気づき始めて、それから姉と妹のような

ものから、意識しちゃう関係性になって行く、最終的には思いが通じ合うトゥルーエンドで」
「それはギャルゲか…？じゃあ俺は病弱な妹系で。幼い頃から『お兄ちゃん好き！いつかお兄ちゃんと結婚するの！』って言ってくる近所の女の子件後輩。その女の子がある日入院。結構重い病気らしい。それを知った主人公は毎日病院を訪れるようになり。そこから近づいてく二人の距離。女の子は主人公のことが小さい頃から好きで、主人公は自覚が無い感じ。最終的には手術前に女の子が恐怖で病院から抜け出して、主人公がそれを追いかけ見つけ出す。主人公はそれでやっと自分の気持ちに気づき告白。勇気をもらった女の子は手術に臨み、成功。っでトゥルーエンド」
「対戯感動モノ好きだよね…。ところで対戯は姉系と妹系どっちが好きなの？」
「ボクっ娘」
「予想の斜め上…、はっ、僕っ娘…？まさか対戯、僕のことを…！」
「うぜぇ引き千切るぞ」
「どこをっ！？」
「病院見えてきたぞー。そろそろ黙れ。あと言い訳俺が考えとくから適当に誤魔化しとけよ？」
「…りょーかい…」

盛大にいつの間にかずれていた会話に気づかず、病院の中に入りっていく二人。その姿は病院の中へと消えていく。
その姿を見つめる女がいた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

代夜はしばらく入院、という話になった。
幸いにも傷は浅く、医者には改造した銃を持った不審者に襲われた、とそんな内容の話を説明しておいた。
警察に連絡、という件で、ありもしない不幸話を散々捏造し、同情を誘った結果、通報やらなんやらはなくなった。
あの言霊遣いの男は今頃連絡を受けた警察に捕まってるだろう。さすがにたくさんの一般人相手に簡単に言霊を使うというわけにもいかないはず。
もしこういう連絡が警察にいけば、自分たちがいろんな説明をしなくてはいけないだろう。そうして、必然的に男との関係性が示唆される。
もしこっちが知らないと言い張っても向こうは知っているわけだ。そうなれば、どうやって撃たれたかの話になるかもしれない。
改造された銃と説明したのだ。けれどそれは対戯の嘘。それがバレれば、面倒くさいことになりそうだった。
言霊なんて非現実的なもの。

「ってかあれなんだったんだろな…」

あのとき、どうして効かなくなったのか、と思う。
まさか自分が言霊というものを使えるだなんて思えない。いくら概念を理解したとかどうとかで…いきなりそんな風に使えるようになるとか、そうは思えなかった。
動きの方は別だった。手のひらにある鋭い傷跡。対戯はその石を強く握り締め、痛みを感じることによって、一自分の意思と反する感覚を常に浴びせ、あの言霊に操られないようにしただけなのだ。
言霊を使った覚えは無い。

え、いや、自覚ないものなんですかそれ、え、俺使っちゃったんですか？と誰かに聞きたくなる。
やどりと葉桜はもうここにはいない。聞く相手はどこにもいない。いうなればあの男、だけれどそれは却下だ。きっとまた殺されそうになるはず。
とりあえず誰か断言してくれ。俺は言霊を使ってないと。

「って誰もいねぇよな…」
「何が？」
「いやだから…ってぇ！？」

返事が来るとは思っていなかった。ぶんっと振り返ると、けらけらと笑うサングラスをかけた、対戯よりも随分と背の高い女性が立っていた。

「おっす」
「おっす…ってはい！？どちらさまっ！？」
「あたしとのあの熱い夜を忘れたのか」
「身に覚えが無いっ！？」
「あたしとの関係はあの一晩だけだったっていうのか…！？そこまで…あたしは安い女か…」
「え、悪いの俺？身にまったく覚えが無いんだけど。初めて会った気がするんだけど」
「その程度！？あたしはその程度なのか！！」
「あぁもう面倒くせぇ！！！」
「まぁ今日始めて会ったんだけどな」
「やっぱりかよちくしょう！！一晩もたってねぇよ！！」
「けどあたしは見てたぜ…お前のことをな！！」
「あにそれ怖っ！？え、ストーカー？間に合ってますんで。ぜひともお帰り頂きたいのですが」

「ストーカー！？こんな可憐な美少女捕まえておいてなんていう言い草なんだ！？」
「よしツッコミどころたくさんあるぞぉ！？まずどこが可憐だ辞書引け、それに美少女って自分で言うな！！そのうえ少女って年でもないだろあんた！！それから俺はあんたを捕まえてない声をかけてきたのはあんただろうがぁ！！」
「よし合格だ…お前に教えることはもうない…」
「何も教えられてねぇよ！？てかなんだそのキャラ、どこぞの師範かっ！？」
「お前よく喋るな、疲れねぇのか！？」
「あんたのせいだろが！！！」

なんだこれ！？すごく疲れる！？と、対戯は膝に手をついて大声の出しすぎで荒くなった息を整える。目の前の女性はけらけらと豪快に笑っている。
なんなんだ。なんなんだこの人は。
ふいー、と背筋に嫌な予感が駆け巡った。あれ、この知らない人と変な風に出会うパターン、これで何度目？嫌な予感がした。いや、目の前の人からは嫌な予感と言うか、変人オーラをびしばし感じて、出来たら関わりあいたくないタイプだ。

「で、では俺はこの辺で…」
「いや待てよ」

がしり、と肩を掴まれた。ちくしょう、いきなりで不自然すぎたか！！対戯は舌打ちして睨み付ける。すると目の前の女性は一瞬ぽかんとして、やだな見つめるなよ照れるじゃねぇか、と頬を染めた。…勝てねぇ。この数分の会話により対戯は直感した。
「まぁまず自己紹介からだな。あたしは蘇鉄縁（そてつえにし）ってんだ。苗字だけ

だと男の名前みたいに思われるかんな。気軽にえんちゃん、えにぴー、えにえに、えっちゃん好きな呼び方で呼んでくれ」
「わかりました縁さん。帰っていいですか」
「つれないねぇもっと女性には紳士的に接するものだよ」
「淑女とはかけ離れたあんたにそんな対応をしろと」
「ったく、ほんっと可愛くないガキだ。まぁその方が可愛げがあるんだけどよ」
「言ってることが矛盾してるんじゃ…」
「はいはい、じゃあそしらぬフリはそろそろやめろよ」

縁のサングラスの奥の目線がふいに鋭くなる。思わずびく、と肩が小さく揺れた。

「うすうす気づいてんだろ？虚室対戯。あたしがどういう方面の人間なのかを。お前はそこまで頭が悪いわけでもねぇだろ。少なくとも今日はお前にとって信じられねぇもんばっかだったもんなぁ？」
「な、名前、なんで…」
「まぁお前みたいな人間は面倒ごとにあまり突っ込みたくねぇタイプだよなぁ？自分の世界観を壊したくないっつー奴。その癖して自分の世界に存在するもんは何が何でも傷つけたくない。いまどきぁあ珍しいもんだよそんな捻くれたフリした臆病者」

すらすらとそう対戯のことを簡単に語ってのける縁。
何故か吐き気がした。先ほどまでの軽い調子とは裏腹に、どこまでも底の見えないその笑みの奥で、何を考えてるというのだろうか。

「…何が言いたいんすか」
「何か言いたいわけじゃねぇよ？お前みたいな奴は面白ぇってだけ。あたしは気に入ったもんは全部あたしのもんだからな。だから今ここにいんだよ」

「それどういう俺様発言っすか…」
「くくっ、でも坊ちゃん、知りてぇんだろ？お前にとっての疑問。あたしなら教えてやれるぜ？多分お前の考えはあってるからよ。なぁ？」

どことなく悪魔の囁きのような気がする。にやりと浮かべる笑みの奥底には、いったいなんの企みが沈殿しているのだろう。
恐ろしくもあり、好奇心を刺激する甘い言葉。
知りたいだろう？なら教えてやるよ。
多分対戯の考える縁という女性の属するものが何なのかは見えている。そして、縁はそのことに気づかれてると知ったうえで、睦言のような囁きをしかけてくる。
教えてやる。単純な言葉でも、どことなく深い裏側に通じてる気がした。

「…何を企んでるんですか」
「企んでる？心外だな。親切心さ」

胡散臭さを抜けさせないまま、外面を完璧に貼り付けて、突きつけてくる誘惑の糸。
知りたい。知りたいさもちろん。けれど、今度知ってしまえば、何かが変わる。
もう戻れなくなる。

「言っておくがあたしは悪魔でもなんでもないぜ？そんなとって食いやしねぇし、そんな怖い眼で見んなよ。照れるだろ」
「…照れるんですか…」

やっぱりこの人はよくわからない、と対戯は思う。
重い威圧感を湧き出させたと思ったらいつのまにかそれは軽く明る

い雰囲気へと変えている。

「それとさっきのお話ですが…お断りさせて頂きます」

「へぇ、なんで？」

縁は値踏みするような視線を向けてくる。

「俺は普通のままでいいんです。知らない世界は知らないままがいい。深く突っ込みすぎてもいいことなんざないんです。何一つだって」

「言うねぇ。でもお前、随分と一般人ながら踏み込んできてるぞ？例えばさっき襲われるくらいには、な。もし言霊の効果が切れなかったら、お前今頃体中穴だらけだぜ？」

「…やっぱり、あのパチンコ玉の効果が切れたのあんたのせいだったんですね…」

「おや？どうしてそう思う？」

「そうとしか考えられません」

「まぁ正解だけどな」

くくっと縁が瞳を細めて笑う。

「あたしがまぁ、それで聞きたいことがあったんだよ。お前もし、あたしがいなかったらあのまま打ち抜かれて血まみれだぜ？んなのになんであんなこと言ったんだ？」

「…なんていうか、血がどんだけ出ようとどんだけ痛かろうと、絶対立っていようって、だけ」

「はぁ？」

「なんて言われようとさ、あいつ、すごくむかついたから、負けられないって…、そんだけっすよ」

「…案外単純だなお前。さすがのあたしも驚きだわ。わりと熱血な

ところもあんのな」
「…別に、そういう人が、いたから」
ふい、と対戯は目線を逸らす。縁はふーん、と簡単な相槌を打った。それからまたにやり、と怪しい笑みを浮かべる。
「そんな人のいい虚室対戯くんにあたしは、頼みたーいことが、あんだよなぁ…？」
「…はぁ？」
「お前なーんにも聞いてくれそうにもないし、こうなったら、押し付けちゃえ☆的な？」
「はぁっ！？んなの嫌に決まってるでしょうが！！」
「まぁまぁ、諦めろよ」
「っ！なんであんたに勝手に決められなきゃ…！」
つい、と。額に指を指された。
ついびくり、と体の動きが止まる。にたにたと笑みを浮かべていた顔が、その一瞬のうちに冷たく色を無くす。
「あたしがお前に拒否権を与えると思うか？ペテン使い」
「…っ！？」
なぜその渾名を。口を開きかけたが、すぐに閉じる。
「面白いネックネームだよなぁ。嘘使い（ペテン）。臆病者の嘘つき。情けないよな。嘘をつかないと自分を守れないなんて」
「…っ、」
「内心は弱いくせに。弱くて脆くて壊れやすくて傷つきやすい癖に、嘘で全部を塗り固めて、それでまた嘘をつく。情けねぇよな、ペテン使い。お前の本心はどこへ行った？」

「だ、まれ…、」
「強い振りして嘘をつき、これまで歩いてきて何を手に入れた？外面だけを取り繕うお前を誰が信じる？…あぁあの親友くんか。でもあの子でさえ守れたか？その嘘で。生きてたからまだ良かったものの、下手すりゃ死んでたぞ？」
「…」
「いやぁ一番わかってるのはお前自身か。いいか、それでもお前にあたしは言ってやるよ。お前はあの子を守れなかった。何一つ、な？」
「…っ！あんた、は…何が、言いたいんだ…！？」
「簡単さ。お前は強くなりたいとは思わないかってな」
「は…」
縁の手が優しく対戯の髪を撫でる。
「お前には、素質があるんだ。言霊遣いの、な」

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　守るべき者

最悪だ。
最悪、最低、絶望、だ。
メランコリックな感情という程優しいものじゃないこの感覚はなんなのだろうか。
あぁ気分が下がる一方だ。

「んー？対戯ちゃーん何してんだー？」
「うっわさらに面倒くさい奴がきた」

対戯がぼんやりと窓の外を見ていると、いきなりへらへらと笑いながら、ヘッドフォンを首に巻いた男がとたとたと歩いてきた。
芙蓉京（ふようきょう）。どれだけ対戯に騙されても平然と近寄ってくる人間。代夜と違い簡単に騙されるはずなのになぜだか対戯に懐いているようだった。

「アンニュイな気分とかー？対戯にもそんなときがあるんだなー」
「うぜぇ近寄るな消えろきもいうぜぇ」
「ひどっ！？ってかうぜぇって二回言ったし！！」
「はいはい、わかったから消えろ消えろ。しっしっ」
「うわお前絶対酷い！俺のこと嫌いなのっ！？」
「…」
「なんで黙るのっ！？否定してよ！！うわああん俺一人ぼっちいいいっ！！」
「あーほら飴やるから騒ぐな」
「あー飴貰った――…って俺高校生だよっ！？いくつだと思ってるの！？」
「…」

「だからなんで黙るのぉ！！」

ぎゃーぎゃーと騒ぎながら、それでも京は対戯の横にまでやってくる。はぁ、と対戯はため息を一つつき、もう特には何も言わない。明るくていい奴だというのは対戯は理解はしていた。けれどそれだからよくわからない。なぜ自分のところに来るのか。

こっちはそれなりに酷いこと言っていたはずだけれど。最近こいつはMじゃないのかって疑い始めてる。

「…はー…」

「ため息つくと幸せ逃げるよー？」

「うざい」

「…ほんとそれしか言わないの…？なんていうか辛辣…」

ため息の原因というのは言うまでもなく、昨日のことだ。

蘇鉄縁（そてつえにし）と名乗った女性に、散々言われて、最終的には勧誘された。

言霊遣いにならないか、と…。

とりあえずなりたくない、と答えて逃げた。

まぁ他にもいろいろ言われたが、全て忘れることにする。

けれど、いろいろありすぎて、忘れられないのが今の惨状。

結局その憂鬱な気持ちをため息に吐き出してるのが今だ。

「なぁ、もし…えーと…いきなりお前には勇者の資格があるから勇者になれって言われたらどうする？」

「いきなりだな…、なんだよそれ、ＲＰＧ？」

「うっせぇ」

「なんだよもー…、えーと魔王とかいないの？」

「ん、いない」

「えーと、敵は？」

「特には」

「…それ勇者になる意味あるの？」
「ないから困ってるんだよ。なのに、えーと…長老？が『なろうぜっ！』って結構有無を言わさない感じで脅してくんだよ」
「随分おっそろしい長老だな…それなんのゲーム…？」
「お前ならどーする？」
「かなり答えに困る問題だな…」
「だろ？」
「理由もなんもないのに勇者なんかになれないっしょー」
「…だよなぁ…」
「で、対戯どーしたのー？」
「逃げた」
「へ？」
「長老から逃げた」
「ええー…」
「だから追ってくるかも知れない」
「だろうねー…」

理由が無い。そうだ。そうなのだ。
そもそも、言霊遣いになる理由もないし、勧誘される理由も無い。
空欄のままで、ただの気まぐれで誘われたとしか思えない。
自分はただの嘘つきでしかないのだ。
縁が何を考えているのか、対戯にはさっぱり理解できない。

「んーでもさー、」
「ん？」
「理由無くても、やりたいって思ったならやればいいんじゃないのかな？」

なんてことのないように京が呟く。

「ほら、やって後悔、よりやらなくて後悔の方が辛いっていうじゃん？」
「…」
「そもそも勇者になんないとさ、物語始まんないし」
「別にならなくても始まるんだけどな」
「…ねぇやっぱそのゲーム何？人生ゲームとかなんかなの？」

京はやはりゲームのことだと思っているようだった。
やっぱり何も知らない奴に聞いてもな…、とげんなりする。
少しでも他者の意見が欲しかった。けれど、例のことはあまり言うわけにはいかない。
非現実なことを、誰が信じるというのだ。
あの親友だけは、対戯の嘘を見破ってしまうので信じてくれるだろう、が、彼をそう巻き込むわけにはいかないのだ。ただでさえ傷つけて。

「はぁ…しんど…」
「ん、ゲームの攻略上手くいかないの？」
今こいつをすごく殴りたくなった。

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

「よぅ、昨日ぶり」
「……」
「なんだ？照れてんのか？愛いな奴めー」

予想してた、予想してたさ。うん、もちろん。
名前知ってるくらいだし？　俺見てたくらいだし？　そりゃあ来るだろうなぁとかはそう思ってたさ。
でも、でも…、

「なんていうかもう来たことはどうでもいいっていうかあんたなんだよなんでここの制服着てんだよ成人してる癖にいいいいいいいいっ！！！！！！！！！！！」
「うるせぇな、似合うだろ？」
「せめてならグラサンとって手に持った煙草捨てろ！！」
「無理、グラサンはともかく煙草はあたしの命の糧なんだ、それを奪うってのか！？」
「ただのニコチン中毒者だろうが！！」

なんだこれ、なんだこれ。本気で頭を抱える対戯。
もう本当全てが夢だと思いたい。
学校が終了し、特に部活には入っていない対戯は、そのまま帰ろうとしたときに、遭遇してしまった、今一番会いたくなかった人。
はっきり言って浮いてる。なんかいろんな人がちらちら見てる。ちなみにここは学校の敷地内。
なにこれもうやだ。

「ん？　あたしと会えて嬉しいかー？　この美少女アイドル、蘇鉄縁ちゃんに会える機会はあんまりねーぞ？」
「生憎俺アイドルとか興味ないので」
「なぁ、アイドルって、宗教用語で、崇拝するものって意味なんだぜ…？」
「崇拝しろって言いたいのかあんたは！！」
「え、してるだろ？」

「その勘違いを海の彼方に放り投げたい」
「よし、靴を舐めさせてやるよ跪け」
「なんのプレイっ！？俺の言ってたこと聞いてましたかあんたは！！」
「ん？あたしがいかに素晴らしく美しいかってことだろ？」
「うんわかった何も聞いてないねこの人」
「わかったならよろしい。もうするなよ」
「え、何これ俺が悪い流れなの？おかしくね？」
「さぁ！あなたも言霊遣いになりませんか！！」
「あぁあ何その勧誘ってかやっぱりその話しに行くのかよちくしょうううう！！！」

もうやだ、すごくやだ！！にこにこと笑う目の前の女性を見てると対戯は泣きたくなってくる。
これ強制イベント？回避無理なの？

「しょうがねーだろー？こちとら人員不足なんだよ、だから少しでも有能な人材とか有能じゃないけどいると役立つ人材とか、無能な上に役立たないけどパシリくらいには使える人材とか、」
「ツッコミたくなかったけどあきらかに最後の絶対おかしいだろ！！！」
「大丈夫だってー、いくらなんでも高校生を殺すような真似しないってー」
「今明らかに爆弾発言したこの人！！え、なに、あんたらってそんな殺されるような物騒なことしてんの？」
「…あ」
「何いかにも口が滑りましたって顔おおおおおお！！！？断ります！、全力で俺断るんで！まだ高校生だし、死にたいとか考えてないので！」

縁に背を向けて全力で走り出す対戯。だが、それ以上のスピードで縁は追いかけてきて、たやすく対戯を捕まえる。

「まーまー逃げんなよー？なぁ？いいじゃねぇか？もう少し話し聞いてくれたって、なぁ？」

「嫌だ！！命がけとか無理！ってか何あんた、ただの高校生に何させようとしちゃってんですかっ！？生憎俺は非日常とかファンタジーとかあんま興味ないんで！！」

「残念だったな、あたしは興味ある」

不意に縁が声のトーンを落とす。

うぐ、と一瞬対戯の動きが止まった。苦手だった、この声が。

全てを見透かし、それでもなお深くまで入り込んでくるこの声が。

「別に無理矢理ってわけじゃねぇ。誰だって人権ってもんはあるからな。つまり、あたしはお前に対しで、無理矢理はできない…、でも、それだけだろ？」

「…は？何が？」

「つまりお前が望めばいいわけだ。言霊遣いになりたいと。強くなりたいと」

「…？」

言っている意味がわからない、と対戯は首を傾げる。

縁は意味ありげにふふん、と鼻を鳴らした。

「男は誰だって強くなりたいって思うときがあるもんなんだよ、ばぁか」

それだけ言うと、くるり、と背中を向け、かつかつ、と革靴の音を立て歩いていってしまった。

ひらひらと、振り返らずに、手だけでさよならと言う縁。
残された対戯は、しばらくぽかん、と口を開けていた。

「…なんだったんだ…？」

どうしてもわからない。
強くなりたいと思うとき？なんだそりゃ。
それだけじゃない。その言葉を呟いたときの、嫌に、寂しげなサングラスの奥の眼。
わからない。なんであんな顔をしたのか。
あぁ、もう、面倒くさい。

「…なんにしたって、言霊遣いになる気ねーし…」

忘れよう、とこれまで何度思ったか。
忘れようと思っても、何も忘れられなかった。
あの鳥の化け物。やどりの笑顔。葉桜の泣き顔。言霊。縁。あああ、もううざったい。
なんでどうして、関わってくるんだ。介入してくるんだ。俺はこのままでいいというのに。
生温い日常の中で、日々を変わりなく過ごしていく、それでいい。
それがいい。十分なんだ、それで。
強くなりたいって思うときがくるときはきっと、それら全てが崩壊してるんだろ？
そうでもしなけりゃ、対戯は言霊遣いになる気はない。
対戯の世界は対戯のものであって、他のものが干渉していいはずがない。
いろんなものが混ざり合ってしまう世界だなんて、認めない。
自分は自分のまま生きていく。重荷なんてものは背負わずに。
そうやって、今まで来たじゃないか。

『――――――の、――めに、私は嘘をつくんだ』

桜の散っていたあの時、あの人だって言っていた。

『傷つけられないために、負けないために、――な――を、――――くために』

ところどころノイズがかかり、上手くは思い出せないが、自分の憧れだった人が言っていた言葉だ。

あの人からはいろいろ教えてもらった。

丸い眼鏡をかけて、年下の俺にも敬語で喋り、男なのに髪が長く後ろで縛っていて、いつも優しい笑みを浮かべていた、その人。

あの人の言葉通りに今俺はやってきている。

けれどあの人の望んだ形になっているだろうか、と不安にも思う。

自分はあの人にはなれない。

対戯の記憶の中に色濃く残る、桜の似合うあの人。

『――――対戯くん、君は、』

「対戯――――っ、帰ろーっ？」

は、と意識が現実に戻る。振り返ればへらへらとした笑みの京がこちらへ駆け寄ってくるのが見える。

「なにしてたんだ？対戯帰んないの？あ、そうそう俺も代夜のお見舞い行きたいんだよ一緒に行こうぜー？」

「あ、あぁ…」

つい返事がしどろもどろになってしまう。けれどそんな対戯の様子に気づかず、ほら速くー、と気の抜けた声をかけてくる。

――――日常が、全てを流してくれればいいのに。
ため息をつくのを堪えて、対戯は歩き出す。
一瞬視界の端に、桜の花びらが見えた気がした。

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

「頑張れ私頑張れ私頑張れ私頑張れ私！！きょ、今日こそ…！！」
柱の影と言う、ベタと呼べる位置から対戯の姿を見つめる一人の女子。
ショートカットにカチューシャ、地味な部類に入る少女だが、眼はまん丸と大きく、可愛い普通の女子高生だった。

「湯里（ゆり）ー、またストーカーしてんの…？」
「え、えみちゃんっ！！ち、違うよ、私はただ、あの、その…ストレッチを…、」
「言い訳が苦しいよあんた…、話しかけるならさっさとすればいいのに…」
「そ、そんな…！用も無いのに話しかけても、変な人になっちゃう…！！」
「…今のあんたの方が変な人だから。……はーっ、あのペテン使いのどこがいいのか」
「ペ、ペテン使いとかいっちゃだめだよ…ただちょっと嘘吐きなだけで…、」
「あんたね…嘘吐きをオブラートに言った渾名がペテン使いだってのに、あんたが嘘吐き呼ばわりしてどうすんの」
「あう」
「話しかけるんなら、さっさとしちゃいなさい。ほら、もう行きそ

うよ？」
「ううううーーー…、う？」
顔を赤くして項垂れていた湯里だったが、ふと戸惑いのような声を上げ、キョロキョロと周りを見回し始めた。
友達の少女は訝しげに湯里？と声をかける。

「今、着物着た小さい女の子いた気がしたんだけど…」
「はぁ？なにそれ」
「いや、なんか細長いもの背負った、髪の長い女の子が、走ってた気がするの。どこ行ったんだろ…」
「…あんた、もしかしてそれって…」
「へ？」
「あの…この世に、その、生きていないもの、っていうか…実態のないものっていうか…」

さーっと勢いよく湯里の顔が青ざめていく。

「えええええええ、そんな、まさか…っ！？」
「…」
「う、嘘だよね？わ、私の見間違いじゃ…！？」
「私に聞かないでよ」
「ふ、ふあああああつ！！！」

湯里が叫んでる頃、もうすでに対戯は京と共に学校を出ていた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

あの人は優しい人だった、と思い出す。
優しく、いい人の見本そのものだった。
桜の待っていたあの日、あの人とであった。
低いトーンの静かで落ち着いた声はよく耳に馴染み、丸い眼鏡の奥の瞳は、真っ直ぐな光を宿していた。
あの人になりたいと、いつも思っていた。少なくとも、小さい頃の対戯は。
けれど、今となっては、それは遠い記憶の中の忘れ去られた感情に過ぎない。
あの人のようにはなれない。それを酷く痛感していた。

「……」

そう、あの人のようにはなれない。あの人のように見ず知らずの人間に優しくなんて。
…見ず知らずじゃなくても、会って日の浅い人間に優しくなんて。
……。

「対戯！！また会えたな！！」
「……はい」

代夜のお見舞いの帰り道、京と別れたあと、そのまま家へと歩いていた。そして今、目の前にいるのは、小奇麗な着物を着て、背中に細長いものを背負った、…幼女、もといやどり。
はい、昨日振りです。すごく早い再会です。また会うなんて思っても見ませんでした。
……。

「なんでだってかどうしてこうも巻き込まれたくないものに巻き込まれるのかね俺えええええぇぇぇぇぇっっっ！！！！！！！！」

「ふ、ふぇ？」

大袈裟に仰け反りながら対戯が叫ぶと、やどりが驚いたように身を震わせる。

まじか、まじでか、とぶつぶつと呟きながらがっくりと地面に膝をつく。

巻き込まれるの、けってーい☆

…ふざけんなあああああっっっ！！！！！

「ど、どうしたのじゃ対戯…？どこか痛いのか…？」

「あ…いや…なんでもないよ…」

そしてどうにも悪いことに、このやどりには何故か対戯は強いことを言えなかった。

幼いながらも名家の娘で、その誇りを貫こうと、どんなに怖くても『逃げろ』、と自分に言ってのけた少女を、案外対戯は気に入ってたと同時に、誰かが守らなければいけない存在だと思っていたのだ。

そして対戯自身が、その性格に似合わず子供好きという点も入っている。

「…それで、どうしたんだ？こんなとこまで一人出来て…。葉桜は？あの過保護心配してんじゃねぇか？また狙われるぞ」

「むむ…、私は知らぬそんなこと…、むーっ！母上が悪いのじゃー！！」

「は…母上？」

「見合いしろ、と言われた…」

「へぇ見合い…、……見合い？」

え、見合いって、男女が机を間に向かい合って、ご趣味は何ですかとか聞くあの見合い？

こんな小さい子が、あの…見合い？

「お前、まだ子供だよな…」

「むぅ、子供とは失礼な！！…でも、最近私が狙われることも多くなって、その、親が心配してな…。将来のことを考え、許婚と見合いをすることになったのじゃ…、…でも…」

「許婚はいるのね…、でもどうした？不安か？」

「…違う。やはり、結婚する相手が決められてる、というのは、少しだけ…寂しい、と思ったのじゃ。…私だって、女の子なのじゃぞ？」

「…お前、」

「まぁ不安というものもあるがな。でも、少しくらいわがままを言ったって…いいと、思うんじゃ」

少し瞳を揺らしながら、悲しそうにやどりは笑った。

あぁ、名家ってのは、そういう思いをしなければいけないんだな、と気分が沈むのを感じた。

「だから、ちょっといたずらをな、しようと思うのじゃ！」

「んで、一人でここに来た、ってわけ？」

「それだけじゃない。ここに背負ってるものはの、言霊刀と呼ばれる代々言霊遣いの家に伝わる名刀じゃ！！無くなったら多分すごく困ると思うのじゃ」

「…刀、ですか」

「刀じゃが、でもな、どうにも、抜けない刀なんじゃよ。だから無くても構わないと思うんじゃが…、昔、私の兄？だった人が使ってた、らしくての？」

「なんで疑問系？」

「私が生まれてすぐ、死んでしまったらしいんじゃ。覚えていないがの」

「…」

悪いこと聞いたかな、と思うが、やどりは全然気にしていないように見える。
やはり、生まれてすぐだから記憶がなく、知らない人間が死んだと聞かされても、何も実感が沸かないのだろう。それが実の兄だとしても。

「はぁ、まぁそっちの事情はよくわかんねぇけど…、お前がしたいようにすればいいんじゃないか？で、なんで俺のとこにきたんだ？」
「…他に近くにいる知り合いがおらんのじゃ…」
「なるほど…」
「それに対戯ならなんとかしてくれると思うての！」
「…なんか信頼されすぎてて怖い」
「ふぇ？」
「はぁ…まぁいいか。その刀重いだろ？とりあえず持ってやるよ。あと、ジュースくらいなら奢ってやる」
「おぉ！！ありがとう、対戯！」
「…またありがとうって…」
「対戯？」
「はぁ…なんでもねぇよ、じゃあ自販機まで行くぞ？」
「じはんき？なんじゃそれ？」
「…まじか」

ため息をつきながら、対戯はやどりが持っていた布に包まれた刀を受け取り背負う。
それで、自販機のある公園まで行こう、とやどりに呼びかけた。
…『言霊』刀が何かってことは絶対突っ込まねぇぞ！！！

「ところで、あの鳥どうなった？」
公園まで歩く途中、対戯はあの鳥の妖怪、江蛾留侘と呼ばれた鳥のことをふと思い出し尋ねた。
「江蛾留侘は強制的に唱えられてた言霊の効力を完全に消したら懐かれたのでな、万葉家の遣いとなってるぞ？ちなみメスで名前はキャサリン」
「…なんでそんな外国人っぽい名前を…」
「母上がつけたのじゃ」
「母上…おま…」

他愛も無い話をしながら対戯とやどりは歩く。
二人とも、これから何が起こるかなんて、さっぱりわかっていなかった。
二人の話を聞いてにやりと口元を歪めた影。
そして二人より先に進んだ姿。
何も知らなかったし、気づかなかった。
そう、何も。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

血が、溢れた。頭から流れてくる鮮血は、眼の中に入り、視界を赤く染めた。
倒れた対戯を揺さぶりながら、泣き叫ぶやどり。その体は、対戯の血によって赤く染まっていた。
なんで、こうなったのだろう。
周りには、人とは違うモノが、いたるところに存在している。

枯れ木の色とそれに似た姿で、布を纏った鬼の顔。青黒い姿をてかてかと脂っこくぬめった粘液で縄を体に巻きつけた骸骨に似た何か。普通じゃなかった。尋常じゃならないくらいに、恐怖が沸きあがった。

「対戯…！！！対戯っ！！！！！」

泣きながら、やどりは必死に対戯の名前を呼ぶ。
初めはただ、普通に公園に入っただけだった。
けれど入った瞬間、普通じゃない何かを感じた。
背筋に寒気が走り、鳥肌が全身にたつ。
そして、現れた、化け物。

「しっかり…！！しっかりするのじゃ！！、頼む、頼むから…、死なないで、くれ…！！！！」

頭が真っ白になったと思っていたら、化け物の持っていた棍棒で殴り倒されていた。ぎりぎりで後ろに倒れたのだが、額が刀で切りつけられたようにぱっくりわけ、血が溢れ出し、その場に倒れた。
じんじんと熱を灯しながら痛むそれ。真っ赤な視界の中から、化け物の姿が離れない。
この異常な光景の中、人が入ってくる気配も、人が公園前の道を通る様子もなかった。今は学生の下校時刻だというのに。
どうせまた言霊なんだろう、と霞む意識の中で思う。
感じたことの無い鮮烈な痛みが、体中を支配し、体を動かせなくする。
助けを呼ぼうにも、ここは対戯の日常とは切り取られた世界らしかった。ここには、自分と、化け物と、やどりしかいない。
どうにもできない。

「くくっ、あはははははははっっ！！！」

この異常な空間の中、狂ったような笑い声が轟いた。目線をそっちに向けると、真っ黒のタキシードに似た服を着た男が立っていた。

「お迎えに上がりましたよ？万葉家のお嬢さん。我々と一緒に来ていただけますか？」

にこにこと、食えない笑みを浮かべた一見優男に見えるそれは、ゆるりと細めた瞳の奥に、酷く歪んだ狂気を携えていて、ぞくり、と背筋が凍った。

こいつはやばい人間だ。直感的に確信する。

「だ、誰がお前なんかに…！！」

「死にますよ？彼」

「っ…！！」

着いていくものか、といいかけたやどりの口が止まる。それに気を良くした目の前の化け物に似た人間は、にこり、と人のいい笑みを浮かべた。

「ところで彼、特に言霊遣いじゃなかったんですね。てっきり、楠木などの従者とばかり…。ただの弱い人間だったのですか。これは悪いことをしましたねぇ」

ちっとも悪びれない口調で、遠まわしに対戯を馬鹿にする男。

確かにそうだ、と対戯は思う。守るべき子供だ、と対戯は思った。

そのはずなのに。

「違う！！」

けれどやどりは叫んだ。
「対戯は弱くなんか無い！！私を守ろうとしてくれたのじゃ！！お前に対戯を馬鹿にする権利なんて無い！！」
涙でぐちゃぐちゃの顔で、それでも、凛と言い放った。
対戯の手に、力が篭る。
「私なら着いていく。だから、だから対戯は…！！対戯だけは帰してくれ…！！！」
だけってなんだよ。
お前はどうすんだよ。
「…まぁいいでしょう。他ならぬやどり様の？頼みですしねぇ。いくら私でも関係もない人間に関わってる暇も無い」
さぁ、こちらへ来てください、と言い、手を差し出す男。
やどりは、もう涙を零さぬかというように、唇を噛みながら、男に近づいていく。
だめだ。
行ったら駄目だ。
対戯の手に、さらに力が篭った。
駄目だ。
駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だっ！！！！！！！！！
「待…てよ！！！」

ん？と男の視線がこちらを向く。やどりが驚いたようにこちらを振り返った。
考えろ、考えろ、考えろ。
お題は揃った。『言霊』に『万葉家』に『従者』。
そして背に負う、『刀』。
勝てるとは思えない。むしろ死ぬんじゃないか、と対戯は心の片隅で思っていた。
言霊遣いでもなんでもない自分。
化け物に囲まれ、手も足も出せずに、ただ倒れた自分。
頭にずんと、重く熱い痛みが走って、役に立たない自分だけれど、ここでただやどりが連れられてくのを見過ごすわけにはいかなかった。
俺はやどりを守った？まさか。
やどりが俺を守ったんじゃないか。
情けないままペテン使いは終われない。

『男は誰だって強くなりたいって思うときがあるもんなんだよ、ばぁか』

今更わかったよ。でも結局、日常は壊れた。
死ぬかもしれない、けれど、ここで逃げる方が嫌だった。
所詮嘘しか自分はつけない、と思う。
なら、嘘を吐き抜いて見せましょう。ペテン使いの名にかけて。
演じて見せましょう。言霊遣いを。

「お前、本当に、俺が、関係ない、ただの人間だって、思ってんのか…？」
「…？」

背に持った布に包まれた刀を杖のようにしてのろのろと立ち上がる。

痛みが頭から駆け巡り、今にも倒れてしまいたくなる。けれど、出来ない。

「本当に、従者じゃ、ないとでも…？」
「な、何を馬鹿なこと言ってるのじゃ対戯！！」
「もう演技はやめようぜ、やどり。いくら俺を逃がすためといって、お前がそんなことをする必要は無いんだぜ？」
「な…っ！！」
「普段はやどりに着き従ってるわけじゃない…、ましてや万葉家のものでもない。けれど、俺たちは代々万葉家に仕えるべき者…、ここでやどりを守らずに、どうしろというんだ？」
「…へぇ」

適当に喋った言葉を聞き、男の顔が、面白いものでも見たかとでも言うように、にやりと歪む。
もう、ここまで来てしまえば、逃れることなんて出来ない。
正直、怖くて怖くてたまらない。
震えるのだって我慢してたし、今すぐ逃げ出しそうになる足だって必死に耐えて押しとどめた。

「それで、君はどうするつもりですか？」
「やどりを…連れて行かせるか、バーカ」

布に包まれた刀を取り出す。
やどりの言う、『言霊刀』。
ペテン使いを舐めるな。
勝てなくても、守りきってやるさ。
対戯は挑戦的な顔で笑った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　守るべき者（後書き）

万葉ってのは万葉集からとりました。
…いらない知識…。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　言霊刀、桜、アルビノ

目の前には化け物がいて、化け物よりも恐ろしい人間がいて。
意味がわからなかった。けれど、頭をフル回転させて、やどりを助けることだけを考える。
なんでこんなことをしているのだろう、と対戯は思う。
見捨ててきたことなんてたくさんあった。
例えば不良に絡まれてる気の弱い人間。
学校でいじめられてた人間。
いまこの状態に比べれば、それらはなんて自分にリスクの少ないことか。
今、このとき、対戯は絶えず命の危険があった。
次の瞬間には、化け物たちが襲い掛かってくるかもしれない。
わかっている。自分は馬鹿なのってことくらい。
酷い偽善者だ、と自嘲する。本来ならば、こんな人間ではないはずなのに。
中途半端な人間なのだ。結局のところは。
優しくするのは苦手だ。自分と言う人間を勘違いされるから。

「対戯っ！！！」

でも、泣きそうな、目の前の少女を見てると、それでもいいかな、と思えてくる。

布から出した刀はやどりの言ったとおり抜けなかった。
抜けない刀。どうせなんかの力がどうたらこうたら、とでも言うんだろ。
その刀は黒色の鞘に、桜のような花が彫られており、その刀身は十分に長かった。

何物騒なもん持ってんだ俺、と対戯の冷静な思考が呟く。

「無理じゃ！！その刀じゃ何も出来んっ！！頼むから…、頼むからやめてくれ…！もともと家をでた私のせいなんじゃ…、頼む、対戯…！」

「はいはい、うっせーな。姫さんは黙って待ってろ」

一応刀を引っ張っては見るけれど、少しも動かない。接着剤でこれでもかってくっつけてるみたいだ。

これであの化け物倒せねぇのか。少しだけ考えて、思いつく。

ならもう、抜かなくてもいいんじゃねぇ？

「最後の対話は終わりましたか？従者さん。じゃあ、死んでくれますか？」

にこり、と笑った男。その次の瞬間、一斉に化け物が襲い掛かってきた。

ここでもし、ヒーローみたいな奴だったら、なんか力が覚醒したりして、あっという間に敵を薙ぎ倒すんだろう。

だけれど生憎、自分にそんなヒーロー性は持っていない。

でも、やらなければいけない。

対戯は刀をしっかり握り締めて、強がるように口元に笑みを浮かべた。

ケンカは弱い方じゃない。

足も遅い方じゃない。

運動神経も悪い方じゃない。

でも、負けられない。

「う、おりゃあああああぁぁっ！！！！」

一歩地面を踏み出して、刀を、鞘がついたまま敵に切りかかった。
驚いたようなやどりの顔が視界に映る。
せめて棒の役目でも果たせればいいと思ってた、けれど、案外敵が真っ二つにばっさり斬れる。

「…あれ？」

なんだ、斬れるじゃん、と思ってると、後ろから、自分を殴りつけようとしたあの化け物が棍棒を振り上げ襲い掛かってきた。
横薙ぎに払ってくるそれをしゃがんで避け、刀をそのまま立ち上がると同時に突き立てる。
化け物は、ぐおぁ、と低く人間の声帯では出せないような声を上げると、細かい粒子になって消え失せた。

「…まじでか」

十分戦えるじゃないか、鞘でも。見ればやどりが瞳を真ん丸にしてるのが眼に入った。
にかり、と笑ってみせる。そうすると、やどりが泣き笑いのような表情になった。
化け物は次々やってくる。
剣を突き立てたり、そのままぶった斬ったり、ただがむしゃらに刀を振り回す。
生と死と、ぎりぎりの境目で、ひたすらと。
ときおり化け物の爪が肌を掠った。だけれど、怯んでいる暇なんて無い。

「対戯…」

やどりが呆然と対戯を見ていた。どうして、と小さく口から漏れる。

なぜあの人は自分のために戦っているのだろう。やどりの瞳が潤み始める。

「もう…やめるのじゃ…」

ぽろり、と大きな瞳から透明な雫が零れる。
タキシードの男は化け物がどんどん倒されていくというのに、にこにこと笑ったままだ。むしろ楽しんでる様子さえも伺える。
化け物の腕がついに対戯をとらえ、そのまま吹っ飛ばされる。やどりは小さく悲鳴を上げた。けれど対戯は、それでも立ち上がる。

「もうっ！！もういいのじゃ！！お前がそんな怪我してどうする！！頼む、頼むから、もう、やめて…」

そう言ったときだった。ふ、とやどりの体に影が出来た。
え、と思わず顔を上げる。そこには、大きく腕を振りかぶる、化け物が。

「ひ、あぁっ！！！」

やどりの体に重い衝撃が走る。息が一瞬止まった。
腕の勢いのままに、地面をざざ、と擦りながら少し離れたところまでやどりの体が吹き飛ばされる。

「ぁ、うぅ」

酷い打撃の痛みと、擦れた肌。また、近づいていく化け物。
やどりは、震えた声を上げる。

「…っ」

刀を持ち、化け物を切っていた対戯は、ちょうど視界に映ったそれをスローモーションで見ている気分だった。
代夜のときのように。
傷ついてく、者が。
頭に、血が、上った。
だめだ。
これは、だめだ。
対戯は眼を見開きながらすごい勢いでやどりの方へ向かった。途中、化け物が立ちふさがってきたが、対戯は無言のまま、高く飛び上がりその化け物の脳天に突き立てる。
小さい化け物は薙ぎ払い、大きい化け物は突き立て、他に何も見えてないという状態で、やどりの方へ駆け寄る。
やどりはすごい速さでやってきた対戯に抱きつく。対戯は片手でやどりを抱えた。
化け物からは悪臭が漂い、口元からは涎に似た液体をぽたぽたと垂らしている。
けれど、それでも対戯は眼を大きく開きながら、ただ化け物を見つめる。瞳孔も開いているようだった。無表情、無言のまま、ただ、見つめる。
恐怖なんてものはどこにもなかった。
ただ、腹の奥から酷く冷たい怒りが湧き上がってくるだけ。
殺したい、壊したい、崩したい、殴りたい、蹴りたい、刺したい、打ちたい、潰したい、沈めたい、落としたい、千切りたい、抉りたい、そんなただの、怒り。
化け物が腕を振りかぶる。そんなようすを、やどりは怯えながら、対戯は、ただ冷たい眼で見ていた。
それが、振り下ろされそうになったとき、対戯の口が、小さく、動いた。

「『一失せろ』」

ただ、その一言だった。
その瞬間、化け物は粒子になって消え去った。
どくり、と対戯の内部が脈打つ。
次の瞬間、額の傷なんて比じゃないほどの痛みが、体中を駆け巡った。

「ぅ、ぐぅ…！！」

それを唇を噛むことで必死に耐える。全身を鋭い刃で斬りつけられたかのようにじんじんと痛むそれ。
けれど、対戯は倒れなかった。口の中に血がせり上がってきて、それを地面にぺっと吐く。
頭の中がくらくらとした。今、自分が何をしていたのかもわからなかった。
ただ、目の前の化け物が消え去ったという現実のみしか、頭の中に入らない。

「く、はは、ははははっ！！！」

男が腹を抱えて笑った。ゆらり、と対戯が男の方を向く。
素晴らしい、と男が呟いた。

「言霊を使えないかと思っていたのに、まさに危機一髪、ですねぇ」
「こと、だ、ま…」

「でもなんですか君のその言霊は。言葉として曖昧なはずなのに、どうして、君の思うように言霊を放つことが出来た？本来、言霊とは、意味を持つ言葉を正しく使うことによって意味を成すはずなのに。そこがわからない」
「…」
「答えない、ですか？まぁそれもいいでしょう」

ぱちり、とウィンクして男は一歩後ろに下がった。

「君は面白い。多大な可能性を秘めている。これは万葉家にちょっかいをかけるより、面白そうですねぇ」
「な、にを…」
「ここは見逃してあげましょう。まぁ案外人を殺すというのはいい気分がしないものです」

先ほどまで本気で殺そうとしてきた人間がなんというか。
対戯は瞳孔の開いたままの眼で、今にも飛び掛りそうな様子だった。正気が失われたかのような状態で、それでも片手でやどりを抱きしめている。

「この世界の人間というものは、酷く面白い。もがき苦しむ様、絶望しきったその顔。それでも諦めようとしない愚か者。不安定なくせに一定のバランスを保ちながら生きていく、なんて滑稽で醜い。けれどどうしようも愛しく思えるのですよ、その姿は」

くすり、と男が笑う。

「……――まぁ、人間を捨てた男が言ったとしてどうなるのでしょうか？」

瞬間、対戯の意識が正気に戻る。
冷や汗が止め処なく流れていくのを感じた。
人間を、捨てた？
なんだこいつ、なんなんだこいつ。声を発しようとしたけれど、対戯の喉が乾いて張り付き、上手く出すことが出来ない。

「おぉっと、勘違いされたは困るのですが、私は人間ですよ？正真正銘、四肢の揃った五体満足の愛しき人間。けれどですね、どうしようもなく私は人間という枠から外されてしまったのですよ。結果的に私は人間と区別することが出来なくなってしまった…、いいえ、させられなくなってしまったのでしょうか？愛しき人間は私というモノを人間と分けなくなってしまった」
「なんだよ、それ、意味わかん、ねぇ…」
「意味なんてものはわからずともよいのです。そもそも理解させようとしていませんから。でもたまに考えるのですよ。私という人間だったものが愛する人間というのは、自己中心的なエゴイストばっかりだった…、とね。だからこそ欲してみたくなるのです。私の考える、本当に、面白い人間というものを。だって考えても見てください。人間と化け物の違いとはなんですか？人間こそ化け物の素質を持っているというのに、圧倒的な線引きで分かたれた世界を、否定して否定して否定して。なんてつまらない。面白くもない。でしょう？」

同意を求めるように男は対戯に問いかける。対戯は無言のまま、男を睨み付けた。

「その中で、私は君を面白いと思った。従者だなんて嘘でしょう？いくらなんでも、この子に敬語を使わない従者なんているものですか。万葉家というのはそれほどの力を持っているのですよ？従者と名乗るからには、せめて敬語を使ってくれませんと」

「…」
「まぁいいでしょう。別になんだって構わない。でも、その行動に私は目を引いた。あなたは見たところ事情を知っているだけの一般人にしか見えなかった。けれどどういうことでしょうか。命を賭けてまで、万葉家の子を守ろうとし、仕舞いには言霊を使って見せた。予想外ですよ。面白い。とても面白い。だから、いいでしょう。私はもう貴方たちを狙う真似をしません」

は、と一瞬だけ息が止まる。対戯は呆然とした表情で男を見た。男は表情が何一つも変わらないままで、ただ、笑う。

「そうだ、私のことは入鹿（いるか）とお呼びください、また会うときが来るので」

そんなときは来なくてもいい、と思うが、その願いは叶うことがなさそうだ、とほぼ確信的に思う。
そんな対戯の心情を見透かしたかのように、それでは、と演説の終わりのような声を上げる。

「行くも逝くも貴方次第。面白いものには愛の手を。それでは失礼またいつか」

帽子を脱ぐ仕草をして、サーカスの団長のように片手を前、片手を後ろ、と片足を軽く下げてぺこり、とお辞儀をする。
しゅんかん、ぼふん、と大きな音がして辺り一面白い煙に包まれた。視界が煙るが、すぐにそれは消え去る。
そこにはもう、誰もいなかった。化け物も、あの、化け物に似た人間も。

「あ…、」

対戯の視界がぐらりと揺れる。
暗転していく世界。
気の遠くなっていく意識の中、やどりの声が響いた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

桜が舞っていた。視界が桃色で埋め尽くされ、淡い木漏れ日の中、そこは優しい匂いがした。
相変わらず世界は綺麗な振りをしているけれど、ここは本心から綺麗だ、と思える場所だった。

『ここは秘密の場所です』

―さんが言う。

『ここでなら自分に素直にいていいのですよ。ここは人が人であることを、全て赦す場所ですから』

―さんはにこり、と笑って俺の頭を撫でた。
俺はなんだか照れくさくて、つい俯いた。その手を振り払うなんてことはしなかったけれど。
父のような、兄のような―さんは舞い散る桜を見上げ、呟く。

『もし悲しいことがあっても、泣くな、とは言いません。けれど、忘れてはいけないのです。貴方が零す涙の分だけ、心を痛める人が

いるということを』
『そんな人、おれに、いるの？』
『えぇ、現に、今だって目の前にいるじゃないですか』
ほらね、と優しく笑う。
『…』
あぁこんなにもきれいなひとがいるのか、と思う。
悪意も憎悪も、この人からは自分から逃げていく。
人の痛みを自分の痛みともとれるこのひと。
世界はこういうひとを愛するんだと、なんとなくそう感じていた。
人を引き寄せる力をもっていて、人の心を暖かくする力を持っている。
すごく、強いひとだ。
泣きそうな心で、そう思ってた。

『対戯、』
『なに？』
『貴方の、幸せとは、何を指しますか？』
『しあわ、せ？』
『そう、幸せ』
『…おれには、ちょっと難しい』
『なら、いつか見つけてください』
『どうして？』
『いつか、それが、貴方の力に、なりますから』

そう、一さんが言った瞬間、俺の視界は淡い桃色に全てが染まった。
世界がぐら、と揺れる。
優しい世界が、暖かい世界が、あの人が、崩れていく。

必死に手を伸ばした。
やめろ、行くな、行かないで、置いていかないで。
ひとりに、しないで。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「あ……」

薄ぼんやりと、意識が覚醒していく。
そこには、桜も、あの人も何もない、見慣れぬ天井が対戯の眼に映った。
無意識のうちに手を伸ばしていたらしく、微かに眼の端がじわりと濡れていた。

「生きてる、のか…」

伸ばしてた手で、そのまま眼の周りを拭う。
だんだん思考がはっきりしてきたのを感じ、辺りを見回した。
障子、畳、掛け軸、など、いわゆる和風と言うべきものが一通り揃っている。
悪くない記憶力の中辿っても、こんな家、見たことがなかった。

「あれ…」

よく見ると、視界の端に動くものが。
それは暖かくて、小さくて、生きている、もの。

「やどり…？」

そう名前を呼ぶと、むむ…と微かに身じろぐだけで、その他に反応はなかった。
もしかして、と思って重い体を上げると、そこに対戯の布団に寄り添う形ですやすやと眠るやどりが。
微かに瞼が赤く腫れていて、泣いていたんだな、と簡単に想像がつく。
少し申し訳ない気持ちになりながらも、優しくやどりの頭を撫でてから、起こさないようにそろり、と布団からでた。
先ほどより痛みは引いていたものの、まだじくじくとしつこく痛んでいて、体を動かすのも少しだるかった。
どうやら体には包帯が巻かれているようで、服の下に微かな違和感を感じる。
忍び足で部屋から出ると、そこは縁側のような場所で優しい光をその場所に差していた。
庭はよく手入れされているようで、落ち葉はほとんどない。

「…どこだここ」

少なくとも安全な場所だろうが、見慣れない場所なぶん不安感がかなり強い。
やどりがいるのだから、多分そういうところだろう。
本能的に、ここからすぐ離れた方がいい、とそんな気がする。
あのときの痛みが、微かにぶり返すように疼いた。
変えれも帰れもしないあのとき。間違ったことはしなかった。けれど、自分に合っていない行動だった、とつい苦笑する。
まったく、可笑しすぎる。

「――誰だ」

不意に鋭く、冷たい声がどこかから聞こえた。
対戯がえ？と周りを見渡せば、不意に首元に冷たい感触。
振り向けば視界に映える白と赤。え、と考える前に、首筋のものを考える。
ナイフ。
は、と掠れた声が口から漏れた。

「…お前は、誰だ。なんの目的で、ここにいる」
「いや、あの…」
「答えろ」

ぐいっと冷たいナイフを押し付けてくる人間。
やべぇこれどうしようか、と思いながら、相手のことをまじまじと見てみると、あれ？と違和感。
よくよく見れば、その人間は、対戯と同じくらいの歳で、そして、白い髪をしていた。その上赤い眼。
間違いない、アルビノ美少年か。
…混乱しているのだろう。家にあるゲームの情報が雪崩れ込んでくる。
綺麗だなー、と半ば現実逃避しかけたところで、慌てて思考を回復させる。
どういう状況だ、これは。

「えーと…あの、どちら様、ですか？」
「ボクが聞きたい」

ですよね。
なんだろうか、と対戯は頭を抱えたくなる。

多分こいつはここの関係者だ。いや、違ったら怖い。
んで、自分は、本来ここにいるべきではない人間。
…。
怪しさからいって対戯のほうが分が悪い。
ここ最近自分はどれだけ命の危険にあっているんだ、とげんなりするが、どうもこうも言っていられない。

「俺、特に怪しい奴でも危険な奴でもないし、ただちょっと嘘吐きなだけのお茶目さんです」
「刺されたいのか」
「…少しフレンドリーに言っただけなのに…、俺は別に悪い奴でもなんでもねーぞ。ただちょっと気がついたらここにいただけで。そんだけ」
「…」
「そんな睨み付けられても困るんだけど…、ってかナイフ下ろしてくれね？俺別にどうこうするつもりも何もないから」
「…信じられると？先ほど自分のことを『嘘吐き』と自称したお前が？」
「あぁ…」
「答えろ」

これはどうするべきか。大きな声で部屋にいるやどりを起こすのが手っ取り早いのだが、そうした瞬間このアルビノ美少年に喉を掻っ切られない。
…なんか感覚が麻痺してきてないか…？と最近起こった尋常でない出来事を思い返す。
対戯は一つ小さくため息をついて、まっすぐ目の前の人物を見る。
睨み付けないように、と気をつけながら、小さく息を吸う。
そうして、にっこりと、笑った。
ぱちり、と目の前の赤が瞬く。多少驚いた様子を見せているその様

子に、内心対戯は喜んだ。
やべぇ表情筋辛ぇ、などという考えはおくびにも出さず、きわめて落ち着いた風を装い、それをわざとらしくあるようにだしてみせる。予想通り、微かにアルビノ美少年の顔が僅かに強張った。ナイフが少し喉の方に近寄る。

「一作り話だけれど」
「…？」
「あるところに、一人の男子高校生がいて、なんでだかそいつは訳のわからないことに巻き込まれて、訳のわからないことをやるはめになって、訳のわからない化け物とか力とか、その眼で、その身で体験してきたのよ。そしたら、なんやかんやで空から降ってきた幼女を助けちゃうし、その帰り道変な男に襲われて、親友が病院送りになったと思ったら、グラサンかけた変な女に勧誘されて、仕舞いには公園で幼女と一緒に化け物オンパレードってかフルボッコにあったのね？わかる？」
「…」
「つまりまぁ、普通の人は体験し得ないことが奴に降りかかった。なんか幼女には懐かれるし、その従者には結構酷いことといったのに感謝されるし、本当意味わからないことばかり。少なくとも速く忘れちまおうってことが、いつの間にか忘れたくてもうんざりするくらい忘れられなくなった。まったく酷い話だよな？日常を俺は信じてたんだよこれでも。俺が信じるとか信じないとか言うの似合わねぇけど、このありふれた毎日が壊れるとかそんなことも考えてなかったわけ。こりゃあ馬鹿らしくなるほどちっとも。不変な毎日を今日も明日も明後日も明々後日も変わらずに進んでくって思ってた。だってそうだろ？まず空から幼女が降ってくるなんてことからありえねぇ。あんな化け物だってありえねぇ。言霊だってありえねぇ。そもそもそんなこと頭の中になかった奴が、いつの間にかここにいるんだぜ？」

すらすらと。そりゃあすらすらと。
こちらを疑ってくる奴にはそれ相応の対応を。混乱するくらいに言葉を並べる。

「さて、じゃあ聞くけど」

勤めて、笑顔で。

「嘘吐きな俺は、どこに嘘を吐いたでしょう？」
「はぁ…？」

ナイフの力が緩む。
よし、今だ。

「もし、あんたがここの人だったとして、万葉家の次期当主、やどり様にどう思われるかな？自分を助けてくれた人間が、他の奴に物騒なもん突きつけられていたんなら」
「…っ！！」

ようやく意味に気づいたらしい。嫌悪感と微かな同様が、赤い眼に走る。
対戯はそれを見逃さない。嘘を吐くとき、相手をよく見ることが大事なのだ。僅かな隙に、言葉を捻りこむ。
まぁこの話は嘘でも何でもないんだけどな、と内心舌を出す。
けれど言葉に、少しやどりを利用してる気がして、なんだか悪い気になる。

「はっ、そんなの…、」
「嘘だと思ってる？」

「…、」
「最初に言ったよな？―これは作り話だって」
「っ、」
「さて、嘘吐きで捻くれものの俺が、作り話をわざわざ作り話というでしょうか？かといって、あんたの言うように俺は嘘吐きです。醜く卑しく愚かなペテン遣いです。けれど、もし、嘘じゃなかったら、あんたはどうするつもりですか？」
「なっ…！！」

驚いたようにアルビノは眼を見開く。
成功、と対戯は心の中でガッツポーズをする。
多分このアルビノは、従者か、それに近い何かだ。
だから、やどりの名前を出され、対戯がそのやどりを助けたことが本当だとしたら、自分のやっていることは万葉家にとっての行為として最低なことだ。
それにすぐ気づいたらしく、アルビノは強い視線で射抜かんばかりに対戯を睨み付ける。その上小さく舌打ち。しぶしぶといった具合にナイフを下げた。
おいおい柄悪くねぇか…？つい文句を言いたくなったがそこは堪える。
ここは上手く切り抜けることが大事なのだ。
葉桜のとき思ったが、従者というのは妄信的にやどりを信奉していた。
もしかしたらあれは葉桜限定だったのかも知れないが、一人でもそんなことがあるというなら、無論目の前のアルビノだって例外ではない。

「…誰だ？」

すごく不機嫌そうな顔でナイフを下げたアルビノは、先ほどの質問

をまた対戯に繰り返し問うた。

「人に名前を聞くときは最初に自分の名前を名乗れって教えてもらわなかったか？」

「…」

「すいません調子に乗りました」

無言でナイフ向けられた。まじ怖ぇ。

「えーと…虚室対戯、普通の一般的で日常的な高校生です」

「…普通の高校生がここに来るとでも？」

「…ですよねー…」

「…」

「あのさ、俺教えたんだからお前も言えよ」

「なんで？」

「なんでって…それが礼儀だろ普通」

「なんでボクが君に礼儀を向けないといけないの？」

「…」

うん、こいつ俺のことすげぇ嫌いだ。

てかもともと怪しい奴だと思われてた上に、まぁ、いろいろ言ったから、果てしなく嫌われた。

「おい――っす！んー？何やってんだー？」

元気な女の声。え？と振り向くと、そこには予想通り女が。

スポーツ少女のような爽やかな笑顔で駆け寄ってくるその人。

多分年上だ。そして美人で。

金髪で特攻服で木刀を抱えていた。

「…！！！！！？？？？？」

思考一時停止。

思わず顔が引きつる対戯。ちら、とアルビノを見れば、半眼でその女性を呆れたように見ていた。

…なんで言霊遣いやらそれに関係する奴らはみんな変な奴が多いんだろ！！

軽く絶望のような感情が湧き上がるのを感じた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　言霊刀、桜、アルビノ（後書き）

新キャラ続々投入です。
対戯くんの『あの人』のこと、早く書きたいなー…。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　青き葉に、祝うは禊へと

前略。海外の父さんと母さんへ。

息子は巻き込まれました。

「おぉーっ！？あんたなになに？やどり様が言ってた子？」

慣れなれしく、木刀で特攻服を着た女が、すごくにこにこと気味が悪いくらいの笑顔でこっちに近寄ってくる。

なんですかあれー。不良ですかー？

泣き出したくなったのはきっともう今までの変人の方々にさんざんな目に合わされたせいだ。

降ってきたり刃物向けられたり殺されかけたり勧誘されたり死にかけたりまた刃物向けられたり。

対戯は全力で逃げ出したくなったが、そしたらそれでこのアルビノ美少年に不審がられ刺されるかもしれない。

どっちにしろ平穏の道はないのか。

「んー？なかなかの可愛い顔じゃねーか、ちょっとあたしとデートでもしにいかねーか？」

「全力で断ります」

「まぁ遠慮すんなよ。おねーさんが奢ってやっからさ？」

「いやあの…、どちら様っすか」

「ん？あーそうか、言ってなかったよな」

にかり、とそれはもう純粋に眩しい笑みを浮かべる。これで服装があれじゃなかったらドキッ☆みたいなことになってたんじゃなかろうか。

…服装以前にここにいる人間にそんなラブコメはあるのだろうか。家にあるアレなゲームがなんだか愛おしくなってくる。

「あたしの名前はー…」

「姉さあああんっっ！！」

あーまた聞き覚えのある声がー。

すごく対戯は振り向きたくなかったが、しょうがないので首だけ向けると、全速力で走ってくる黒髪ポニーテールの大人びた顔の中身中学生のあの子。

「おおー葉桜ー」

「まったく！対戯様になに絡んでるの！！失礼なこと言ってないでしょうね！」

「まったくよぉ、葉桜は真面目すぎんだよ。近くにイイ男がいるんだったら誘惑しろ誘惑。お前のその見た目ならオールオッケーだって」

「姉さん！！」

会話を聞くに。

聞きたくないけど聞いた結果、この時代遅れのヤンキーみたいな人は、

「あ、自己紹介まだだったな！あたしの名前は楠木青葉（あおば）言うんだ！よろしくな！」

あの真面目っこの、姉、とか…、

「この展開ゲームで見たことある…」

対戯は深くため息をつくのであった。

「あぁああ、そうじゃなくて！対戯様に用があるのでした！！」

ひとしきり姉に説教をしていた葉桜。真面目に聞こうとしない姉にまた腹を立て、それの無限ループに陥ろうとしていたが、自分のするべきことを思い出したようで、近くにいる対戯に大きく声をかけた。

あぁやっぱり俺に来るのね、と半ば諦めのように苦笑する。ほろりと涙が零れそうだった。

ちなみにあのアルビノ美少年はいつの間にか消えていた。対戯のことは葉桜とのやり取りで危険人物ではないと判断したのだろう。あぁ名前聞いてないな、と後から思い出す。

「こちらです」

それから、葉桜に案内され、この大きな屋敷の中を歩いている。どうやらここはやはり万葉家の屋敷らしく、先ほど大きな、と言ったとおり、でかい。それなのに埃一つない。高そうな掛け軸や壷がいたるところにあり、なんというか…金持ちの屋敷の雰囲気をぷんぷん漂わせている。

「この部屋にどうぞ」

葉桜が対戯に声をかけ、扉を横にすっと開く。対戯がそこに入れば、中には、一人の女性と若い男が。
女性の方はそれはにこにこと笑っている。けれど男の方は、すごく対戯を睨み付けている。
…なんで俺男の方には嫌われるのかな…。
先ほどのアルビノ美少年のときといい、どうにも万葉家の男は自分が嫌いなのだろうか、とぼんやり思う。もういっそどうだっていいのだけれど、ついため息を吐きたくなる。

「あら、あなたが対戯くん？やどりがお世話になってますねー」
「あ、あぁ、はい…」

やどり？呼び捨てってことは従者じゃないのだろうか。対戯が首を傾げてると、続けて女性は言う。

「初めまして、やどりのやどりの母、祝（いわい）と申しますー」

あーなるほど母親母親ねぇ…、…ん？母親？
改めて対戯は母親と名乗る女性を見る。
長い髪は緩やかにカーブしており、白髪のようなものは無縁に思える。
肌も白く綺麗で、しわ、シミ、たるみ一つもない。
その体も同様。胸大きい。
確かやどりには兄がいたといっていた。
それで、二人の子持ちと仮定して、

「…嘘だろ」
「あら？」
「こんな若くて綺麗な人が母親なわけあるか！！」

…盛大に突っ込んだ。
その瞬間、その部屋の中にいた男に強く睨まれた。けれどその男は、いかにもな麻呂眉に、侍のように、短い髪ながら高く括っており、大きめの目なので、それほど怖くもない。どうにも同年代のようだ。

「あらあらあら、若くて綺麗？嬉しいわぁー」
「奥様、喜ぶんじゃなく、注意した方が…」
「奥様っ！？違うだろ！？子持ちに見えねぇっ！！絶対詐欺だ！」
「あらあら、もしかして私口説かれてるのかしらー」
「奥様…」

対戯は若干の混乱で、自分が恥ずかしいことを言ってることに気づいていない。
けれど目の前の奥様といわれた人は、２０代…、いや、２０歳程にしか見えない。
若くして奥様？二人の子持ち？

「もう、しょうがないわねー？ちょっとこっちにいらっしゃい？」
「へ？」
「耳貸して？」
「はぁ…」

対戯は言われたとおりにする。そしたら、祝が近づき、耳元に吐息を混ぜ込みながら何かを呟いた。

……。
……。
……。

「…人を見かけで判断するもんじゃありませんね。すいませんでした」
「わかってくれればいいのよー」
何を言われたか知らないが、急に対戯の口調が改まり、もう騒ぐことはなかった。
それを葉桜はどこか達観した様子で眺めている。
慣れているのだろうか。

「それで、俺がここに呼ばれた意味ってなんですか？」
「あ、そうそう、そうよねぇ。まずはねぇ、お礼を言いたいの。やどりを助けてくれてありがとう」
「…いえ」
「それで、言霊遣いになる気はない？」
「いきなり話が飛躍した気がするんですけど」

あの怪しげに笑うサングラスの女性の姿が脳裏を過ぎる。いやいやいや、とそれを振り払った。
女の人はいまだにこにこと笑っている。いや、そんな笑顔になられたって、そんなの…。

「お断りします」
「どうして？」

えー。

「いや、言霊遣いになれと言われましても、俺、一般人ですし、ただの高校生ですし、」
「ただの高校生が言霊を使えるかしらー」
「いや、あれは…」

「たまたまとか、偶然であるものなのかしらねぇ」
顔は笑顔のままで、こちらに迫ってきている気がする。
あ、この人強いわ。直感的と言うか確信的というか、そう対戯は思う。
…なんでこう面倒くさい女ばっかりなのか…。

「まぁ、その話はひとまずいいわー、でも、やってほしいことがあるのよー」
「やってほしいこと…ですか？」
「そう身構えなくてもいいの。ただねー少し実験？というか…、リトマス紙って知ってる？」
「…はい？」
「まぁねーそれみたいなものよー。葉桜ー」
「はいっ！！」

どうぞ、と葉桜が対戯に渡してきたのは一枚の正方形の白い紙。和紙のような手触りだが、なんとなく違うような気がする。
なんですかこれ、と視線だけを祝に向けた。

「これねー、性質を調べる紙なのよー」
「…？酸性とか、中性とか、ですか？」
「違うわよー、言霊遣いとしての性質」
「…なんでそんなこと、」
「いいじゃない！お試しよー。やって損はないわー」
「…はぁ、どうすればいいんですか？」
「あのねー、その紙を両手に挟んで強く念を送るのよー、そうすればいいのー」
「強く念って…」

言われたとおり対戯は、両手に紙を挟み、強く目を瞑る。
念…、念ってなんだよ。どういうもんだよそりゃあ。言われた言葉を対戯は考える。
強い念…、強い感情？良いものだか悪いものだかわからないけれど、そういうものが念と呼ぶのだろうか。
感情…、念…、……。

『対戯』

…あの人。

「――そろそろいいでしょう。開いて見せてください」

しばらくたってから、そう祝が言った。対戯は言われたとおり、両手を開き、中の紙を見えるように出す。
え、と後ろで小さく戸惑った声を上げる葉桜。祝もぱちくり、と大きく目を瞬かせて、部屋にいた麻呂眉の男も、驚いたように眉毛を吊り上げた。
桜。
紙一面が桃色に染まり、桜が描かれていた。うわ、まじでか、と息を呑む。
紙を触っていただけで、本当に記憶の深くに根付いてるあの光景が反映された。改めて、現実的でない力を目の当たりにして、思いっきり現実逃避したくなる。

「…予想外ねー」
「はぁ…何がですか？」
「だって、普通紙には、文字が浮き出るはずなのに、あなたの紙には、絵が浮き出たのですから」

「えー…と、おかしかった、ですか？」
「ええ。そもそもその文字で判断するものだけれど、これはどうすれば…、…あの子以来ねぇ。絵が浮き出たの…。あの時も困ったわぁ」
昔も自分のように絵が出た人がいたのか。なら別に、おかしくはないのだと…思いたい。
いやいやいや、普通は文字が出るとかいったて知りませんよこっちは。
「ますます言霊遣いにしたくなったわぁ」
ええええ。
「勘弁してくださいよ…、そろそろ帰りたいんです」
「あらあら、確かに親御さんも心配してるでしょうねぇ」
「いえ…親は今海外出張中なんで…」
「あらーならまだここにいてもいいわよねぇ」
しまった、墓穴掘った。どうもこの人だと調子が狂う。
にこにこと絶えず笑みを浮かべてるのを見てると、敵いそうにないんじゃないか、と思えてくる。
「…奥様」
ここで、今まであまり喋らなかった男が、口を開いた。
鋭い眼光で対戯を睨みつけながら、丁寧な口調で祝に話しかける。
「なぁに？禊（みそぎ）」
「わざわざこのものに執着する意味がわかりかねます。このような

やる気のないものに任せるより、この家のものでさらに鍛錬をしていくことの方が大事だと思われるのですが」

グッジョブ。とりあえず禊と呼ばれたあの男に親指を立てたい。いくら内容が、こいつやる気ねーから俺らでやっちまおうぜ、みたいなものでもすごく嬉しい。

…なんだかやるせなくなってきた。

「でもねぇ、わかってるでしょう？長い年月、万葉家は言霊遣いの名家として繁栄してきた、けれどねぇ、時は変わらずに過ぎて行き、対戯くんのように、言霊遣いという存在を知らない人間ばかり。不思議な力というもいうものは科学とかいろんなものに押しつぶされて、忘れ去られていくの。だから、私は少しでも他の人に理解ある人間がほしいの。面白可笑しく広めるような人間とは違い、意味を正しく理解し、私たちの生きている証を後世に語り継いでくれる人が」

「…奥様、それは…」

「確かにねぇ、言霊と言うものは大きく広めてはいけない。言霊と言う概念を理解してしまい、間違った使い方を、特に鍛錬もなく、無意識、無自覚のうちに発してしまう人が出てきてしまうから、そういう決まりを作った…、けれどねぇ、それは時としてむなしく感じるものよ。私たちがいるということを、言霊遣いという人間がいることを、誰も気づいてもらえないのだから」

「あ、あの、ちょっといいですか？」

「あら、なぁに？対戯くん」

「いや、あんたたちがそこまでいう…言霊遣いって、いったいなにをしてるんですか？」

「あら、知らなかったの？」

「え、えぇ、まぁ…」

「そうねぇ、説明しなくてはねぇ」

対戯の疑問に快く答える祝。
禊はむすっと黙っている。

「しいていうなら…鬼退治かしら」
「…は？」
「だから、桃太郎でいう、鬼退治をしてるのよぉ」
「……」
「あ、でもねぇ、宝は貰えないのよ、残念ねぇ」
「…はい？」
「奥様！俺が説明しますから！」

我慢ならなくなりました禊さん。
嫌われているけれどこの人はいい人だな、と対戯は思う。絶対いい人だ。すごく嫌われてるけど。
まぁ嫌われるのは慣れてるし。

「鬼退治、…まぁ間違ってはいない。むしろ、スズメバチを駆除するようなものだ。鬼と言う存在は…、知らないか？」
「…鬼、といわれても、そんなの昔話の中でしか…、」
「見た目は鬼に似てない。総称してそう呼ぶだけだ。あいつらは人の感情。闇。そのものだからな」
「…？どういうこと？」
「人の感情の塊なんだよ、鬼という存在は。嫌悪、憎悪、殺意、嫉妬、悲愴、崇拝。まぁ、強い、…強すぎる感情が鬼を作り出す」
「いまいちイメージできないんだけど…」
「つまりだ、よく言うだろう？人を憎しみにより殺す人間は、それ相応の感情があったわけだ。自分の手首を切る人間はそれ相応の悲しみがあった…、それほどまでに強い感情には、何かしらの力が宿る。それが鬼だ」

鬼。…鬼。
対戯は顎に手を当てて考える。強い感情。
今更もう、嘘だとか、妄想だとか、本来の自分であったら信じようもないものが、すんなりと体に浸透する。
これはもうしょうがない、と諦めを持って、今の禊の説明を吟味した。
あの紙みたいなものだろうか。
強く念じればあの紙に桜の絵が描かれた。つまり、強い念や、感情と言うものはなんらかの感情を及ぼす。
つまり、あの紙が鬼として、考えてみればいい。

…強い、感情？

いや、と対戯は考える。
知っている。強い感情を、俺は、この目で、目の当たりにした。
つまりどういうことだ？それは、つまり、鬼と言う存在が、作られていたんじゃ…？

「…俺、そういう鬼がでてくるの、見たことないんだけど」
「当たり前だ。鬼は言霊遣いしか見ることが出来ない。もし常人に見えていたら今頃町中は大混乱だ」
「結構そこらじゅうにいるもんなの？」
「否定はしきれない」

髪を真ん中に分けていて額が広かったので、説明中、思わずそのデコをつつきたくなるのを耐え、鬼と言う存在を改めて考える。
考えてみれば見るほど、まさにありえないと言いようがない話だ。
鬼？なんてファンタジーな、と一笑できたらどれだけいいか。
一般的な俺の感性よ、カムバック。いい子だから戻ってきてくれ。

はぁー…と大きく息をつき、対戯は祝に向き直る。
「知りたいことも知れたことだし、俺、帰ります」
「あらー、こちらの情報を与えるだけ与えて、タダで返すとでも？」
え、？そういう展開？」
「まぁ冗談なのだけど」
「冗談なのかよ！」
「そんな怖いこと私に出来るわけないじゃないー」
「その割にはすごく似合ってたんだけど…」
「何か言ったかしらー？」
「いえ、別に」
「でもねぇ、帰ってもらわれると困るのよー？」
「はぁ…、なんでですか？」
「あなた、言霊を、使ったでしょう？」

ここで初めて祝から笑顔が消え、困ったような顔になった。

「もし、無意識に、無自覚に、一般的な場所で使われてしまうと、
それはすごく困ることなの。こちら側にも、あなたにも…」
「いや、まさかそんなこと、」
「あるのよねぇ。あなたはないと言い切れるのかしら？」

う、と対戯は言葉に詰まる。
あのときは、無我夢中で、とにかくやどりを守らなければいけない、
と思っていた。
けれど、それこそ、無意識であり、無自覚である。
言葉は武器だ。それが具現化してしまう力、言霊。
誰かを傷つけてしまわないといえるのだろうか？

「正直ねぇ、こちらとしても予想してなかった事態なのよ。やどりの話を聞いてもねぇ、そうそう考えないわ。いくら概念を理解したからといって、言霊を遣えるようになる人間はごく少数。私たちは代々言霊遣いの血統だから、そういう人をあまり見ないのよ」
「つまり俺は…結構はた迷惑な存在ってことですか」
「なんだ自覚はあったのか」
「黙れ禊」
「なっ…！？お前！敬語を使え！」
「あ、悪い。あんたどうにも童顔だから」
「ぬなっ！？人が気にしてることを…！！ぼ、僕は１５歳だ！ちゃんと１５歳だからな！！！」
「あ、俺と同い年だろ。敬語いらねーじゃん」
「貴様！お前その態度は…！！」
「あらあらすっかり仲良しさんねぇ」
「奥様、なぜそう見えるのですか…」
「葉桜、用意お願いねー」
「了解いたしました…」

やれやれ、と首を振りながら葉桜は部屋を出て行く。
あれー、と対戯は微かな暗雲に似た何かが背後から迫ってきているのを感じた。
…用意とは、なんでしょうか。
聞きたくない聞きたくない。対戯さんは聞きたくないよー。けれど、でも、目の前の掴みどころのない女性には、勝てない気がする。
これこそある意味絶体絶命というんじゃないでしょうか？
「ちょうどねぇ、今日は土曜日でしょう？ラッキーねぇ。今のうちに言霊の制御と叩き込んでおかないと」
「あ、あの、俺の選択肢は…？」

「学校の友達にふとしたときに言霊で傷つける可能性があるとしても、貴方は拒否するのかしらー」
「う、」
「禊ー、頼んだわよー」
「…やはり僕ですか僕なんですか奥様。話を聞いてるうちにまさかと思っていましたが、僕なんですね奥様」
「あら？貴方も拒否するの？」
「滅相もございません」

即答。やはりこの女性は最強だ。もうほぼ諦めきった頭の中でそう思う。
わかった、もう降参だ。おとなしくいうとおりにします。ええしますとも。
きっと外堀から埋められてくんだ。逃げられないんだ。

グッバイ、俺の日常。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「しろやん調子はどーお？」
「んー、よくわからないけどなんか今一瞬盛大に突っ込みたくなったんだけどなんだろうね」
「んー？なにそれ」
「ところで君また来たの？」
「そりゃー友達が入院してるんなら来なきゃねー」
「友達…？」

「うんともだ…、…え？もしかしてそう思ってたの俺だけってパターン？え、なにそれ辛いんだけど、え？」
「対戯は来ないのかなー」
「無視っ！？無視なの！？」

となりでぎゃんぎゅん騒ぐ京を無視して、代夜はふぅ、とため息をついた。
最近、対戯の様子がおかしいことには気づいていた。
長い付き合いだ。気づいてはいたが、わかっていた。自分に知られたくないものだってことに。
この親友は、危険なことには決して自分を関わらせようとはしない。嘘で平気で人を傷つけるくせに、その嘘で平気で傷つけた人間を守る。
そんな対戯だからこそ、自分は友人でありたいと思ったのだ。
そして、自分は、彼の嘘がわかる。いや、彼だけではない。人の嘘がわかる。自慢できるような特技ではないが、それだからこそ、気づくものがあった。
けれど彼だけは、嘘吐きでありながら、他の人間と違っていた。
わかるからこそ、代夜は、対戯を理解している。
でも、だからこそ、辛いこともあるのだ。
この怪我も、彼は気にしてしまっているようで。

「大変だなー…、」
「なにがぁ？」
「いいや、なんでもない」

おそらく、だけれど。おそらく、自分の推測であるが、対戯は、変なことに巻き込まれている。
あのひねくれものの癖に、いやに優しいところがあるあのペテン使い。

話してはくれないんだろうなぁとはぼんやりと思う。
さすがに嘘は見抜けても心を見ることなんて出来ない。でも、わからないからこそ、もどかしい。

「なーなーしろやん、悩み事か？」
「んーそうだねぇ」
「対戯もなんか変な感じだったしー、なんか悩み事でもあるのかなー。…俺またぼっち？辛いうえに寂しいんだけどー…」

おや、と代夜は京をまじまじと見た。
なんでか対戯に懐いてるのは知っていたけれど、ちゃんと理解してくれてたんだなぁとここで思わず実感する。
…自分は彼の母親か？と苦笑もしたが、それでもやはり、嬉しいと思う。
そのうえ京は案外自分のことも好意的に思っているのも確かだ。この少年は本当に素直に喋る。それはもうたまにイラっとくるほどに。
自分は嘘をつかないが、そのぶん本音を隠す。言わないけれど、自分も、対戯も、京を好ましく思っているのだ。
たまにうざいのは確かだけれど。

「…んー？今しろやん腹の中で黒いこと考えてなかったー？」
「あはは」
「え、なんで笑って誤魔化したの？え？え？」
「あはははは」
「しろやんんんっ！？」
「あー隣のベッドに眼帯美少女とか来ないかなー」
「うわあああ誤魔化されたあああああ」
「病院では静かにしなよ」
「うううう諭された…。それにしてもしろやんも、対戯も結構ギャルゲ好きだよね…、キャラに合わないんだけど」

「失礼な。エロゲも好きだよ」
「うん、真面目に言われても困るな…」
呆れたような顔で返された。いいじゃないか別に。好きなんだから。
そう言おうとした瞬間につきん、と頭が痛んだ。
あー、いつもの。と慣れた痛みに半ば諦めに似た気持ちを持つ。これが案外痛むのだからたちが悪い。

「ん？しろやん頭痛いの？」
「え、あ…まぁ、うん」

え、気づくの？
慣れすぎて頭痛が起こってもすっかり顔に出さなくなって、対戯以外気づかなくなったのに…、気づいた、だと？
京という男はそういうことに鋭いんだな、とつい感心する。

「いつものことだから平気」
「え、頭痛もちなの？大変だなーしろやん。痛いの痛いのとんでけーっ、てか？」
「どうせなら美少女にやってほしい」
「…顔に似合わずしろやん女の子好きだよね…」
「君、男にやられて嬉しいの…？」
「あ、俺の方が失言だった。女の子がいいです。心配そうな顔で、一生懸命言ってほしいです」
「いい線いってるじゃないか」

頭はずきずき痛むけれど、原因もわかっているし、特に気にすることもない。
酷いときは吐き気もするし、倒れた時だってあったけど、それはもともとの病弱さも原因だと思う。

情けないが、自分の体は病弱な上に貧弱で貧相で…あれ？なんか泣きたくなってきた。

「体の方は大丈夫なん？」

「うん、そこまで深い傷じゃなかったからすぐ退院できそうだよ」

「不審者に襲われたんだって？怖いなー世の中は。対戯は無事だったらしいけどさ、もしかしたら、明日二人ともに会えなくなるかもしれなかったじゃん。おっそろしーわ、そんなの」

「ほんと君僕らのこと大好きだよねぇ…」

「おぅ！！」

「…そうはっきり言われると照れるんだけど」

光は輝き空は青い。当たり前の当たり前で当たり前でしかない目の前の光景。

ふとたまに考える。僕がそう思い込んでいるものは、他の人にとっては、まったく違うように見えるのではないかと。

昔の絵描きたちがそうだった。彼らには、彼らの見え方があった。彼らには彼らの世界があった。

そう考えてみると、僕のこの目の前にあるものが、全て偽者のような気がした。

頭の中に降り積もっていく、偽者かもしれないもの。輝く光も、青い空も、もしかしたら酷く汚れたものかもしれないと。

だから、けして、目の前にはないものを否定してはいけない。

そう、この場所にいない彼のことも。

「はぁ…」

京が帰った後、病室で代夜は顔ごと枕に沈めた。

頭がずきずきと痛み、苦しかったが、それでも思考の海へと身を投じる。
代夜は対戯と違い嘘をつかない。
だから隠す。
それが、なににもならないとしても。

『黙れ。代夜、…関係ない一般人巻き込んだ挙句どういうつもりだよ。狙うのが俺だけならまだ良かった。それなら、まだ良かった。むかつくけど、イラつくけど、俺だけなら、まだ、良かったんだよ』

『あぁ俺のせいだ。俺が変なことに関わったからこうなった。俺のキャラじゃないことをやって、俺は何やってたんだろうな。…でも、こいつは、代夜は、何も関係なかった。俺一人だけ、関わったのに、なんで代夜まで巻き込まれる必要があるんだよ、どうして、』

「…いったいなにしてるんだよ、対戯」

小さな呟きは、そのまま静かな病室内に溶けて消えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　言葉は鬼と成りて

「では今から非常に不本意だけれども、この白樺禊(しらかば)が、お前の鍛錬をつけることにする」
「わーぱちぱちー」
「…やる気ないのか」
「…あると思うのか？」
「……奥様に悪気はないんだ」

連れてこられたのは道場のような場所だった。周りの壁は木の板で張られており、床は畳。掛け軸には一球入魂と書かれていた…あれ？おかしくね？
少なくとも、柔道や空手の練習をするのには最適な場所だろう。俺何しに来たんだっけ、と一瞬対戯は思う。まぁわかっている。わかっているのだが、こうもとんとん拍子に自分の望まぬ話が進んでいくと、どうもこうも現実逃避以前に思考が遮断されていく。
知っているさ、無駄だということに。なんだこれ、泣けてくる。

「では、まずは簡単な言霊の出し方だ…、ほら」
「ん…紙？」
「そう、それを浮かせろ」
「え、なんだよそれ、超能力？」
「こ・と・だ・ま・だ！！言霊のことは知ってるだろう？意味を持つ言葉は力となる。言葉の力は外部にも作用する。そういうことだ」
「俺にはさっぱり理解できねぇんだけど…まぁいいや、つまり浮け、とか言えばいいのか？」
「そうだ。まぁだが、言葉の中に意味を持たせないと作用しない。

考えるんだな」

つまり浮けって考えながら言葉を発せってことだな、となんとなく理解して、対戯は口を開く。

「うけ」

しーん。

…。

……。

「この紙おかしいんじゃね？」

「んなわけないだろうが！！」

ぺっちーん、と良い音をたてて対戯の頭が叩かれる。

いってぇな！と対戯が文句を言えば、お前が可笑しなことをいうからじゃないか！と怒られる。

「あのなぁ、言葉の音は確かに『うけ』、となるがな、言葉は意味を持つと言っただろ？うけにもそれぞれの意味がある。『浮け』だけでなく、『受け』、『請け』、『享け』…。これほどまでにたくさんの意味を持っている。言霊遣いはそれを正しく理解し、言葉を遣わねばならない」

「ええー…めんどくさ…」

「もし言葉が、…傷をつける言葉が、力を持ったとすれば、どうする」

「……」

「大切な人を、傷つけることになるんだぞ？」

そう言った禊の顔は、どことなく暗く、何かを堪えているような気がした。
はぁ、と対戯はため息をつきたくなる。だから嫌だったんだ。
重いもんなんて、背負いたくねぇんだよ。

「…『浮け』」

ふい、と紙が音も立てずに目の前に何の支えもなく浮き上がる。
正面の禊が微かに目を見開いた。
それを対戯は特に感情の篭もらない目で見つめながら、内心舌打ちをする。
…面倒くせぇ。
言霊にも、結局のところ甘い自分にも。

「…ふん、出来るじゃないか。じゃあそれを前に進ませろ」
「え、あー…っと、『前へ進め』」
と、見せかけて後ろのにバックしたり。とか。
なんてな。

ビュッ

「え」
「あ」

前に進むはずだった紙は何故かすごい勢いで逆方向へと進み、壁に突き当たり、へらりと情けないような姿で地面に落ちた。
…あれ、俺前に進めっていってなかったっけ？

「…もう一回だ」

どこから取り出したのか、また紙を取り出して渡してくる禊。
どことなく、顔が引きつってるように見えるが気のせいなんだろう。
そうに違いない。
対戯はその紙を持ち、先ほどと同じように浮かせて見せる。
それからまた、前に進むべき言葉を…。

「『前へ進め』」
の振りして後ろへ行けばいいのに。

ビュッ

「…」
「…」
「あはは…」
「…あえて言おう」

ぴくぴくと、眉間に皺を寄せながら、禊は言う。

「な・ん・で！！また後ろに行くのだ！！！」
「えーと…浮けと見せかけて後ろー、とか思ってたから…？」
「どんだけ捻くれてるんだ貴様ぁ！！」

盛大にツッコミを入れていただきました。
いやいやいやいや、と対戯は思わず自分でも脳内でツッコミを入れる。
確かに嘘吐きですよ俺。ええわかってます。
だからといって…言霊まで？
先ほど意味を乗せて放つ言葉が言霊として成り立つとか、そんな感じのことを言ってたけど…、それ正しく言わなくてもいいの？

「どんだけ性格歪んでるんだ…。普通言霊は言葉に沿って出てくる。なのに、お前は…言葉じゃなく、思った本当の意思に沿って言霊として反映された。なんていうか…本当性格悪いな」
「うっせーよ、そこまで蔑むな馬鹿」
「っていうか性根捻じ曲がってる。普通ならありえない。なんで言葉通りに言霊が作用しない。どんだけおまえ捻くれてるんだ。思春期なのか？」
「お前も同い年だろ」
「あー…はぁ、もうどうでもいい。それはそれでいいとしよう。お前はかなり性格が悪いらしいからな、とりあえず制御についての訓練を行う」

諦めたように怒っていた声を落ち着かせ、改めて懐から紙を取り出した。
いったい何枚持ってるんだ、と突っ込もうとしたがやめる。どうせ何言っても無駄だ。
ならやるだけのことはやって、さっさと帰ろう。
ふと、祝の食えない笑みが脳裏を過ぎったが、気のせいだと自分に言い聞かせて目の前のことに集中した。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「よーよーそこの坊ちゃん」
「はい？」

代夜のお見舞いの帰り道であったので、特にこれからの用事もなく、いつも首にかけているヘッドフォンで音楽を聴きながら、ぶらぶらと散歩でもしようとしていたころだった。

人通りのない道、どこからともなく人の声が聞こえたので、自分のことか？と思い京は思わず返事をした。
けれど、振り返っても、人の姿はない。

「あれ？聞き間違い…」

そう呟いて前を振り向いた。
瞬間、先ほどの光景とはかけ離れてものが。

「こっちだ」
「え、ええええっ」

すぐ目の前に巨大なサングラス。思わず京はよろけるように二、三歩離れる。

「驚きすぎだろーが」
「お、驚くんですけどそりゃっ！？」

京が怯えながらまじまじと目の前の女性の姿を見る。
すらりと高い背に、ウェーブした黒髪。大人びた色気を放ちながらそこに立つ存在。
おや、と京は目をぱちくりさせる。
めっちゃ美人だ、この人。

「ところで綺麗なおねーさん俺になんの御用ですかー？」

がらりと態度を変えて笑顔で話しかける京。そんな姿に明らかに呆れの色が女性から浮かんだが、構わずに京はにこにことしている。

「もしかしてお茶のお誘いとかー？」

「いーや、悪いけどあたしはガキには興味ねぇんだよ」
「そんな、俺もう高校生ですよー？」
「あたしからみたら情けねぇヘタレにしか見えねーよ」
「ひどっ！？」

俺泣くよっ！？とたいしてショックでもない風で大袈裟なリアクションをする京。京自身も冗談のつもりだったのだろう。けろっとした顔でへらりと笑う。
今までつけていたヘッドフォンを外し、ちゃんと女性の話を聞くような姿勢を見せた。

「それで？道案内かなんかですか？綺麗なおねーさん」
「いんや、聞きてーことあったんだけどよ」

一瞬間を置いて言う。

「お前虚室対戯を知ってるか？」
「ん、…対戯？」
「まぁ知ってるよな」
「はい、友達ですけどー…、対戯がどうかしたんですか？」

首を傾げながら京はあの嘘吐きの友人のことを思い出す。

「んまーちょっとあいつに興味があってなぁ」
「え！？さっきガキには興味ないって言ってたじゃないですか！！」
「あのなぁ、そういう意味じゃないっての」

懐から煙草を取り出して口元に銜え、ライターで火をつける女性。
京は、体に悪いですよ、と言ったが軽く一睨みされ、困ったように笑う。

「対戯のことを知ってるんですか？」
「あぁ、ちょっとな。面白い奴だな、と思って」
「ええ、対戯はほんっと面白い奴です！」
「おや、」

女性がにやり、と口元に嫌な笑みを浮かべた。
いまだ純粋ににこにこと笑う少年へと、軽い悪戯心が生まれた。

「随分あいつのこと気に入ってるんだな」
「そりゃ友達ですから」
「あいつは嘘吐きなのに？」
「はい？」

「あいつの言葉全てが嘘でも、お前はあいつを信じられるか？」

きょとん、と驚いたように京から笑顔が抜け落ちた。
ぱちぱち、と二、三度大きく瞳を瞬かせながら、女性の姿をそこに映した。
にやり、と女性は、…縁は笑う。

「あたしはあいつが嘘吐きだって知ってる。そりゃあ見事な嘘吐きだ。けれどさ、お前嘘吐きってのを信用できるか？嘘吐きって奴は甘い言葉で囁きかけて落とすところまで墜とす。這い上がれないくらいまで深くな。あたしはそういう奴らをたくさん見てきた。それでも信じられるか？」

悪魔の睦言。人を迷わせる。
何かを試すような輝きをその瞳に宿しながら、あくまで楽しそうな笑みを絶やさない。

縁。人と人との縁。それは本当に存在し、ここに在ると証明できるものであるのだろうか。
あの嘘吐きの少年が、そんなものを作れると、

「…何言ってんですか？」

けれど、心底わからない、とでも言いたげに、純粋な疑問の言葉が、ただ当たり前のように京から零れる。

「信じるとか信じないとか、それ以前ですよ」
「は？」
「俺、あいつのこと好きですし、嘘吐かれても、友達だと俺は思ってます」

にっこりと、笑う。

「信じる理由なんて、そのくらいで十分じゃないですか」

そこには表も裏もなく、ただ、当たり前で、日常的で、不変的で、真実のように。
それこそが濁りもなく、京の一部の縁として、ただ繋がっている。
悪魔の囁きなんて気にもしないで。
嘘吐きと言うことを気にも留めないで。
たった一つ変わらないことのように。

「あいつが俺のことどう思ってようが、俺はあいつを友達だと思ってる。これ以上に、信じる理由がありますか？」
「……」

信じきっている。あの嘘吐きを。

予想外の答えに縁は一瞬呆けたが、すぐに口元に、面白いものを見たかのようなあの笑顔を浮かべる。
けれど、どことなく優しげである気がした。
虚室対戯と言う人間は、漫画の主人公のような人気者のような人間ではない。
けれど、近しい間のものは、これほどまでの信頼感をみせる。
これじゃあの襲われたという親友君も似たような答えが返ってくるかな、と縁は煙草の煙を吐き出しながら考える。
先ほどまで、対戯の、学校での交友関係を縁は辿っていた。対戯のこと聞き込み、それからあの親友とやらに会いに行こうとおもったが、

「その必要はなさそうだな…」
「あれ？何か言いましたか？」
「いんや、あたしは帰るよ。ありがとな」
「ええー…行っちゃうんですか綺麗なおねーさん…」

残念そうな顔の京を尻目に縁は悠々と帰路に着く。
あぁ、そういえば、と思考の淵で考える。そういえば、あいつの記憶を『消して』なかったな。
怪しまれないように証拠は残さないつもりだったが…、まぁ面白い。
にやり、と笑う。
せいぜい焦るがいいさペテン遣い。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

鬼というものは、確かに存在する。
特に大男というわけでもなく、角が生えてるわけでもない。
ただ、『存在』するのだ。
人から作られる、溢れすぎて壊れた感情の、『鬼』が。

「あ、あああああ」

がちがちがちと、体が震えている。頭の中がぐちゃぐちゃと混ざり合い、何も考えられない。
今私は何をした、今私は何をした、今私は何をした、今私は何をした、今私は何をした。
手の中の冷たく固いもの。体中に張り付いた赤い何か。
今私は何をした。何をしてしまった。
取り返しのつかない何かを。
壊れた。溢れた。決壊した。破裂した。崩れた。零れた、千切れた。
引き裂かれた。
落ちて墜ちて堕ちていく。
視界が暗く沈んでいく。

「あああああ」

自分が何をしたというのだ。自分は何も悪くない。何も悪くない。
悪いのは全て目の前の男なのだ。そうなのだ。男が悪いのだ。
自分は悪くなどないのだ。

「ああああああ、ああああああああああああああああああっ！！！」

あいつが悪い男が悪い私は悪くないあいつが悪い男が悪い私は悪くないあいつが悪い男が悪いあいつが悪い男が悪いあいつが悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い

男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い。

そうだ、全て男が悪いのだ。

そうだ、そうなのだ。男という存在全てが悪いのだ。殺してしまおう。

それがいい、それでいい、そうしなければならない。

憎い。男が憎い。

鈍く赤い光を灯した瞳が、横になった三日月型に歪む。

壊れた人はもうヒトして生きれるか。

言葉に壊れ、崩れた心。溢れた感情は声に乗り鬼と化す。

「ヴァァァァあああ嗚呼嗚嗚呼嗚嗚呼っっっ！！！！！」

黒い霧が立ち込める。叫んだ痛みによる声は、一つの形を成す。

憎イ。憎イ憎イ憎イ憎イ。冷たき感情の伴う声は、その体と共に、現れる、鬼。

殺セ、男ヲ。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「あーあ、綺麗なおねーさん行っちゃったなー」

残念そうに唇を尖らせて、京はため息をついた。

お近づきになれるチャンスだったのにーとぶつぶつ独り言をしながら、散歩をするという言葉のまま、周りの景色を見ながら歩いていた。

ちょうど空は雲一つなく晴れの、良い天気だった。うん、と伸びをする。

「でも綺麗なおねーさんに会えたし、今日は良いことあるかもなぁー」

少し気分を上げながら、大きく空を仰いだ。
暗いのは苦手だ。明るい方が良い。
だから、早く対戯の悩みが解決して、代夜も退院すればいい。
ヘッドフォンの音量を上げる。最大音量まで合わせて、音楽をがんがんと響かせた。
凄まじい音が流れているのに、特に辛そうな顔もせず、悠々と歩く。
代夜いわく『今時の子は…』なのだが。
ロックバンドの演奏と溢れてくる英語。それを聞きながら歩く京にはわからない。
後ろから来るものに。
ゆっくりと、後ろから、向かってくるものに。

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

「もうさ…やめていいか…？」
「だ・め・だ」
「あのさぁ…そのさ、制御の練習さ、なんで…、針に糸通すことなの？」
「無駄口叩いてないでやれ」
「納得いかねぇ…」

一方その頃対戯は、いまだ禊と制御の特訓を続けていた。

その内容は、小さな針に糸を通すというだけである。特にどうしてなのか理由も教えてもらっていないので、手先が特別器用でもない対戯は、イライラしながら精神をすり減らし、この行為を繰り返している。
通した針も２０本越えた。ねぇこれ無駄じゃね？帰ってよくね？

「ほら、早く続けろ」

冷たい目で禊は対戯を急かす。
２０本。２０本だ。この面倒くさくその上役に立つかわからない行動をもう一時間も続けてきた。指に針が何回も刺さった。
もうイライラも最高潮に達してきて、ぷつん、とどこかでなにかが切れる音を聞いた。
何遠慮してたんだ俺。帰ればいいじゃん。

ぴりりりり…

「…ん？」

急に室内に携帯の音が鳴り響いた。
対戯がおや、と懐を探ると、ぴかぴかと光を発しながら鳴り響くそれがあった。
禊が電源を切っとけ、と言わんばかりにわかりやすく眉間に皺を寄せたが、お構いなしに対戯は電話に出る。
もしもし、とお決まりの言葉を言ってから黙り込み、時折頷きながらしばらく話を聞いている様子だったが、その顔がだんだんと強張っていく。

「母さんが…倒れた…？」

ぴくり、と禊の眉が跳ねた。

「わかった、今すぐ行く！父さんはそこで待ってろ！！」

「お、おい…」

「悪い禊！急用が出来た！また今度な！！」

ぽち、と通話を切ってから、一目散に対戯は駆け出した。禊が止めようとした頃には、いつの間にか対戯の姿は声が聞こえないほど遠くになっていた。

けれど、これは仕方ないことではないか…？さすがに親が急病とあっては…、と禊が思い直すが、ふと、親、と言う単語に違和感を持つ。

…確かあいつ、親は海外出張中とか言っていなかったか…？

「…謀(たばか)ったなあの嘘吐きめが…！！」

そうかそうか、海外から電話か。いきなりいまから一人で海外に行くとでも言うのか。

…ふざけるなあああああ！！！！！！！！！！！！

そう叫んだ声を万葉家中に響かせながら、真っ赤な顔で眉を吊り上げた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

かちゃかちゃと携帯を弄りながらふふん、と鼻歌を漏らす対戯。

そろそろバレてる頃だろうかな、と能天気に考えながら、携帯の通話ボタンを長押ししてみる。
するとぴりりり、と発信音が、まるで電話のかかってきたときのように流れた。

「こういう機能って便利だよなー」

それはこういうときのために作られたものではないのだが。

「でもなんだかまだ嫌な予感がすんだよなー」

こういうのってよく当たるから嫌だ、とぶつぶつ呟きながら家への進路をとる。
あの時間から開放されたことによって、少しだけ対戯の気分は上がっていた。
なんで針に糸通すのを延々続けなければならないんだ、ふざけてんだろ。
もういっそ、帰って寝よう。そうして頭の中を整理しよう。
今日のことはやはりあまりに鮮明すぎて忘れることは出来ないかもしれない。またあの言霊遣いとかなんやらがやってくるかもしれない。
けれど、やはり自分には平凡が一番なのだ。だからひとまず家に戻ろう、と思う。
いや、その前に親友のお見舞いにでも行こうか、と考え直し、進行方向を変えようとした、そのとき、

ぞくり

背中に悪寒が走った。え、と立ち止まる。
なんかやばい、と、ただそれだけの『予感』が瞬間的に体の中を駆

け巡った。
いや、気のせいだろ。
どうせ気のせいだ。
そう自分を納得させて、先に進もうとした、が、どうにも体は動かない。
…悪い予感ほどよく当たる。
そして、ここ最近の出来事を思い返し、嫌な予感、と考えて、思いつくのはそれはただ一つのことだ。
不可思議な体験をしてきて、言霊をなぜだか使えて、限りなく科学じゃ説明できないことを何度も経験したばかりだ。
予感だって、気のせいにしたらいけないんじゃないか。

「…ちっ」

今日はやめよう、と決める。そうだ、やめておけばいい。
面倒ごとはもうたくさんだ。

ぴりりりりり…

「…ん？」

今度は本物の電話。嫌な感覚が脳裏を掠めたが、開いてみれば【芙蓉京】という名前が出ていた。
なんだ、と安心のために舌打ちをしてから、あいつなら別にいいか、と電源を切ろうとした、が、なんとなく、また背筋に冷たいものが走るのを感じた。
…なんだよ。

「はいはい、なんだよー…」

別に、いつもだったら切っていたかもしれない。でも、なんとなくだけど、切ったらいけない気がした。
今、話さないと、後戻りできないような、そんな事態になる気がして。

「…？おい、京？」

電話に出ても、何故かしばらく無言の状態だった。微かな息遣いと、走るような音だけが響いている。
おい、と再度対戯は呼びかけた。小さな声が、電話の向こうから漏れる。

『…ぁ、……け、て…』
「は？聞こえねぇぞ？」
『…て、……ぃ…』
「…は？」
『たすけ……、…いぎ…』
「っ、」

今、なんて？

『た、いぎ…』
「おい！！お前今どこだ！！」
『わかん、ない…、おれ、追いかけ、られてるのに…、おん、なの、人…なのに、違う…そ、れに、だれ、もいない…！』
「京！」
『こわい…なんか、ちがう…おと、が…、こえ、が……』

何を言っている？何を言ってるんだ？
追いかけられてる？女？違う？怖い？

…嫌な、予感？
いつの間にか対戯の足は駆け出していた。逸る気持ちが頭の中を蹂躙し、吐き気がする。
電話口では、ひたすら京の名前を叫び続けた。

「京！返事をしろ！京！」
『お…なの人…こわい…、まるで、おに、みたいな…』

…鬼？
怖い、女？

『おこってる…よく、わかんない、けど、怒ってる…』

怒ってる？
感情？

「まさか…」

そんな、こんなに、『都合悪く』、あるはずが…。
嘘だ、ありえない。まさか、そんな…、
対戯の頭の中で、入りたての知識が限りなく循環しながら悪い予感を引き立てた。
冷たいものが這い上がってきて、その気持ちの悪さに膝をつきたくなる。

「おい！お前本当にどこにいんだよ！！」
『わ…かな…、めちゃくちゃに、走って、たから…』
「〜〜っ！！じゃあ何か目印は！？」
『え…あ…、なんか、薄暗い…』
「暗さでわかるか！！」

『あう、…え、と……、青い、ベンチがあって、黄色い、滑り台の、公園……』
「…、そこなら知ってる！とりあえず気張って逃げろ！！」
『対戯ぃー…』
「大丈夫だ！！必ずそっち行く！！」

俺は何でこんな必死なんだろう。
何で誰かのためにこうも全力で走ってるんだろう。
面倒くさいのには関わりたくないと思っていたばかりじゃないか。
こんな、万葉家で聞かされた『あのこと』ともいえないはずなのに。
確証もないはずなのに。
偽善者染みた行為をして、なん利益があるんだよ。

「どうなってんのか知らねぇけど、絶対無事でいろよ！待ってろ！」
けれど、満足にも喋れない中、一番に電話してきて、一番に助けを求めて。
俺のことを、友達だと、当たり前のように、そう言った、あいつが。

「絶対、助ける」
『……うん、信じてる』

何一つ疑わず、このペテン使いを信じるという。
京は馬鹿だ。間抜けだ。お人よしだ。けれど、嫌いにはなれない。
あんなに、ぐちゃぐちゃな喋り方なのに、その言葉だけは鮮明に、明確に、はっきりと、言う。
対戯はひたすら走る。走る。走る。走る。早く見つけなければいけない。
助けるなんて大見得張って、自分に何が出来るという。
嘘しか取り柄のない自分が。

…けれど、嘘しか取り柄のない自分が、やどりを助けることができた。
それだけは、真実なのだ。
走っているうちに息が上がってくる。苦しくなる。足も疲れのための痛みを放つ。
けれど止めてはいけない。止めてはならないのだ。

「このやろ…！！」

間に合え。間に合え。間に合ってくれ。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

意味がわからなかった。なんで自分が追いかけられているのか。なんで、自分が、包丁を持った女性に追いかけられてるのか。
女性は、目をぎらぎらとさせながら、狂気に塗(まみ)れた顔で自分を追ってくる。
よくわからない。耳が痛い。怖い。怖い。怖い。
いいことなんか、ぜんぜんなかった。
涙を堪えながらただひたすら走る。数十分も走って、息も苦しくて、もう倒れてしまいたい。けれど、倒れたらきっと自分はは死ぬ。
ありえない、なんでこんな目に合うんだ。
女性は叫び声を上げながら、京をひたすら追いかける。
その目は血走り、理性などというものを遠くに捨て去ってしまったみたいだった。

「憎イ、憎イ憎イ憎イ憎イ…！！！男ガ憎イ！！！」

重く冷たく感情の強く篭もった言葉、…『篭もりすぎた』言葉は、
大きい『何か』の力を得る。
人が鬼と為す理由。ヒトが鬼を生み出す理由。
言葉は人を殺す。その意味のままに。
一色に染まってしまった言葉は、その方向にしか動くことが出来ない。なぜなら、そうするしか生み出された意味はないからだ。
京は言霊遣いではない。だから、見えるよしもない。
女性の背後にあるものを。
微かに輪郭をぼやかしながらも、確かにある、それを。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　言葉は鬼と成りて（後書き）

とばっちり京くん。
多分可哀想な役回り。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　生まれし心の成れの果て

鬼。人はその感情により、鬼と成り、その感情に満ちた言葉は、その形を作る。
鬼は人から作られる。かくいう、人を殺す人間もそう呼ばれる。
殺人鬼、と。

白いカーテンがふわり、と揺れる。淡い光が、窓ガラスを通して病室全体に降り注いだ。
つん、と鼻につく病院特有の臭いももう慣れた。代夜はただぼう、と窓の外を見ながら、その双眸の視線をどこか遠くに宿していた。
窓は開いていて、外からの風が代夜の色素の薄い髪をさら、と揺らす。

「きっと、話してくれはしないんだろうね」

小さくぼそり、と呟いた。
呆れや、諦めに似た笑みが、八の字に垂れ下がった眉と共に顔に出る。

「そんなの、寂しいだけなのになぁ」

そう零した言葉は空気を微かに震わせただけで、静かにこの病室内に溶けていく。
代夜は悲しそうな顔で、しょうがない、という顔で、親友のことを思い浮かべる。
この傷を負ったあの日。

自分は気を失ってなどいなかった。
全て覚えていた。
けれど、言わない。代夜は嘘をつかない。だから隠す。だから、誰にも知られることはない。
きっと彼は、自分を巻き込むことを恐れているんだろう。
あのペテン使いは、そういうところで、人の気づかぬところで優しさを見せるから。
だから、聞くこともできない。彼のために。彼が自分に秘密にしようとしていることだから。
聞けない。知らないでいることしかできない。そうすることしかできない。
『あんな』親友の姿を見ながらも。
不意に、窓からなんだか生暖かく、嫌な臭いのする風が吹いた。一瞬のことだったが、それは鮮明に代夜の脳内に焼きつく。
あれ、と首を傾げたが、あまり気にすることじゃない、そう考え、ぽすん、と体をそのままベッドに倒す。その瞬間じくり、と傷が痛んだが気にせずにただ、目を閉じた。

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

「アア嗚呼嗚嗚呼嗚嗚呼っ！！！！」
「ひぃっ！！」

後ろから追いかけてくる女性の叫び声を聞いて、思わず京は情けない声を上げた。
ちら、と後ろの様子を伺って後悔する。異様な光景を目に焼き付ける羽目になった。
長い黒髪を振り乱しながら、ひたすら包丁を京に突き立ててしまお

うと、それだけを考えているかのように、その目線は京を捉えて話さない。
（なんで！なんでなんで！なんでこんなことになってんだよ！！）
当たり前のように、京の中には疑問が湧き上がる。
（代夜のお見舞いに来ただけなのに！！！）
泣きそうになるのを堪え、必死に走った。
（今日はいい天気だと思ったのに！）
息が苦しくて、渇いた喉からときおりヒュー、と音が鳴る。
（『明るく』て、いい日だと思ったのに！）
がんがんと、あまりの出来事に、酷く頭が痛んだ。痛むというより、嫌な音が耳元で騒いで、きーん、とした深いな金属音が響いている感じだ。

「く、そぉ！！」

京は公園の中を、追いつかれないようにひたすらぐるぐると走っていた。
このまま知らない道を走って行き止まりの道に出てしまうより、ここで助けを待つ方が余程良いと思ったからだ。
これだけの叫び声を上げてるのに、誰も気づかない。そんな確かな『異常』をひしひしと感じながらも、京は走る。
待ってろ、と言われたのだ。だから、自分は待たなくてはいけない。

「ああアアアア嗚呼嗚嗚呼嗚！！！」
「うっさい！！」

京は地面にあった石を通り過ぎながら拾い、それを女性に投げつけた。これで少しは怯んでくれたら、と思ったのだが、何故か石は女性のすぐ手前で弾かれる。

はぁ！？なんで！？と声をあげる京。弾かれた石は地面に転がり、ぱきり、と半分に割れた。
おかしい。ひやり、としたものが背筋を凍えさせる。いくらなんでも、何も触れずに石を弾き返すことなど不可能なはずだ。しかも、二つに割ってしまうほどの。まるで、人間の力じゃないみたいな…。
…人間の、力、…『じゃない』、みたいな…？

待てよ、それじゃ、なんなんだ。ばくばくと脈打っていた心臓が、さらに音を立てて加速する。
もう一度確かめるように、近くの石を拾い、思いっきり女性に投げつけた。勢いよくその石は女性に向かうが、やはり、女性に届く手前で弾かれる。
おかしい。絶対に、これはおかしい。
ありえないんだ。こんなこと。

「ぬわぁ！！」

石に気をとられていたら、京の足首がぐきり、と曲がり、体が傾きそのまま地面に倒れる。右半身をそのまま叩きつけ、一瞬だけ頭の中が衝撃に支配される。
けれど、あいつは、と京が女性のほうを向く。そこには先ほどよりもぐん、と縮まった距離にいる女性が。
口元に歪んだ笑みを貼り付けて、包丁をその手に、ゆらゆらと体を左右に揺らしながら、近づいてくる。走るのをやめて、ゆっくりと近づいてくるその様は、京の恐怖を倍増させた。
――…でも、待ってろって、言われたんだ。
唇を噛み締めながら、恐怖により固まる体に鞭打ち必死に立ち上がる。
もう諦めたかと思っていたのか、女性は驚いたように一瞬体を固め

てそれから憎々しげに顔を歪めさせる。
足が震えて、正直立っているのさえ辛かった。いっそ、もう諦めた方が楽なのではないかと。
でも、待ってろって、待ってろって、対戯が、言ったんだ。
だから、待たなくちゃ、いけない。
待ってろって、言ってくれたから。

「く、るな！！！」

無駄だと知っていながらも、地面に落ちているものを必死で投げつける。
がくがくの足も引きずって、必死に逃げた。
けれど、次の瞬間

ドガァッ

「あぐ…！！」

横から、いきなり強い衝撃が起こる。なにか、『大きなもの』に殴られた感覚が体中を支配した。急激な痛みに頭がついていかない。
地面にそのまま叩きつけられて、腹の空気が一気に漏れる。頭も打ち付けたようで、意識が霞んだ。
ぽたり、と。
赤色が地面に落ちる。

「…ぁっ…」

どうやら額が切れたようで、頭から血が流れてきている。右目にそれは入り込み、片方の視界を赤く染めた。
頭を打った衝撃はまだやまず、こちらへ歩いてくる女性の姿が二人

にも三人にも見えた。
これは本格的に、やばい。
きぃん、と耳鳴りがする。口の中で血の味がした。

「ア、ハハハハッ！！！アハハハハ！！」

もう、目の前に女性が来ていて、包丁を振りかざしている。刃の部分が太陽の光を反射して鈍く光る。
女性の顔は狂気に歪んでいて、もう人間の顔とは思えなかった。
…いや、それこそ、『人間らしい』顔、なのかもしれない。

「男ハ、排除、さレるベキ、男は、死ヌべきィ！！！」

女性が、包丁を、振り下ろした。
けれど、ぎりぎりで京は体を捻らせ、それを避ける。
ざくっ、と地面に刺さった包丁は、その半分まで体を沈めている。
なんていう力だ。
抜き出そうとする女性を横目に、なんとか立ち上がり、逃げ出そうとするが、数歩歩いてすぐ、よろめいて倒れる。
先ほどの吹き飛ばされたダメージが体を思うように動かせてくれなかった。

「うぅ、う…」

逃げなきゃ、逃げなきゃいけないのに、体がもう、動かない。
腕も足も頭もずきずきと痛んで、意識が遠のくのを必死に堪えた。
（待たなきゃ、いけないのに）
視界がぼやける。
（ちゃんと助けに来てくれる、人がいるのに）
何してんだよ俺、と小さく1京は呟いた。

諦めたら駄目なのに、もう体が動かない。

「逃がサなイ…！」

包丁を抜いた女性が、左右に揺れながら、こちらへ向かう。
逆手に持った包丁が、いやに生々しく感じた。

「来る…なよ…」

なんとか起き上がろうとするが、体に力はもう入らない。きっともう、包丁を避けることもできないだろう。
右目に入った血で見る赤い世界は、絶望的で、壊れたように見えた。
今度こそ、女性は包丁を突き立てようと、包丁を振りかざす。
そして、勢いよく、振り下ろした。

――空は青くて、雲は白くて、明るくて、優しい日だと、思ってた。
暗いのは苦手で、光が差す場所にいるのが、好きだった。
きっと、そんな日は、いい日になると、そう思っていた。

「っ…！！！！」

ガキィッ！！

高く鳴る金属音。

「――っ！？」

高く飛び、遠くに落ちる包丁。
女性の顔が、驚きに染まった。

京の目の前に立つ、後姿。
両手で鉄パイプを握り締めて、そこにいる、待ち望んだもの。
「っ…！！対戯！！！」
微かに声が震えた。どっと安心感が噴き出した。
顔だけこちらに向けた対戯は、にかり、と笑って見せる。
「遅くなったな」
「…ううん、信じてたよ」
対戯が女性の方に顔を向ければ、憎々しげにこちら睨み付ける姿が。
そして、その背後に浮かぶ、大きな『それ』を見た。
全体的な茶色い体に、大きな鬣を生やし、ぎょろりと緑色の目を光らせ、両手が異常なほど大きい。その口には、大きな牙をつけていた。
「これが、『鬼』、か…」
鬼・感情量中の下級【憎悪】
知らず知らずのうちに対戯の頭の中に流れ込んできた。
うわまじで普通じゃなくなってきやがった、と小さく零す対戯。
「対戯、あれは…」
「ん、大丈夫だ。よく頑張った。褒めてやるから感謝しろ」
「なにその上から目線…」
「お前は寝てろ。俺がなんとかしてやっから」
「なんとかって…あれ相手に…？よく、わかんないけど、あれ、普通じゃ…ないよ…？」
「わかってるさ。包丁持ってる時点で危険確定だ。これなんの火サ

スだよ、つかホラーだ。恐ぇよ」
「そんな…」
「まぁでも、俺も普通っていえるかわかんねぇし」
とりあえず寝てろ、と対戯が言う。なにそれ、と京は思わず笑みを零した。
安心やら、嬉しさやらで、京の張り詰めていた緊張が一気に解ける。かくり、と意識が遠のき、京の視界が霞んでいく。
大丈夫だ、と確信できた。彼は、嘘吐きだけれど、だけれど、信じることが出来た。
だって対戯は、嘘をつくけど、歪んだ人じゃないから。
ぼやけた視界の中でも、対戯の姿は、いつも通りに余裕たっぷりで、微笑みながら、京の意識は暗転した。

「…よくもやってくれたな」
自分でも驚くくらいに冷たい声だった。
鉄パイプを強く握る。酷くぎらついた目で女性を睨み付けた。
後ろには頭から血を流し、体に傷をつけた京。
「…ぜってぇ許さねぇ」
人の二倍ほど大きい『鬼』は、その体に十分にその威圧感を纏わりつかせその存在を主張する。
ふと、それは、あの『入鹿』と名乗ったあの壊れたような男の周りにいた化け物に酷似している、と気づいたが、そんなこと考えてる場合じゃない、と思考を打ち消す。
どうやって、あの鬼を倒すのか。

溢れすぎて壊れた感情の成れの果て。その叫びが命を灯し、『鬼』と為す。
哀れだとは思う。だけれど、同情する気なんかさらさらない。

「男、憎イ…、殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ、死ンでしまエばいイ」
「…てめーの親父今頃泣いてるぞ」
「男、男男男男男男男。男男男男男男男男！！！！！！！！」
「…きめぇよお前…、男男って…執着しすぎだっての…」
「男なんテ、死ねバいいィ！！！！！」

女性の、喉が潰れそうなほど甲高い叫び声に反応して、鬼が襲い掛かってくる。
そんな姿を、くだらない、と対戯は吐き捨てた。
振り下ろしてくる鬼の手を避け、対戯は女性のすぐ横を通り抜ける。
少しでも、とこちらの方に意識が向くように、わざと、あからさまに鼻で笑ってやれば、簡単に怒りをこちらに見せる。

「男男男って…欲求不満か？みっともねーなぁ」
「……っッッ！！！？」
「はしたないぜ？いい大人が」

女性を見て、そんなことではないのは一目瞭然だ。長袖のシャツに長袖のズボン。けれど微かに見える痣。少し考えて、だいたい夫か何かのＤＶ被害にでもあってたのだろう、と対戯は思う。
男というものを恨むのはわかる。けれどだからといって関係ない人間を巻き込むのはお門違いだ。
どんな理由があったって、どんなに同情されることがあったって、それで京を傷つける理由にはならない。
こんなの自分らしくない行動だ、ときっと誰かは言うだろう。淡白で、冷めてて、そんな普段の自分を知る人間は。

けれど、駄目なのだ。そのことを甘さだと対戯自身は言う。自分の世界を壊されたくない。ありふれた、自分が生きているこの場所を。そこには、京だって、もちろん代夜だっている。それを傷つけるっていうのなら、それなら。俺だって、容赦しない。

「口を開けばその単語しかでねぇ、なんてそんなのが鬼生み出したやつ？その執着ぶりにはある意味敬意持てるよ。ちぃっとも尊敬は出来ないけどな」

「なにヲ…！！男ガ！！男が！！」

「じゃあ聞くけどさ、ここにいる京はあんたに何かした？蹴った？殴った？酷い言葉でも吐いた？っは、ありえねぇ。自慢にもなんにもなんねぇけどこいつひょろっちいぜ？体力ないし貧弱だし音楽ばっかガンガン聴いてる馬鹿だ。でもこいつの人の良さだけは保障する。こんな俺みたいなペテン使いに飽きずに話しかけてくるなんてほんと人だけはいいんだよ。こいつが誰かを傷つけるなんてありえねぇ。んで、あんたは、そんな京をここまで傷つけたわけだ？なんで？こいつ何もしてねぇよな？男だからって？はぁ？馬鹿だよな、あんたそんな性別以前の問題で、人として最低なことしてる。俺が言うのもなんだけど、けれどお前、自分がやるのは許されるとでも？男に酷いことされたから？ふざけんなよな、あんたは低俗であり愚劣で、人間として恥ずべき醜態を晒してる女だ」

「っ…！！」

相変わらずの空言（ペテン）。ぐらり、と女性の感情の昂りに、一瞬だけ鬼の姿が歪み、それから肥大する。その大きな腕を振りかぶり、強く対戯に叩きつけようとする、がすんでのところでかわし、その手に強く鉄パイプを打ち込んだ。

少しだけ鬼が傾くが、あまり効いたとは思えない。

――言霊。

ふと、それが頭を過ぎる。使えるかもしれない、が、使いたくはなかった。
もし、使ってしまえば、もう、何一つ戻れない気がした。常にある日々も、ありふれたものも全て手の届かない遠くへいってしまうような。
けれど、鉄パイプだけで勝てるとも思えない。ここに来る途中の空き地で捨てられていたものを一本取ってきたが、あいてはなにしろ人外だ。

「どうすっか…」

そう零してから、ふと女性の様子がおかしいことに気がついた。瞳孔が大きく開き、ぶつぶつと何かをしきりに呟いている。
なんだ、と対戯は耳を澄ました。

「殺す殺ス殺す殺ス殺す殺ス殺す殺ス…」

聞かなきゃ良かった。

「やるしか、ねーのかな…」

このままじゃ京共々この殺気に満ちた女性に、鬼に殺されることは確かだ。
かなり危機的状況なのに、どうしてこんなにも落ち着いていられるのか、自分でも不思議でならない。
もう、慣れてしまったんだろうか。日常ではないそれに。

「…あーもう！！やればいいんだろ俺が！！この俺が！！それしか

ねーんだろ！！」

半ば切れたように叫び、それからきっ、鬼を睨むように見た。
もういい。もうしょうがない。もう、やるしかない。
それしか、『勝てる』方法は、ない。
やるしかないのだ。

「……『動くな』ぁ！！」

一瞬だけびくり、と鬼の動きが止まる。
けれどそれは一瞬だけで、すぐにこちらへ攻撃をしようと腕を振りかぶる。
対戯が逃げるのを邪魔するように女性がこちらへ突っ込んできた。

「『邪魔（ふきとべ）すんな』！！」

がしゃん、とどこかでガラスの割れるような音が内側で響いた。
女性は大きな音を立てて少し離れた地面へと言葉の発したとおりに吹き飛ばされ、叩きつけられた。
邪魔をするな。そう吐いた。けれどその本当の意思に従い、言霊は遣われる。

「ちくしょう！！成功しやがって！」

しかもやはり捻くれている自分の言葉。発したとおりではなく、結局のところ本心が曝け出される。いつかすごい失態をおかしそうな気がして、ぶるりと体が震えた。
その少し気が緩み隙が出来たとき、突然脇腹に酷い衝撃が走った。

「いぐっ……！！」

鬼に殴りつけられ、その勢いのままに空中に吹っ飛ぶ。なんとか無我夢中で体制を整え、そのまま落下することは避けた。

けれど熱く痺れるような痛みが全身これでもかというほど駆け巡る。

呻き声を唇を噛むことで堪え、鬼の方を向く。

どうやらもう本気の攻撃態勢に入ったようで、ぎらついていた目をさらに鋭くして、こちらを見ている。異形の足を跳ね上げ、対戯の方へ向かって、飛んだ。

「ちっ……！！」

その着地地点にいた対戯は痛む体を引きずって避ける。どごん、と大きく低い音をたてながら地面が揺れた。もしあのままあそこにいたら、と一瞬考え、すぐに打ち消す。想像するのも嫌だ。

「あがっ……！？」

着地してからもすぐにその巨大な腕で殴ってきて、腹に思いっきり捻りこまれる。口から唾液が飛び出て、その中に赤いものも見えた。

口の中に満遍なく血の味が広がり、気持ち悪い。

酷い激痛に、息をするのも辛い。もしかしてこれは、体の骨がどこか折れているんじゃないだろうか、と思う。

体が地面に叩きつけられ、ずざざっと音をたてて肌が擦られる。

痛い。

痛い

痛い。

「ぐ、あ、」

口から呻き声が漏れる。目の前がちかちかして、頭がぐるぐる回る。落ち着け。痛みに支配されてるだけじゃあ、死ぬ。おそらく、確実に。

俺は誰だ。ペテン使いが泣き言をいうものか。負けない。負けてはならない。

痛くない。

こんなの平気だ。

「っく、」

鬼が両手を握って、こちらへ振り下ろしてきた。それを寸でのところで避けて、いつの間にか手元から離れ地面に落ちていた鉄パイプが目に映る。

きしむ体に鞭打って、その場所に駆け寄った。それを手に持ち、すぐに鬼のほうへ振り返る。

また殴るようなポーズの鬼のほうに、鉄パイプの先端を向け、もう片方を地面につけ、それを抱え込むようにして固定した。

タイミングを合わせろ、とバクバクと耳の奥で鳴る心臓の音に気をとられつつも念じるように口の中で呟く。

鬼ががっ、と地面を蹴って、すごいスピードで対戯の目の前に来る。いまだ。

「『伸びろ』！！」

ぐさり、と。何かが潰れるような音をあげながら、その身に鉄パイプが突き刺さる。

さながら如意棒のように鉄パイプが伸びたことによって鬼の腹に穴が開いた。

鬼は酷く汚い、言葉にならない声をあげながら口から緑がかった青い色の液体を出した。鼻につんとつく嫌な臭いがするそれは対戯に頭からかかる。

「気持ち悪いん、だよ！！！」

鉄パイプを抜き、鬼から出る体液を浴びながら、対戯は飛び上がる。その鬼の腹からも血に似た、けれどおかしな色の液体が流れ出ていた。

汚い、と思う。これが、人間の感情の末路なのだろうか。

「…何が男、だよ。結局男でも女でも、おんなじくらいの心を持ってるんだよ…。それを、ただの性別の違いのせいにしやがって」

ちり、と熱い何かが頭を過ぎった。考えれば考えるほど腹立たしくなる。

「殴られるのが嫌なら抵抗すればいいじゃないか。抵抗するのが怖いなら助けを求めればいいじゃないか。そんなことさえ弱い人間はできないんだ。それを、そんな自分の弱さを…他人のせいにしやがって！！！」

鉄パイプを握り締め、鬼の脳天に叩き落した。ごり、と低い音がした。

『伸びろ』。そうまた、口が動く。

「勝手な言い訳で出来たお前の感情を…押し付けやがんじゃねええええぇ！！！！！！！！！！！」

人間は弱い。知っている。だから何かのせいにする。
そうしないと、自分の中に痛みが出来てしまうから。
憎しみ、嫉妬、罪悪感。マイナスな感情は、その心を蝕み、痛みになる。
それを見てみぬフリをして、自分の心を保っている。
それが悪いことだなんて、自分には言えない。
これが見知らぬ他人だから、ここまで言えたのかもしれない。
けれど、でも、間違ってはいない。正しいこととはいえないのかもしれない、けれど、間違ってはいない。
だって一番おかしいのは自分の感情で人を傷つける人間なんだ。
伸びた鉄パイプは、その鬼の頭から一直線に体を貫く。

「そんな腐った感情（こころ）なんか、『消え去れ』ええぇ！！！！」

――感情の箍もりすぎた言葉は鬼と成り、その言葉のままに本能にしたがう。
どろどろとした感情の為れの果て。
人が生み出した、『鬼』

対戯が鉄パイプで貫いた鬼は、『消え去れ』のままに、その体が細かい粒子化して消えていく。紫がかった黒色が、辺りに立ち込めた。
対戯に被せられた体液も同様に細かい粒子の粒となる。ある意味幻想的な光景だ。
それらは空に向かいながら、シャボン玉のように消えていく。

「…心が死んでいくのか」

がくり、と力尽きたように片膝を地面につけながら、言葉を零す。
その目は焦点を定まらずも、確かにその消えていく粒子を映していた。
そのぶれる視界の端で、ぼたり、と倒れる何かに気づいた。
あの女性だった。

「馬鹿なもんだよ」

その女性をで見た。
それは怒りや憎しみの顔ではなく、呆れや困ったような表情だった。
ちっ、と舌打ちをしながら、呟く。

「ったく…もう、疲れ…た」

先ほどから、息を吸うたびに、少しでも体を動かすたびに、体が悲鳴を上げるように痛んだ。
意識が本格的に朦朧としてくる。
ぐらり、と頭の奥が揺れた。気持ち悪さが一気に押し寄せ、眩暈がした。もう、意識を保っているのも辛い。
ぼたり、と対戯は倒れた。土の匂いが鼻につきながら、そのまま暗転し意識は深い闇の中に消えた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「――君が端渡代夜くんですか？」
え、と代夜が振り向くと窓の淵に腰掛けている、黒髪で驚くほど顔の整った少年がいた。
「…ここ、八階なはずですけど」
「知っています」
「…誰ですか、人呼びますよ」
「怪しいもんじゃないんですけど」
「僕には十分怪しいようにしか見えない」
「まぁ当たり前ですよね」
「…誰、ですか」
何かやばい、と自分の中の警報が鳴り響いている。それはただの勘に近いけれど、自分の場合、悪い勘は良く当たった。
少年はにこにこと笑ったままで、表情を崩す気配はない。それがさらに不気味さを漂わせた。
「…君の『体質』のことでなんですけれど」
「……っ！？」
思わず息を呑む。なにを、なんで、と冷たいものが背筋を過ぎった。このことは人に知られてないはずなのに、と内心焦る。
それを見透かしたように、少年は笑みを深くした。
「実は、僕たちに協力してほしいんですよ、ねぇ」
「…は、なにを…、」
「それはこちらに来ていただかないと」
「なんだよそれ、僕『たち』って…、もしかしてなにかの宗教ごと

？悪いけどそんなの興味な…」
「君の親友は、君に隠し事していますよね」
「っ…！？」
なんでそれを、と言いたげに代夜は少年を見つめた。少年の瞳がゆらりと細まる。
「多分遠くに行ってしまいますよ、彼。あなたとは違う道へ」
「…なにそれ、そんなの僕は…」
「信じません、か？嘘か本当かなんて、あなたにはわかるはずでしょう」
「…っ」
ぐるぐる、と得体の知れない恐怖が押し寄せてくる。
少年はその代夜の様子を見て、ふぅ、と息を吐くと、近くにあったメモ帳を取り、一枚千切った。
そこにペンで、さらさらと数字を書き込んでいく。
「一応僕の連絡先です。決まったらどうぞ。僕たちは歓迎しますので」
「……」
そう少年は言って、また窓から飛び降りた。え、と驚きながら窓の下を覗き込むが、そこにはあの少年の姿はなかった。
さっき代夜が言っていたように、ここは八階だ。
もう、なにがなんだか、わからなかった。
「…ふざけんなよ……」
酷く、泣きたい気分だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　底知れぬ当主

「馬鹿が」

目が覚めてすぐに言われた言葉がそれだった。
あっるぇー、と果てしなくデジャヴを感じつつも、現実逃避しかけた頭を立て直す。
久しく忘れていた俺流ペテン術、『現実を受け止めろ』。…あう。

「なんていうか愚かだ。阿呆だ。馬鹿だ」
「ちょっと待て馬鹿って二回言ったな聞き捨てならねぇ」
「そんなこと言ってる場合か」

凄まじく不機嫌でいらっしゃるのは、白樺禊。先ほどまで対戯の訓練をしていた男だった。
麻呂眉を歪ませて全身で怒りを表現している。かなりご立腹のようだ。
もともとあまり好かれていない、むしろ嫌われている上にさっき対戯は逃げた。そりゃあ怒りたくもなるだろう。

「言い残すことはあるか」
「え、俺死亡フラグたってる？これ謝った方が身のため？」
「なにごちゃごちゃ言っている。逃げた上に僕に迷惑をかけた。まず最初に言うことがあるだろう」

迷惑？とここで初めて対戯は起き上がり周りを見た。そりゃあ目が覚めたときに大体わかっていたが、このいわゆる和風そのものの家

は、万葉家に間違いない、だろう。
あれか、逃げた俺を探しに出て、倒れている俺を見つけたっていうとこか。
こういうときなんて言うんだっけ…。
「えー…と、…ありがとう…？」
そう恐る恐る言えば少しだけ目を見開いてから、なんで疑問系なんだ、と怒られた。なんだよ、代夜ややどりを参考にしたっていうのに。
「まずは最初に謝るとかしたらどうだ。ほら、地面に額でも擦りつけながら詫びろ。全身全霊こめて僕に土下座でもしたら考えなくもないこともない」
「なんだよそれ許すのか許さないのかはっきりしろよ」
「なんだその口の利き方は！大体なんなんだ。訓練に逃げるわ、探しに来たら鬼の気配を感じるわ、血だらけで倒れているわ、ここまで運ばなきゃならないわ、散々だ。今日は厄日か？不愉快ならん」
「あんまり怒るなよ…、まぁ少しは悪かったとは思ってるよ。…ところで京は？」
「京？…あぁあの軽そうな男か」
「軽そうってなんだよ」
「大丈夫だ、怪我も治して違う部屋に寝かせている」
「…怪我？」
そういえば、と対戯は自分の体を見る。服の下には包帯が巻かれていて、微かにじくりと痛んでいたが、もうほとんどあのときの凄まじい痛みは湧き上がらない。
…言霊か。ご都合主義め、と小さく小声で呟いた。

「…ほぉ？自分より他人の心配か？案外そこまで非常になりきれないのか？ペテン使い」
「おまえなんでその渾名を…、あぁもういいや、面倒くさくなってきた」

追求してもきっともう無駄だ。説明されてももうどうしようもない。なにしろあの祝のことだ。少し話してからでもすぐわかった。外堀から埋められていっている。なにこれ意味わからん。
禊は相変わらず不機嫌そうだ。完全に嫌われてるな、とぼんやり思う。

「ところで鬼の気配があったが…、鬼はどうした？」
「んあ？ぶっ倒してきたけど？」
「……は？」
「いやだからぶっ倒してきたって…」
「待て待て待て、なんだその『たい焼き買ってきた』みたいなノリは。いや、ちょっと待て、倒した、だと？お前が？嘘だろ？」
「え、なんかまずかったのか？ってかこんなことで嘘つかねぇよ」
「…素面か？」
「酔ってねぇよ」

眉間の深い皺をさらに深くさせて、眼光強く睨むように対戯を見る禊。そんなに見つめられると恥ずかしいじゃねぇか、と軽口を叩くが禊はそれを無視して黙ったままだ。
あれ、これ俺やらかしちゃったパターン？ここは流しといた方が良かったのか？

「あらあらすごい話を聞いたわぁ」
「っていつの間にいんだあんたは！！」

気づかぬうちに対戯の後ろでニコニコと笑っている祝。あれ、フラグが立ち始めてね…？と絶望の暗雲を除かせていく室内。
禊の深く長いため息が嫌に大きく耳に聞こえた。

「まさか素人同然のお前が倒すとは…、通りでそんな死にかけだったわけだ…」
「悪かったな」
「でもぉ、めでたいことじゃないー。これで言霊遣いがまた増えるんだものー」
「ちょっと待て、なんでそうなるんですか」
「あら？違うのかしらー？」
「違いますって」
「違うのかしらー？」
「いや、だから」
「違うのかしらー？」
「あの…」
「違うのかしらー？」
「……」
「違うのかしらー？」
「すいませんそろそろ心折れそうなんでやめてやってください」

あまりに笑顔で追い込んでくるのでさすがに不憫におもったらしい禊が助け舟を出してきた。
この人には勝てない、何故か本能的に感じた。関わってはいけない系の人種だ。
関わってはいけないはずなのに目の前で微笑んでいやがって、ちくしょう。

「人員不足なのよねー、対戯くんが来てくれると嬉しいのだけれど」
「いや、俺命に関わる系は基本的にＮＧなんで」

「何を今更」
「禊黙れ。いや、ですから俺、そういうのは…」
「建前はいいわ」

にこり、とやはり底の見えない笑みを深くさせる祝。瞬間的に背筋がぞわり、と逆立つ。
見透かしている、この人は。畏怖してしまう体を必死に押さえつけた。

「私が聞きたいのは貴方の本音よ？嘘吐きくん」
「……」
「貴方は淡白に見えて、実は執着が大きい子。いらないものはいらないと言えるし、欲しいものも我慢できるけれど、一番大事にしなければいけないものは、どんなことをしてでも守り通す。貴方はそれはそれは大事にしているのね。…自分のことを無条件に信じてくれる人を」
「…違う」
「いいえ、そうよ。貴方は自分にまで嘘をついているのよ。だって、普通の人が、ましてや１５歳の高校生がそうまでして命懸けると思う？命を懸けてまで守れるような人は、きっと何かの思いをそれぞれ胸に抱いている。正義感でもなんでもいいわ。でも、確かに何かがあるのよ」

優しげな口調で、けれどどこか諭すような口調で。けれど対戯にはそれを恐怖にしか感じなかった。
見透かされている、そのこと事態がどうしようもなく、まるで突き落とされたような絶望感を伴い、対戯を攻め立てる。

「さて、貴方は何を考えるの？何を思い、何を否定し、嫌悪するの？嘘をつくのは許さないわ。だってこれは、貴方も望むことよ。私

は本当に言霊遣いになりたくないというのなら、それを強制は出来ない。けれど建前ばかりを振りかざし、自分の本音はひた隠しにする、というのがどうしても納得できないの」
「……あんたに、俺がわかるっていうんですか」
「じゃあ聞くのだけれど間違ってるの？」
「……」
「言ったわ。強制するつもりはないって。暴くつもりも、追い込むつもりはないの。ただ、『聞きたいだけ』。あなたの並べ立てた言葉の裏の言葉を私は知りたいだけなの。貴方は悪い子じゃあない。いいえ、むしろ捻くれたようで、でも誰よりも真っ直ぐな何かを持っている」
「……」
「無理にとは言わないわ。けれど、このままでいいの？」
「……俺は、」

強制ではない。暴くわけではない。追い込むわけではない。なんだそれ。結局のところ追求してるじゃねぇか。
多分この人には本当のことを言わないと納得してもらえない、そんな気がした。情けない。
全てが、情けない。

「…面倒くさいんだよ」

低い声で呟く。禊は軽蔑した目でこちらを見たが、祝は特に表情は変わらない。
そう言うと見越していたのだろうか。

「何もかも面倒くさい。信用されることも、信頼されることも。俺はそんな重いものいらないのに。なのに俺を嘘吐きだって知ってるくせに、なのになんで俺に感謝すんだよ」

「ええ」
「なんで面倒くさいもののはずなのに、俺はそれを捨てられないんだよ、意味わかんねぇ。本当に、俺は俺がわかんねぇ。命まで懸けて守る意味があったのかも、…わかんねぇ」
「…ええ」
「……でも、どうしてもほっとけなかったんだ」

親友が傷つけられて頭の中が真っ白になった。
俺に構ってくる馬鹿が危険だと知って、気づいたら走っていた。
自分らしくないって、何度も考えたのに。こんなの俺のキャラじゃないって、何度も、そう思ったのに。

「俺は予想以上に俺のことがわからない。何度考えても、俺らしいことじゃないと思っても、でも、なんでだか、体が動くんだ。面倒くさいのは嫌いなはずなのに、自分の世界が壊れるのがどうしようもなく、怖がってるんだよ」
「そうなの」
「…言霊遣いになれとか言われたとき、正直ふざけんなって思った、けれど、少しだけ、期待していた自分がいたんだ。言霊っていう存在を知ることになったのは自分の本意じゃない。…でも、俺の言葉が、何かを救えたんだって思うと、なんとなく、悪い気はしなかった」

対戯はいつの間にか俯いていた自分に気づいて、顔を上げた。
「世界はちっとも優しくないって、思ったけれど、けれど感謝されて、それで、なんとなく、いや、本当に、本当に俺は…『嬉しかった』んだ」
本音。

言葉に出したとき、一瞬頭の中がぐちゃぐちゃになった。
考えるだけでも、体が拒否していた。どうしようもなく、感謝されるのが怖かった。
自分はそんな人間じゃない。感謝されるべき人間じゃない。
卑怯な嘘吐きだ。そんなはずなのに、命懸けて。いい偽善者だ。

「貴方はどうして言葉を怖がるのかしらぁ、私には、言葉は言葉のままに受け止めればいいだけの話なのに。たいした天邪鬼ねぇ」
「…天邪鬼はやめてください」
「あら？ならツンデレのほうがいいかしら」
「もっとやめてください」

…なんだか前も同じやりとりをした気がする。
少し霧散した沈鬱な空気を感じ取ったのか、禊が口を出してきた。

「結局のところどうなんだお前は…、言霊遣いになる気はあるのか？」
「…わかんねぇ」
「はぁ？」
「わかんねぇんだよ、どうすればいいのか」

むすり、とした顔で対戯は答えた。

「わからない、など…、…じゃあお前はどうしたいんだ？」
「わかってたらこんなにうじうじしてねぇよ」
「…いやに不機嫌だな」
「お前が言うな」

口の中が苦くてたまらない。ちっと舌打ちをすればすかさず禊に注意をくらった。真面目すぎだろ。

毎回思うが、本音と言うのはいつだって苦い。口の中にしつこく残るような、嫌な味だ。
だから、言うのはいやなんだ。

「うひゃあああああっ！！！！」

「え、」
「は？」
「あら」

いきなり響き渡った甲高い声。これは…やどり？
え、なに、これ、この展開。慌てて対戯は祝の方を見ると、いつもの笑顔が、少し困ったようになっていた。
あっるぇー。

「困ったわぁ」
「え、奥様、これは…」
「そういえば玉葉家（ぎょくよう）にねぇ、宣戦布告されていたの。戦いましょーって」
「そんな和やかな宣戦布告があるわけないじゃないですか！！え、ちょっと待ってください、聞いてないんですけど…」
「だって言ってないもの」
「あああああああもうこの人はぁ！！！！」
「母上！！なんかよくわからない人がいっぱいきたあああああああ対戯起きたのか！！」
「…なにもうこのカオス…」
展開が速すぎてついていけない。っていうかついていきたくない。

けどまあしたくもない整理してみると、なんか、戦いが、始まるっぽい…。
いや待て、ちょっと待て。どういうことだこれは。
一応全員の顔を見てみるが、どうにも冗談な話でもないらしい。祝の顔はあまり変わっていないのだが。
…確実に面倒ごとに巻き込まれる予感がした。…うん、帰ろう。
こそこそとその場から退室しようとする。

「そ、それじゃ、俺はこれで…」
「対戯！！」

がしっとやどりにう腕を掴まれた。あれ、嫌な予感。恐る恐る振り向けばうるうると子犬のような視線をもろに浴びる。
なにこの期待に満ちた目。たらー、と嫌な汗が流れた。

「対戯、助けてくれ…」
「ほらやっぱりな！！」

ちくしょうこう来ると思ってたよこうなると思ってたよ！！
なぜかやどりにとって対戯とはヒーロー的な立ち位置にあるらしい。
なのでその性格には似合わないくらいに子供好きな対戯にとって、それは何よりも痛い視線だった。

「…はぁ、おい禊、玉葉家ってなんだ…？」
「あぁ？…万葉家と同じ言霊遣いの名家だ。最初は同じ家だったと聞いたが、随分昔に仲違いしたらしく、二つに分裂し、それで今に至る。もうほぼ別々の血だ」
「つまり長い兄弟喧嘩みたいなもんか？」
「そこに血生臭さが加わるがな」
「…えぇー…」

「…それで奥様、いったいどうしてこのようなことに…」
「えー、ええとね、確か、万葉家の権力に関わる事柄の一切をちょーだいってねだられちゃってねぇ、それで断り続けてきたらこうなっちゃったの」
「はぁ！？そんなの聞いてませんよ！？」
「言ってないもの」
「…この人の部下やめようかな…」

不憫だ。対戯が心底哀れむような目で見れば足を踏まれた。痛ぇ。

「…どうしてここまで憎しみあうようになったのかはわからん。けれど事実、こういうことになっている…。僕にはどうして昔のことを引きずるのかよくわからんがな」
「憎しみあってる？これが？」

対戯が祝を指差せば、禊はこれみよがしにはぁとため息をついた。それは対戯に向けてなのか祝に向けてなのかわからない。

「奥様は気にしなさすぎなんだ…、『旦那様』がもしここにいれば、全面対決になりかねん勢いだったのだが…」
「ん…旦那様やらなんやらはお前といい祝さんといい、万葉家の奴らは別にそこまで玉葉家？のこと嫌いじゃないんじゃ…」

「玉葉家の狐共が来たぞおおお――！！」
「あんな奴ら、返り討ちにしてやれえええ――！！！」

「……」
「あんな感じだ」
「…すごくよくわかった」
「僕は行ってくる。あのままじゃ双方とも無事じゃすまないだろう。

ただでさえ好戦的な連中が多いというのに…まったく、なんなんだ、あいつらは…」

禊が頭を抱えながら部屋を出て行った。馬の尻尾のように括られた髪がゆらゆらと揺らしながら駆けていく。

「まったく、言霊遣いってのはなんでこんなに面倒くせぇのか…鬼が出たと思ったら今度は家同士の抗争かよ…、意味わかんねぇ…」

「大変なんだね…」

「あぁ大変だよ、まったく、どいつもこいつも自分勝手だ…」

「それを対戯が言うかな？」

「うっせぇよ、もとはといえばお前が変な女に襲われるからだ…ろ…？」

…ん？あれ？

…今、自分は誰と話している？

ぎぎぎ、と油がさされていない錆びたロボットのように振り向けば、そこには京の姿が。

「ちぇすとおおお――！！」

「ふぎゃんっ！？」

殴った。とりあえず殴った。対戯は一発で地に伏せた京を見やり、ふぅ、と一仕事終えたように額の汗を拭う。

これでなんとかなるだろ、と呟けば半目でこちらを見るやどりの姿が。

「…いい奴だったよ」

「あのさぁ勝手に殺さないでくれるかな！？」

数秒で起き上がった京。けれどその瞬間対戯に襟首を掴まれて引き寄せられる。

「忘れろ」
「はい？」
「十秒で全部忘れろ」
「あ、あの、なんか俺カツアゲされている気分なんですけど、」
「はいいーち、」
「数えるな！いや、ちょっといきなり忘れろってどういうことですか？俺別にそんな悪いこと見たわけじゃ…」
「…いつ起きてた？」
「え、最初から。っていうか俺対戯より先に目、覚めたし」
「よし歯を食いしばれ」
「あっれぇー！？なんでそうなるの！？」

失敗した。完全に予定外で予想外でああああ、と座り込む対戯。それを心配そうに駆け寄る京。あ、やべ、殴りてぇ、とかなり欲望のままに思う。

「あのな、対戯、さっき葉桜がこいつに全部喋ってたぞ？」
「まじでか」
「え、聞いちゃまずいことだった…？」

まずいのなんの…、内心冷や汗を流しながら考える。
言霊遣いとしてその能力が発言してしまうのは、言霊という概念を理解してしまえば、の話。
つまり、理解してしまうことによって、京にももし言霊遣いとしての力が現れてしまったら？

「あー、でも対戯、一応対戯の例もあるから葉桜に試してもらった

けど、特に言霊遣いとしての、意味を力として発する能力はないらしい。だから別に普通の一般人と変わらんと思うのじゃ」

「なんだ、良かった…」

思わずぽろり、と安心の言葉を漏らしてはっとする。

ばっと京の顔を見れば、きょとんとした顔の後にすぐさまぱあぁっと顔を輝かせていく。

「対戯ぃっ！！心配してくれたんだぁ！！」

「あああああうるさいうるさい！！黙れ！！違うからな！絶対違うからな！！」

「いいや、今の声俺の心の音楽プレーヤーに記録しました！！いつだって再生可能です！！」

「なにわけわかんねぇこと言ってんだ馬鹿！！」

照れのせいか顔を真っ赤にしながら京を殴りつける対戯。それをもろにくらいながらもすごく嬉しそうな表情で京は笑う。そしてそれを呆れ顔で見つめるやどり。

「…そんな和やかにしてる場合じゃないのだがなぁ…」

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

「……」

対戯の携帯に鳴らしても、どうにも電源が切られているようで、女

性の声と電子音が流れるだけだった。
ぶちり、とこちらも携帯の電源を落とし、代夜は病院の壁にもたれかかった。
病院の中ではさすがに電話をすることが出来ないので、こうして外に出てきたのだが、それも無駄な労力に終わったようだった。

「…空しいなぁ…」

ぽっかりと胸の奥に穴が開いたようなどうしようもない喪失感が沸き起こった。
このまま消えてしまいたい、という衝動がふわりとこみ上げる。
この感覚は覚えがあった。思い出したくない昔に。

「…嫌だ、なぁ…」

膝を抱えてずるずると座り込み、ぼそりと呟いた。

「置いていかれたく、ないなぁ…」

不安定に、ぐらぐらと頭の中が揺れる。どうしようもない途方感。
手を伸ばしても、誰も掴んでくれない。
誰も、掴んでくれない。
置いていかれたくなかった。
待っていてほしかった。
もう、自分の足は、酷く疲れたのに。

「なんで、僕は、だめなのかな…」

誰かを信じることは、怖かった。
どこかで、それそのものが、壊れていきそうで。

疲れたはずだったのに。何もかも。
わからない。頭が痛い。
どうにかなりそうだ。
不安で不安で仕方がない。このまま壊れてしまいそうで。
自分にはなにもないのだ。

「…怖い、よ…」

少年は、震える声で呟く。彼の元へは、届くことない、言葉を。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

ドガッ、と鈍い音が響いた瞬間、視線をそちらの方へ向けば、踏み倒された障子に、狐のお面をつけた和服姿の人々がずらりと。
え、なにこの変質者、と思考が飛ぶが、それどころじゃないと慌てて立ち上がる。

「あの、俺らここの関係者じゃなく一般人なので、暴力的なことはちょっと…」
「対戯、俺らがここにいる時点で関係者じゃないとかは通じないと思うよ」

あくまで逃げの姿勢を崩さない対戯にのほほん顔で注意する京。祝はにこにこと笑みを絶やさず、やどりだけが慌てた顔で対戯にしがみついていた。
そんな四人の様子を見て、狐面の男は困ったように頭をかく。

「こまちゃーん、なんかよくわからんけど、面白い人ら見つけたでー」

…ん？関西弁？

なんだかやけに軽い声に対戯は顔を顰める。

「はぁ？社（やしろ）、そんなことしてる暇があったらここの当主でも見つけろ」

社と呼ばれた関西弁の男が外へ向かって叫び、その返事に女性の声が返ってくる。

ええー、と困ったように腕を組み、こちらへ向き直る社。

「んー…、あの、あんさんもしやここの当主ですか？」

「そうですよー」

「こまちゃーん、こん人当主さまやってー！！」

「はぁ！？」

「あんた何普通に喋ってんだ！！」

だだだっと走る音が聞こえたかと思えば、狐面を被った長い黒髪を後ろの真ん中ごろで平たい布で縛った少女が駆け込んできた。

それからじっと祝を見てから、ぼしんっと社の頭をはたいた。

「いったぁ！！こまちゃんなにすんのぉ！」

「なにすんのぉ、じゃない！本人に聞く奴があるかこのボケナス」

「いやだっておったんやもん」

「お前は毎回そう考えなしに行動して…、もし取り返しのつかないことになったらどうするつもりだ？」

「そんときはそんときやってー…こまちゃんは毎回生真面目なんや

からさ、たまには気楽にいくのもいいんちゃいますか？」
「断る」
どことなく少女の方がなんとなく禊に被る。真面目さというか…。いや、この状況で冷静に説教しているところを見るとこちらはかなりマイペースのようだった。
「あなたたち仲良いのねー」
「え、やっぱりそう見え」
「仲良くはありません」
「…きっぱり言うんやなぁ…」
がっくり肩を落として残念がる社を見てると、どうも敵には見えない。どうにも進まない話を見てると、これは自分が何か言わないのではいけないのか、と妙な義務感が湧いてきた。
「…あのー、用件は」
「…用件？そういえばなんやっけ？」
えー。思わず口をあけてぽかんとした顔を見せればばしんと社が頭の後ろを少女に叩かれていた。何の漫才だよこれ。
「申し送れました。私たちは玉葉家の者です。多分私たちがここに来た理由もわかっているとは思いますが…」
「わからないわー」
「え、」
「え？」
いやさっき禊が言ってただろ、と口に出そうとしたが、なんとなく、祝から変に重たいプレッシャーが放出されている気がした。

なんというか、いつもと違う、笑顔なのに、ただ息苦しく感じるような。

「わからない、とは…私たちは何度も貴女に警告を出したはずですが」

「警告？知らないわぁ」

「知らないってんなあほな…」

「あの程度で、警告とでも？」

ぴしり、と空気が固まる。

「…どういうつもりですか？万葉家の当主」

「どういうつもりといわれてもねぇ、困るわぁ」

「…、そういう態度で来られるなら、こちらとしても、考えが…」

「あのねぇ、貴女、わかってる？」

祝は笑みを崩す気配はない。それどころか、さらに深くする一方だ。薄気味悪いようなその顔は、どうしようもないプレッシャーを少女に与える。

「私を、誰だと、思ってるの？」

「……っ！？」

少女の体が強張る。祝はにこにこと笑っていたその瞳を薄く開けた。ぞくり、と対戯にまで、冷たい何かが這い上がる。

この人には勝てない。そう最初に感じた対戯の直感のままに、それはそこにあった。

「…こまちゃん、俺らじゃこん人に勝てへんことわかるやろー？当主や当主。それ相応の実力があって当然やん？無理することはあら

へん。所詮俺らは伝令なんやから」
「あら？でも貴方は平気そうな顔だけれど」
「冗談ゆうたらあきません。これでも俺めっちゃ怖がってます。万葉家の当主さんですよ？萎縮してとーぜん。まぁ俺らは今当主さんと戦うつもりはないゆうことで、乱暴なことはせんといてくださいね？」

そういいながらかやり、と社はお面を外す。そこには明るい茶色の髪と、眉を八の字に下げて困ったように笑う顔があった。
どことなく軽そうな雰囲気だが、なんとなく読めない、と対戯は思う。

「…社、なにして、」
「最低限の礼儀やろ？ほらほら、こまちゃんも」
「……」

同じように少女も仮面を外す。眼鏡をかけた少々ツリ眼の顔だった。
美少女と呼ばれるその顔が、憎々しげに祝を睨んでいる。

「俺は玉葉家門下橘社（たちばなしろ）と申します」
「…同じく欅小町（けやきこまち）」
「あらあら、そのお二人がなんの御用で？」

社は一歩出て、笑ってその内容を口にする。

「我が玉葉家は、万葉家に対し、長年の戦いの終結を終えるために、宣戦布告をここに宣言します」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　底知れぬ当主　（後書き）

祝さんは最強です。
やっぱり京くん不憫でもあります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　風の音吹く

「なんだか疲れた顔してるね、対戯」
「…いろいろあったんだよ」
そう、代夜の寝るベッドの前の椅子に座りながら、ふてぶてしく対戯が零した。

あれから、いきなりの宣戦布告をしてきた玉葉家。祝は表情一つ変えず、そう、とだけ呟いた。
細まった瞳には、静寂に満ちた湖面しか浮かばず、とくに動揺も見せず、緩やかにその提案を受け入れた。
玉葉家の使いらしいものたち二人は些か拍子抜けしたような態度を見せたが、警戒の色は何一つ緩めず、真面目な少女、小町は眉間に皺を寄せた表情で。関西弁の男、社は祝と同じようににこやかに笑って一礼し、この場を去った。
二人がいなくなった後、禊が駆け込んできて、いきなり襲ってきた玉葉家の者たちはいきなりみんな帰っていった、と不思議そうな顔で言った。それから中の様子に気づき、どうしたんだ、と対戯に目だけで問うてくる。
言ったらあのパターンだよなー、とぼけっと思いつつ、先ほどの玉葉家の者たちの話を禊に聞かせる。そうすると面白いくらいに顔を真っ赤にし、祝にどういうことですかっ！！と怒鳴りかかった。
「…なんか俺忘れられてないかなぁ…」

誰かがそう呟いた気がしたが気にしないことにしつつ、禊を宥めてから万葉家を出た。
どうやら、なぜだか、まったくもって、さっぱりわからない、が、自分にも何かしらの手伝いをしろ、という祝からのお願いをされた。手伝いやお願い、などと名ばかりの、強制的な、命令的な、戦いに参加せよとのお達しだった。
断ろうとしたら、その代わりにどうしてだか京が人質にされることになった。え、俺？と本当に意味がわからず困ったようだったが、まぁいいか、で済ませる辺りあいつはある意味大物かもしれない。
ちなみに京は対戯のように一人暮らしのようだった。
別に京を人質にされても構わないのだが（実際あいつは楽しんでるようだし）、祝の命令に逆らうということ事態がさらにややこしい事態を生みそうで、すでに自分の中では決定事項だった。
…すでにいろいろと毒されてきているのかもしれない。

つまり、そんなこんなで。

「ここ最近俺のキャラがどうにもわからなくなってきた」
「イケメン顔で言うことじゃないと思うなぁ」
「え、俺イケメン顔だった？まじ？」
「対戯は天邪鬼だからねぇ」
「…いつもそれ言うなお前」
「対戯ってば真面目になるのちょっと嫌でしょ？」
「う、」
「それでいて、感謝されれば嬉しいくせにすぐ憎まれ口叩くし」
「…お前人の心読めるの？」
「当たってるんだね」

当たってるも何も前に祝に言わされた本音そのものだ。見破っていたというのか。対戯は本気で頭を抱えたくなる。
どうにもこの親友は祝と同じ臭いがする。相変わらず表情はにこにこと読めない。自分もわかりにくいと言われてきたけれど、代夜には負ける。

「ねぇ、対戯、最近対戯の方はどうなってるの？」
「ん、どうなってるって？」
「いや、変わったこととか起こってないかなって？」
「…どうして疑問系だよ」

変わってること…？言霊遣い的なことは変わってることといわれても、自分にとっては面倒くさいことだ。鬼のことは、変わっているというより…関わりたくないこと。だ。

「特にないけど」

嘘じゃあない。対戯にとってはそうだった。けれど、代夜は瞳を大きく見開いてから、考えるように、窓の外を眺めた。
なんなんだ？と本格的に対戯は疑問をこめた視線を代夜に送る。少しの間だけ、静かな室内に開け放たれた窓から入る風の音しかしなかった。

「…質問を、変えるね、対戯」

代夜が対戯に向き直る。

「……僕に、隠し事、してない？」

一瞬だけ、息を吸うのを忘れた。次のときに空気を吸った喉は、掠れた音を立てる。

「して、ない」

酷く、動揺してしまった。思わず口から出たのは、どうしようもなく真っ赤な『嘘』。

こんなあからさまに嘘だとわかる嘘をついてどうするんだ、と自分を殴りたくなる。

それから少し居心地悪そうに、対戯は代夜の顔を見た。それから、固まった。

「…たい、ぎ」

酷く絶望したような、手を振り払われた幼い子供のような、傷ついた顔をした、代夜。

どうしようもなく、その瞳は泣きそうに揺らぎ、責め立てるように対戯を見た。

裏切ったような感覚が対戯を満たす、けれど、代夜の傷跡のことを思い出すと、本当のことを言う気にはなれなかった。

「ねぇ、なんで、嘘をつくの？僕には言えないこと？」

普段だったら、聞かれたくないことだと気づき、代夜は話題を変えてくる、けれど今回は違った。

感情を前面に押し出し、ただ、怯えるような顔をしながら、矢継ぎ早に言葉を吐き出してくる。

「対戯、ねぇ、対戯、どうして、どうして、言えないの…？」

「……」

「僕、もう君がわからない、わからないよ」
「…代夜、」
「わからない、なにひとつだって、僕はわからないんだよ、対戯」
顔を真っ青にして、手を、小さく震わせて。
自分を抱きしめるように、両手を自分の腕に回した。
こんな姿、初めて見た、と対戯は言葉をなくす。自分自身も酷く動揺して、かけようと必死で考える言葉は声にならない。
「こう、頭の中がぐちゃぐちゃでわけわかんない…、僕は、どうすればいいんだよ、何があってたんだ、初めから、僕だけが、違ってた」
「おい、なんの話…」
「違うんだよ！僕だけが！！」
思わず声をかけると、代夜から怒鳴り声が響いた。対戯は目を見開く。代夜の怒鳴り声を聞いたのは初めてだった。初めて、と考え、ふと気づく。
自分はこの親友のなにを知っているんだろうか。
「僕だけが違って、僕だけが、おかしくて、僕だけが、一人ぼっちなんだよ、対戯…」
「おい、どういうことだよ、代夜」
対戯が問うても代夜は答えず、
「…どこにいるの？　僕は」
独り言のように、呟いた。

「…代夜、俺は…」
「…ごめん対戯、今日、ちょっと僕おかしいみたいだ。変なこといってごめん」
対戯の言葉を遮り、早口で喋る代夜。普段とかけ離れたその様子に、対戯は唇を噛む。
「ごめん、ちょっと、一人にしてくれる…？」
元気なさげに、無理矢理笑顔を作り、代夜が言った。けれどその声の中に、どうにも有無を言わせないような、そんな色を感じ、対戯は何も言えなくなる。
黙って対戯は病室から出ようとする。その瞬間、小さく、声がかけられた。
「もう、お見舞いに来なくていいから」
ドアが、閉まる。
深いため息を落とすと、対戯は思わずその場にしゃがみこんだ。
情けねぇ情けねぇ情けねぇ情けねぇ。
「…ちくしょう」
何がしたかったんだ自分は。親友を傷つけて、何がしたかった？
俺はペテン使いだろう。もっと違う言葉を出してもよかったじゃないか。
そんなことさえも出来なくて、それで、なにを守ると？
「…なにが言いたかったんだよ、あいつは…」

結局何が言いたいのかさっぱりわからなかった。長い付き合いだというのに、代夜のあの変化に、自分は酷く
狼狽しただけだった。
滑稽だ。愚かだ。
俺は、なにも出来ていない。

かさりと紙の音をならして、細めた瞳で代夜はそれを眺めた。
それがどうしようもなく、救いのように求めて、そこに並ぶ数字の列を指でなぞる。
もう、なんだって構わなかった。
もう、どうだって良かった。
消えることのない冷たい記憶の中で、どうしようもなく渇望したものが、そこにある気がした。
風が吹く。カーテンが揺れる。
代夜は、ここで小さく、大きな決断を一つ、した。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「…馴染んでるんだな…」
「んーなにが？」
「なんだよ？」
「…青葉なにちょっかいだしているんだ…」
「いいじゃねぇか、こいつおもしれーぞ？」
「いやー俺も人質になってよかったですよー。こんな綺麗な人もい

るしー」
「お、言うねぇ、今度何か奢ってやる」
「えーそれは男としてなんか辛いですよ？」
「…なに仲良くなっているんだ……」

にこやかに会話している京と青葉。その二人がテレビゲームなどをして遊んでいる姿を見て、はぁ、と呆れたようなため息をついた。

「そもそも人質というのは奥様が勝手に言ってることであって、大体の名目はお前の治療なはずなんだが…」
「あ、それはもう大丈夫だよ。額が切れていただけだし。用心に用心を重ねてあの綺麗な人がここにいていいって言っただけだからね」
「…ならさっさと帰ってほしいところだが…」
「えーいいじゃんかよー、こいつおもしれぇぜ？」
「お前に聞いていない！！そもそもお前はお前の準備があるだろうが…」

がくり、と床に膝をついてがっくりうなだれる禊。

「…おい、京、奥様がお呼びだ…」
「ん？祝さんが？わかったよ」
「おい待てよ、勝ち逃げかぁ？」
「青葉！！」

勘弁してくれ、と言いたげに禊は青葉を睨む。青葉はやれやれ、と首を振りながらどっこいせ、と立ち上がり、テレビの電源を切る。

「ったくめんどくせーなぁ、家同士の戦いとかよ、あたしには理解できねー。どーしてそこまで血生臭くなんのやら。死人が出ないことをとりあえず祈っとくぜ」

「死人って…」
「いいからお前も早く来い。ぐずぐずするな」
禊に引っ張られるようにして部屋を出る京。掴む力痛い痛い、と情けない声を禊は耳にしながら逆にさらに手に力をこめ、その声をいっそう強くさせた。
禊は万葉家に忠誠を誓うと共に、その血を大事にしたいと思っている。
それは実際の血統という意味ではなく、万葉家として、誇りを、決意を持っているものである。
あの青葉でさえも、万葉家に関してならば重い腰をあげるのだ。だからこそ、気に食わない。
この京も、…対戯も。

「…吹っ飛べばいいのに…」
「あれ？いまなんか悪意ある言葉が聞こえた気がしたんだけど気のせい？気のせいだよね？」

そうこうしているうちに祝がいる部屋へとつく。まず禊がそこに入り、目線だけで入れ、と京を促した。
京は特に抵抗もなく、すんなりと部屋の中に入る。そこには、にっこりと微笑む祝の姿が。
対戯の場合は、それにかなりの圧力を感じていたが、京は逆に微笑み返す。

「祝さん今日も綺麗ですね！」
「あらあら照れるわー」
「…こいつは…」

大物なのか空気が読めないのかわからない。一般人でも祝の出す雰

囲気に飲まれるというのに。
京を改めて見てみると、へらへらと笑っているだけで、特別な含みなどは微塵も感じられない。
空気が読めないだけだわこいつ、と禊は呆れかえる。
そう考えればある意味大物なのか…？と、つい眉間に皺を寄せていると、京に不思議そうな顔で見られたので
とりあえずむこうずねを蹴っておいた。
いたあっ！？としゃがみこむ京を尻目に、部屋の扉を閉めた。

「本当対戯くんとは違った意味で面白い子ねー、ねぇ禊」
「…僕にとってはイラつかせるものが一つ増えたとしか思えません」
「酷いっ！え、俺もしかして嫌われてる？」
「…今更気づいたのか…？」
「え、そんな意外そうな顔…？え、本気で？俺傷つくんだけど」
「…それで奥様、こいつになんの用事で？」
「無視！？」

ぎゃーぎゃーと煩い京を足蹴りにし、禊が祝に問いかける。祝はあらあらそうだったわね、と今思い出したかのように言葉を発す。おい、と突っ込みそうになるのを必死で堪えた。

「ただちょっと京くんと話してみたくてねぇ」
「俺と？」
「そう、あなたもなかなか『面白い』子だから」
「へー？ありがとうございます」

『面白い』。その意味をそれほど、深く考えておらず、あまりわかっていない京は、お礼の言葉を口にする。それを聞いて、祝は愉快そうに瞳を細めた。

「あなたは、対戯くんのことを強く信頼してるようね」
「ん、対戯を…？そりゃそうですよ。友達ですから」
祝の問いに、そう答える京。その答えに、祝は笑みを深くした。
「あの子が嘘吐きでも？」
「はい、関係ないです」
「へぇ…」
まるで値踏みするかのように、祝は視線を京の全身に向ける。
京の答えは濁り一つもなく純粋そのものだった。
「…まるで対戯くんに対して盲信（もうしん）しているかのようだわ」
京の顔が強張る。ぴくり、と禊の眉が動いた。
反対に祝は笑みを絶やさない。反応をただ待っているだけだった。
「あ…あの……」
「なに？」
「…『もうしん』って、なんですか？」
「……」
「……」
「…はぁ？」
「…あら」
さすがに予想外だったわぁ、と呆けた声が祝から漏れた。それは本心からの意外そうな言葉で、禊はそれに思わず反応する。
祝の『言葉』というのは、一番触れられたくない場所に捻りこむ言葉だ。人によっては凶器のような言葉。それを紡ぐことは、祝にとって天性の才能と言えるものだった。

肌でその人の内側を感じ取り、そして差し込む。
どうしてそんなことをするのか禊にもわからない、けれど、その裏に祝のなんらかの複雑な感情があるのはわかっていた。
…けれど、これはそれどころではない。まさしく『言葉の意味』そのものが、言葉のとおりにわかっていない。捻りこむ以前の問題だ。

「…ふふっ、ふふふ、やっぱり面白い子ね、あなた」
「？…えーと、ありがとうございます？」
「いいわ、ここは私も素直に質問するとしましょう。あなたはどうしてそこまで対戯くんを信じられるの？」
「へ、それは友達だからで…」
「その『友達になった理由』よ。純粋に興味があるわ。あそこまで信頼できているのだもの」
「え？……うーん…」

腕を組みながら、困った顔をする京。

「…内緒でいいですか？」
「あら？」
「俺にとって、すっごくすっごく大事な思い出なんですよ。綺麗な人にこういうのはすごく心苦しいんですが、でも、本当に大事なんです」

本心からすまなそうにする京に祝は母親のように慈愛に満ちた笑顔を向ける。その姿に禊は目を見開いた。
…完全に気に入られている。こいつ。
祝の雰囲気に少しも気づかなく、先ほどの素っ頓狂な答え。それはかなり意外すぎて、ある意味禊を感心させた。

「…それじゃあなにかしら…じゃあ、あなたが対戯くんの、『傍に

いたい』と思える理由…これはどうかしら」
「…傍にいたい」
ううむ、と考え込む仕草をする京。祝も急かすつもりもないようで、のんびりと答えを待っている。
「…『音』、ですかね」
「音？」
「俺、音楽好きなんですよ。ヘッドフォン、前の、鬼…？のことで壊れちゃったからちょっと今、物足りない状態なんですけど、俺、なんとなく人のイメージで音が聞こえるっていうか…」
「へぇ？面白いわねぇ」
「祝さんなら風鈴の音、禊は、刀を鞘から出す音、…みたいな」
「それで、対戯くんは何の音なの？」
そう聞くと、京は、少しだけ瞳を細めて、何かを思い出す仕草をした。その口元は優しげに微笑んでいて、暖かな、けれど少し寂しそうな雰囲気を漂わせる。
「…風の音、ですかね」
「風の音？」
「なんとなく、ですけど…対戯の傍は気持ちいいんです。だから、そこにいたくなる」
例え素直じゃない嘘吐きでもですけどね、と、今度は子供っぽい笑みを見せた。
「あ、あの…これじゃ、答えになりませんか…？」
誰もなにも言わないので、うってかわって不安げに表情を曇らせる

京に祝は首を振る。

「素敵な答えだと思うわ？　ね、禊？」

「え、僕に振るんですか？　……別に個人のことだからどうこういうことはありませんが」

「禊は固いわー、もっと感受性を持つということも大事よー？」

「……」

「そろそろいいわー、もう戻っても大丈夫よ、わざわざありがとう」

「い、いえ…っ、あの、俺も聞きたいことあったんですけど…？」

「あら？なぁに？」

「その…、あの女の人、どうなったかって…、」

「女の人？　……あぁ、鬼…」

対戯と京を襲った鬼。人の感情の篭もりすぎた言葉の成れの果て。それのせいで、二人とも怪我をし、京も、言霊遣いという存在を知ることとなった。

「鬼を倒したことによって正気に戻ったから警察に送ったわ。旦那さんを刺してしまっていたようだし…。幸いその人は生きていたから少しは罪は軽くなるでしょうが。言霊遣いの人間は警察の上の方にもいるから、鬼が出て、その上問題が起こってしまったときに対処してもらってるのよ」

「そう、ですか…」

「…？　どうしてそんなに暗い顔をするの？」

「え、いや…なんていうか…」

困ったように首を傾けながら眉を八の字にする京。

「俺、実は女の人大好きなんですよ」

「見てたらわかるが」

「えーと、だから、やっぱり、女の人が辛いのは辛いと思うんですね？」
「…へぇ」
「そ、それに、なんか…悲しそうで、苦しそうで、辛そうで…なんか、怖かったけど、なんか、俺も悲しくて…、ってなに言ってるかわかんねぇ…」

ぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜながら不意にがばりと立ち上がった。

「と、とりあえず俺戻ります！　教えてくれてありがとうございました！」
「あら、もういいの？他に聞きたいことは？」
「え、じゃあ祝さんのスリーサイ…」
「斬るぞ？」
「すいません」

そそくさと逃げるように部屋を出て行く京。それを祝は母親のように微笑みながら見送る。
横目にそれを見ていた禊ははぁ、とため息をついた。

「…随分気に入られたようですね」
「そりゃあの子可愛いじゃない。素直で面白いわ。すれていないしね。とっても優しい子」
「…そうですか。それはよかったですね…」
「それにあの子は私の言葉を何一つ疑わなかった。言いたくないことはちゃんと言えたし、その上に相手を思いやれる子…。『もうしんってなんですか？』はさすがに驚いたけれど」
「驚くというよりは呆れました…高校生にもなって意味くらい理解した方がいい」
「それがいいんじゃない。それに『音』の話も面白かったわ。風鈴

の音、ね。風情があるじゃない、それに…」
そこで一旦言葉を区切る。
「あの子は…泣くことを我慢できる子だわ」
「は？」
「対戯くんの場合は、きっと違うと思う。そもそもそういう気が起こらないから。そう言った意味で純粋だもの。貴方の場合は泣くことそのものを殺してしまう。けれどあの子はきっと…泣くことを我慢できる、優しい子よ」
「…意味を理解しかねます」
「そう」
「……」
「……」

ところで、と、優しげな雰囲気を一変させて、途端に怪しげな色を瞳に灯す祝。あ、これ嫌な予感。直感的に、本能的に肌で感じる。まだ１５歳という若さだが、長く万葉家に仕えてきた禊。なんとなく危険ではないが、果てしなく面倒くさくなりそうな予感が脳内全体で警報を鳴らしている。

「ヘッドフォンって、いくらくらい？」
「はい…？」
「だから、壊れたって言っていたでしょ？京くん」
…そうきたか、そうきたのか。
そう、きたのか。
「何個あげればいいのかしら」
「…一つで十分では」

「ええ？十個くらいあげといた方が…、いや、もっと」
「貴方もう自分の気に入ったものを甘やかす癖やめてくれませんか！？」
そうなのだ。そうなのだ。本当に気に入ったもの（対戯とは違う意味で）は、これでもかというほど甘やかす。
あまり思い出したくないが、その役割をこなすのは毎回禊なのだ。

「そうねぇ、じゃあ養子にとろうかしら」
「じゃあってなんですか！？　話の繋がりがわかりませんし養子になぜとる！？」
「私に逆らうの…？」
「こんなときばっかり権力行使しないでください！！　もう、仕事に戻ってください本当ただでさえがたがたしてるんですから！！」
必死に叫んでも祝には少しも効果がなく、むしろ機嫌よさそうに鼻歌さえ歌っている。
これは以上はもう無駄に叫ぶだけだ、とがっくり肩を落とす。
結局はこの人には敵わないのである。

一方の京は部屋を出てから、ぼんやりとこれからのことを考えながら縁側を歩いていた。
戦いがある、といういかにも普通ではないことが始まるらしかったが、いまいち実感がわかない。当たり前だろう。京は言霊遣いでもないし、ただここにいるだけの部外者だ。
かといって出て行こうにも、人質だとかなんやらで、祝が引き止める。
邪魔じゃないのだろうか、とは考える。もちろん邪魔だろう。かと

いってなぜか祝や青葉に気に入られるし、禊はもう諦めた様子だ。
かといってたまに通り過ぎる知らない万葉家の人には睨まれるのだが。もちろん逆に友好的な人もいるが。
個性的な人がいっぱいだな…と思う。

「…ん？」

ふと、目の前からも歩いてくる人を見つけた。それからあれ、と思う。
白い髪に赤い目。あれ、こういうのなんていうんだっけ？そう考えているうちに、その人は京の横を通り過ぎる。
さら、と後ろに靡く髪を横目に感じながら、ふと、振り返る。
その人間の後姿を見ながら、体に、肌に、耳に、感じた。

「……水の、音？」

ぽちゃん、と、静かな水面に落ちる、一滴の雫。
ふわり、と風が吹き、京の髪を優しく揺らした。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

最悪だ。
最悪な気分だった。

「よぉ？随分大変なことに巻き込まれてるみたいだな？」

にやにやと、サングラスの奥の瞳を愉快気に細めて、じっとこちらを見てくる女性一名。
会いたくなかった。とげんなり対戯はため息をつく。
本当に最悪だった。こんな気分のときに、さらに気分を落ち込ませるものが来た。

「どうだい？　親友くんにあーんなこと言われた気分は」
「…聞いてたんですか」
「見てたんだよ」
「むしろそっちの方がタチが悪い」
「おんや？　ご機嫌斜めじゃねぇかそこまでショックだったか」
「……」
「かといって、お前が被害者面すんなよ？　ペテン使い？　追い込んだのはお前だろう？」
「…追い込んだ？」
「自覚なしか？」

はん、と人を馬鹿にしたように笑い、その表情を鋭くさせる。つい対戯は唾を飲み込み、全身を緊張させる。
この人は訳がわからなかった。訳がわからなくて、意味がわからなくて、何もわからなくて。いったいどこの誰かさえもわからない。
ぎり、と対戯が睨みつけるが、それを受けてむしろ面白がる様子を見せる。

「無知は罪だ。人の心に気付かぬ奴だって罪さ。どれだけ人と人が他人であろうと、そいつの心がわからなくても、選択ってもんがあんだよ。それこそ分かれ道のな？」
「…意味が、わかんねぇんだけど」
「言葉は言葉でしか伝わらねぇ。その心は言葉を受けた人にしかわかんねぇんだ？　お前はなにも気付かねぇか？　あいつの言葉の真

意を」
「…言葉の真意？」

『いや、変わったこととか起こってないかなって？』
『……僕に、隠し事、してない？』
『ねぇ、なんで、嘘をつくの？僕には言えないこと？』
『僕、もう君がわからない、わからないよ』
『わからない、なにひとつだって、僕はわからないんだよ、対戯』
『僕だけが違って、僕だけが、おかしくて、僕だけが、一人ぼっちなんだよ、対戯…』

『…どこにいるの？　僕は』

「お前はあいつの心を理解し、正しくその意味を考えたか？　人は思ったよりも強いが、考えるよりも弱い。それこそ人が人の心を完全にわからないように、いくら近い人間でも、お前を理解してる人間でも、わかんねぇもんはわかんねぇ。
　それでこそ、　―――人の心、だ」
「…なんだよ、それ…」
「少なくともあたしが言えるのは、あんたは間違った。限りなく最低の選択肢をした。結果がどちらの方へ向くのかはわからねぇが…、まぁ、それはお前次第、か」

にやり、と口元に笑みを浮かべ、縁は背を向ける。

「考えろよペテン使い。お前の愚かさを。お前を信じる人間の思いを」

何しにきたんだよ、それだけを言うために来たのか。

怒鳴りたい気持ちはたくさんあった。それこそ、殴りかかりたいような。
けれど、そんな気は靄となって拡散し、残るのはただの虚無感だった。
ここでいっそ倒れてしまいたい、と思うが、冷えた思考の中の理性がそれを止める。

「…ちくしょうっ…！！」

がつん、と近くの壁を思いっきり拳で叩きつけた。
息苦しい。頭がくらくらする。拳は血だらけだ。頭が痛い。吐き気がする。苦しい。痛い。気持ち悪い。気持ち悪い。もう、嫌だ。
景色がぐるぐると回って見える。酔ったかのように、足取りもふらふらしていた。
わからない、なにもわかりたくない。なにも、考えたくない。

もう、なにも、知りたくない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　風の音吹く（後書き）

縁さんは落ち込んだ対戯に精神的にラリアットぶちかましてどこか行きました。
タチ悪いです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２　透明な少女は青年と出会う

あれから三日たった。対戯はあの日から、代夜の見舞いに行かず、ただぼーっとした顔で教室の窓から空を眺めている。
京は普通に学校へ来ていて、最初こそ対戯に引っ付いてばかりだったが、どうやら様子がおかしいと気付いたようで、それからはあまり話しかけないようにしていた。深く追求してこないということに対戯は内心京に感謝する。もし正面から直接聞かれていたら、嫌でもそのことと向かい合わなくてはいけなくなる。どうしても、それが今の自分に出来そうになかった。
情けないとは考える。情けない、お前はペテン使いじゃないか。こんなことで悩んでどうする。思いつめてどうになる。いっそ嘲笑された方が、よかった。
頭が、痛い。

「――――じゃあ部活のないものは邪魔だから早く帰れよー、終わりー」

気のない担任の号令でそれぞれが動き出す。対戯は特には席を立つこともせず、同じ体制のままで窓から空を眺めている。
京はそんな対戯をちら、と不安げに見つめたが、話しかけないほうがいい、と判断したのかそのまま一人で教室を出て行った。

「あああ、あの、あの…」

わかっている、このままじゃあいけない。ただでさえ万葉家のごたごたに関わらなければいけないことになっている。わかってはいる

のだ。
だから、ちゃんとこのもやもやは解決しないといけないことなんだ。
「あ、あのあの、…あの？　聞こえてる？」
このまま今日は万葉家に行ってみるか…？対戯は考える。そうしていたら、面倒なことに巻き込まれている今、自分から関わりにいけば、そのもやもやすら忘れてしまえるんじゃないか？
けれど、それは正しい選択なのか？
「…聞こえてない？　…あのー…」
もう帰ろう。そう決めて立ち上がる。遠回りでもして頭を冷やそう。
ふらふらと足取り危うく、対戯は教室から出て行った。
「…やっぱり…気付かれてなかった…的な？」
…それから一人、勇気を出して対戯に話しかけた少女、波縞湯里（なみしま ゆり）は一人取り残されていた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「はぁー…今日も対戯くん誘うの無理だったな…」
せっかく勇気出したのに…、と体全身に暗雲を漂わせながらとぼとぼと家路につく湯里。ぐすん、と鼻を啜りながら公園の前を通り過

ぎようとしたとき、不意に騒がしい鳩の声が公園から聞こえた。
「…ん？」
何の気なしに顔を上げてその公園の中を除く。それからぎょっと目を大きく見開いた。
鳩だ。いや、鳩なのは鳴き声がするから当たり前なのだけれど、そのたくさんの鳩が何故か一箇所に集まりそこにとまっていた。もぞもぞと大量の鳩が蠢いている姿は正直気味が悪い。
そして、その鳩が集まっている場所の中心には二本の足だ。
…なにあれ。
…本当になにあれ。

「――あーそこで物珍しそうに見ている少女さーん」
「…え？」
「そうです君です。折り入って頼みがあるのですが」
「は…はい？」
「どうか助けてくれませんかね？」
若い青年の声で、いきなり話しかけられたと思ったら救出を依頼された。
本当にどういうことなのこれ。

「あ…あの、どういった状況で、こんなことに？」
「それがですね、ほら、あそこに鳩の餌が売られてるでしょう？それで久々に癒されたいなと思って購入したのですが、ここの鳩、なかなかに凶暴性が高く、集まった挙句私まで食べられそうになっているわけですが」
「は…えええ！？」
「なんか妙に突っつかれてます。けれど私にはどうにもこの小さく

愛らしい鳥たちを追い払うことなんて出来ない。そんな非人道的なこと！　ま、私が言えた義理というわけでもないのですけれど」

丁寧な口調だったけれど、内容が随分とおかしい。吹っ飛んでいる。この人危ない人だろうか…とは考えるが、何分湯里は人がいい。放っておくこともできなかった。

どうしようか、と考えて、そういえば餌、と、青年が買ったであろう餌置き場を探す。数回辺りを見渡して、見つけた。普通に売店で売られている。

「鳩さん、そこ、そこ耳です。突っ込んだら駄目ですよ、食べられませんよ？」

青年の方はごちゃごちゃと、助けを求めているくせに楽しそうだった。…よく楽しそうでいられるなぁ、と思う。というか重くないのだろうか。痛くないのだろうか。いまいちわからない人だ。

「あ、あの、私あそこで餌買ってくるんで、助けますんで待っててください！」

「はーい、わかりました」

たたた、と小走りに湯里は売店の方へ向かい、そこで鳩の餌を買う。ここからはあの青年の姿は見えないようで、売店の叔父さんは今日は鳩が多いねぇ、などと柔らかい口調で世間話をし、袋に包まれた餌を買った。

それから湯里は急いで青年の方へと袋を開けながら走る。

「あ、それは危険ですよ？」

そう声をかけられ、一瞬何のことかわからなかった。目の前に、黒

い影が過ぎる。

「え…？」

鳩の群れ。

まさしく鳩の群れ。

それらが、一斉に、湯里に向かって襲い掛かってくる。

え、待って理解できない、これなに？

「ってええええええ！！！！」

思いっきりターンして湯里は襲い掛かってくる鳩から逃げる。

そうだよ！餌上げててあなったんなら、持ってる私も同じように

なっちゃうじゃん！なんで気付かなかったの私！

すごい勢いで湯里はかけるが、如何せん相手は鳥。頭を突かれる、

凄まじく突かれる。なにこれ癒されない。

「い、痛い痛いっ！？本当に痛いからやめて！？」

「ははは、楽しそうですね」

「楽しそうじゃない！全然楽しそうじゃないから！？」

いつの間にか青年の周りにいた鳩は残らず消えていて、そこにいる

のは人のよさそうな笑みを浮かべたタキシードの男だった。…タキ

シード？

「でもこれは私の責任ですよね、一応。助けるべきなんでしょうか」

「助けるったって…いいです！　来なくて！　助けるっていったの

は私ですから！」

「へ？」

「とりあえず、あなたも巻き込まれちゃうから、早く行ってくださ

い！！」

相変わらず鳩は湯里の頭を突く。痛い、本当に痛い。若干涙目になりながら振り返ると、すごい量の鳩がうじゃうじゃと後をくっ付いていた。

すでに餌は放り投げていて、あるのは袋だけ。なんで諦めてくれないの！この鳩ドSだきっとそうだ。

「…巻き込まれる、から？　早く、行け？　…はて、おかしい」

「な、なにやってるんですか、そんなところにいたら…」

「気が変わりました」

「へ？」

つかつかとこちらに歩み寄ってくる青年。ふっと姿が消える。

え、と湯里が目を瞠った瞬間、体がふい、と宙に浮いた。

「……え？」

それから首元に衝撃と圧迫感。ぐえ、と女子にあるまじき悲鳴を上げる。

なに、なにこれ？確かに今さっき自分は地面に自分の両足でついていた。けれど、なんで？

今、自分の足は、浮いている。

「〜〜〜っ！！！？」

「あ、すいません、苦しかったですか？」

とん、と地面につき、首もとの圧迫感もなくなる。どうやら後ろの襟首を掴んで上げられていたようだった。普通人をそんな持ち上げしない。下手したら死んじゃう。

げほげほと咳き込みながら、周りの様子を伺った。うん。空が見える。木も見える。…ん？
あれ、と首を傾げながら地面を見た。そこは、確かな大地ではなく、…木の枝。
…うん、これ幻覚。マボロシ。蜃気楼。白昼夢。だって先ほどまで私は公園にいた。なのに、今、こんな高い木の枝にいるとか、なんの瞬間移動？ありえない。

「あ、危ないですよ？落ちたら多分死ぬので」
「ってこれリアルうううっ！！！！！？？？？」

思わず隣の青年にがしりとしがみ付いた。おやおや、女性にそんなことされるのは照れますね、と軽口が聞こえたが、そんな照れているような少女漫画みたいな場面じゃない。
まず一言で言えば、高い。その上今湯里が乗っている場所は木の枝（太くて丈夫そうなのが救いだが）。この際どうやってここに来たのかはどうでもいい。どうやって降りるかだ。

「お、おおおどうやって降りるんですか！？落ちます、落ちますよここ！！」
「まぁまぁ落ち着いて。とりあえず座りましょうよ。ここ景色いいですよ？」
「なんでそんなに落ち着いてられるんですか！！あなたも落ちるかもしれないんですよ！？」
「はて、ここに連れてきたのは私でしたが、どうして私のことを心配する必要が？」
「そんなの、落ちたら危ないからですよ！」
「…？」
「…なんでそんな不思議そうな顔をするんです…？」

はぁはぁ、と叫んだために荒れた域を落ち着かせる。さすがにこうも突っ込んでいたらだんだんと気も落ち着いてきた。
こうなったら仕方ないと、最大限に注意しながら木の枝の上に座る。若干不安定だったが案外しっくりくる。隣では青年も同じように枝に座り込んできた。

「ありがとうございました」
「はぇ…？」
「助けていただいて、の意味です」

助けて…？むしろ襲われていただけなのだけれど、と感じるが、とりあえずここは受け止めておく。

「そういえば、聞かないんですか？」
「聞く…？」
「はい」

聞くこと…？と少しまだ混乱している頭の中で質問を探す。
はて、何が聞きたかったんだっけ…？

「あぁ…そういえばあなた誰ですか？」
「…そっちですか？驚きました」

目を丸くして青年が答える。

「普通ここはどうしてこんなところに自分はいるのか、と聞くときだと思ったのですが」
「あ、忘れてました…」
「変な人ですね、あなたは」

いやいやあなたの方が十分変な人だと思います。内心でそう突っ込んで、表面では苦笑で返した。
鳩に群がられてたり、タキシード着てるし、瞬間移動？したり…本当にこの人は何者なのだろうか。
一歩間違えれば変質者扱いだろう。変人なところは変わりなさそうなんだけれど。

「それで、あのー…どうやって降りるんでしょうか？」
「え、もう降りるんですか？ほらほら、綺麗な夕焼けですよ、もう鳩たちも襲ってくる様子もないようですし、ゆったりしましょうよ。ただでさえ最近面白いことないんですから」
「面白いことですか…？」
「あ、でもこれから面白くなることはあるんですけどね。いわゆるドロドロ関連？　その上今、『彼』の状態がとても不安定なようですし…楽しみがつきません。わくわくしちゃってますよ」
「はぁ…？　なにがなんだかさっぱりわからないのですが…」
「わからないように言ってます。さすがに関係ない人に言ったら駄目だというのは私でも理解してるんです。それにあなたは、物語に関わることがなさそうな村人Ａのような普通の女の子ですし」
「…散々貶されているような気がするんですが」
「褒めてるんですよ…？」
「なんですかそのいかにも心外だ、という顔！　…はぁ、いいですよもう…、ですからそろそろ降りましょう？　ね？」
「ええー」
「子供みたいな顔しないでください！　…ってわわ、」

叫んだ拍子に重心が背中にそれた。わわ、と支えをとろうとするが、そこは空中で。
ほら、ありますよね？　授業中調子に乗って椅子のまま後ろにひっくり返っちゃう子。まさにそんな感じで。…そんな感じで。

ぐらん、と背中は重力のまま何もない空中に向かって倒れていく。
もちろん支えなどもなにもなく。
視界がぐるりと夕暮れの色に染まる空一色に変わり、ふわり、と浮遊感が全身を包んだ。
え、これやばくない？　そう考えるが、どうにも思考が纏まらない。
嘘。

「ーーーっ！！！」

悲鳴をも忘れて目を固く瞑る。こういう終わり方ってありなの？
こんな高さから落ちたら、死んじゃうよね？
え？　本当？　リアル？　これって事故なのだろうか、いや、普通あそこから落ちるなんてありえないし。登るのも私には無理だし。
え、そしたらあの人はどうなっちゃうんだろう。一緒にいたからといって殺人罪に問われちゃったり、…しないよね？
完全に空中に投げ出される。さよなら私の青春時代…、と走馬灯を全力で脳内に溢れさせながらぼんやり思う。時代というかまさに真っ最中なのだが。

「あー大丈夫ですか？」
「ふぎゃっ！？」

暢気そうな声がして、それに続いて喉に鋭い圧迫感と痛みを引き起こした。ちょ、息が出来ない息が出来ない！？　ってかさっきも同じことあった！？

「おっちょこちょいですね貴方は。さすがにあんな高さから落ちたら普通の人は死にますよ？」
「〜〜っ！！〜〜！！！」
「あー、暴れないでくださいってば、落ちたら死にますよ？」

そんな、シャンプー買いに行きますよ？みたいな軽いノリで言わないでほしい。自分は今首の後ろの服を持たれて首が絞まっている状態なのだ。まさにデジャヴ。
湯里はそのせいで今の状況を確認できないでいた。例え今、空中に浮いている状況だったとしても、それは、若干目を回しつつ、もがきながら苦しそうにしている湯里にはわからないことだった。

「…んー？　大丈夫ですか？」
「……」
「あれ？」

ようやく青年が湯里の状態に気付いたのか、少し驚いたような顔をする。

「忘れてました」

ぽつりと呟いて、青年は地面に降り立つ。幸いなことに見ている人は一人もいなかった。
地面に足がついた瞬間ばたり、と湯里は膝から地面について倒れる。その際に襟首を離したのか、容赦なく顔から地面に突っ込んだ。
やっと喉が解放され呼吸が出来る。あぁ、生きてたんだ…、とどうしようもなく安心する。

「……普通の人は、こんな簡単に死ぬんですね。本当に、弱くて、脆くて、壊れやすい。ガラスのように、少し落ちただけで、バラバラに砕けてしまうんですから」
「…はい？」
「けれどだからこそ、人間というものをここまで愛しく思うのかもしれませんね。弱く脆く壊れる人間を。過去私が、そうであったよ

うに。けれど、どうしようもなく…この私そのものが全てを壊してしまいそうになるのは、一体なぜでしょうか」
「あの…何の話でしょうか…？」
「貴方はもっと危機感を持つべきですよ？　見知らぬ男を簡単に助けようとして。…ほら、私は何度も貴方を殺せた。何度だって殺すことが出来た。そういうのをこれからは考慮していくべきです」
「…？」

何を言っているのかわからない。確か、人間？　壊れやすい？　確かにその通りだけれど、その意味がわからない。
変人さんの考えていることは難解だなぁ、と思う。

「…でも、助けて、くれましたよね？　ありがとうございました」

何を言っているのか、難しくてわからない。
何を考えているのか、私には遠く思い浮かばない。
けれど人のいい湯里にとって、目の前のこの人が、どうにも悪い人間だとなんとなく思えなかった。

「…なぜお礼を？」
「え？　だって落ちそうになったのを助けてくれましたから。…そういえばどうやって助けてくれたんですか？　いつの間にか地面だし。なんか記憶飛んでるし…」
「それだけで…」
「えぇ？」

少し困った顔になる青年。
湯里はきょとんとした顔になる。

「…他に理由が必要ですか？」

ただ純粋に。青年は目をぱちり、と瞬かせた。
それからぷっと吹き出す。いきなり笑われたので湯里は不思議そうな顔をした。

「いやはや…なんともあなたは透き通ってますね。何一つも汚れてはいない。だからこそ私は貴方が恐ろしく見える。『彼』のように冷めた人間なら扱いやすいのですけれど」
「…さっぱり意味が、」
「わからないように言っているのでいいです」
「…はぁ」

やっぱりおかしな人だな、と思う。人間やらなんやら、よくわからない言葉を並べ立てながら言葉を乱立させる。

「……ふむ、そろそろ時間も時間ですね。それでは私はここで失礼するとしましょう。貴方とはまたどこかで会える気がします」
「へ、あ、はいっ」
「おや、そういえば名乗るのを忘れていました。私のことは入鹿(いるか)とどうぞお呼びください」
「…イルカさん？」
「イントネーションが違う気がしますがまぁいいでしょう。で、貴方は？」
「え、えと…波縞湯里です」
「なるほど、覚えました。それでは、またいつかお会いしましょう。透明なお嬢さん？」

ふわり、と一瞬強風が吹いて、髪の毛顔に張り付かせた。思わず目を瞑り、髪を耳にかける。けれど、その目を瞑っていた一瞬の間に、青年…入鹿の姿は消えていた。

え、と辺りを見回すが、人の姿、それに鳩さえも見つからない。いつのまに。

「…まさか、おば…、」

い、いやいやいや、それはない、それはないそれはないそれはない！　半ば言い聞かせるようにして顔をぶんぶんと揺らす。

「そ、そう、ただ足が速い人であって、いや、もしかして超能力でテレポートとか、いや、妖術使いとか…」
「んーあれー、湯里ーそこでなにしてんのー？」
「もしかしたらエクソシストなのかも！？」
「…え、なに？　湯里悪魔祓うの？」

そもそもエクソシストはテレポートなど出来ない。

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

気分は最悪のままだった。腹の底で燻るぐるぐるとした何かは一向に治まる様子を見せない。そもそもそれがなんなのかさえわかっていないのだ。ただ一つ、それは酷く対戯をイラつかせる、ということだけはなんとなく気付いていた。
どれもこれも全部、言霊遣いに関わったからじゃないのか？　そう考えるけれどいまいちあの人達を憎む気にもなれなかった。そしてこんな考えにいたる自分に嫌気が差す。

「…面倒くせぇ…」
「なにが？」
「いやだから…、ってはぁ！？」
独り言になぜか返事が着いてきた。思わず勢い欲振り返れば、どこかで見たような顔。
しばらくじっと見た後、対戯は何事もなかったかのようにもとの体制に戻り歩き始める。
「え、無視？　無視なんっ！？　それ酷ないっ！？」
「酷ない」
「じゃあもっと対話を試みることとかしようや！　無視は良くないダメ絶対。こういうことで傷ついて自殺してまう子とかおるんやで！　キミは俺のこのガラスのハートを粉々に砕いて屋上からダイブさせたいん？　そういうのはよくないことやって習わんかったんか！」
「うざ」
「俺の言葉を二文字で返された！？　しかも的確に俺傷ついてもうた！？」
本当に煩い人だ、とげんなりした様子で眺める対戯。やはり無視して先へ行こうとするが、男が慌てて着いてきて対戯の隣に並んだ。
「…どちら様ですか？」
ただいま最高に機嫌が悪いので睨みつけた上にイラついた声を隠さずに言うと、不機嫌やんっ！　とオーバーリアクションで返された。ただでさえ関西弁で喋ってることだけはある。…関係ないかもしれないが。

「えとなー…、俺のこと、覚えとらんの？」
「うん」
「即答かい…、ここはもっと言い淀むところとちゃうん…？　なんや、結構覚えられとる思っとったんやけどなぁ…、わりかしショックやわ」
「…？」
「…ほんまに覚えとらん？　結構インパクトある登場の仕方やと思ったんやけど…なぁ、」
たんっ、と対戯の目の前まで軽くジャンプして、それからくるりと振り返る。
「玉葉家門下生、橘社！もう、名乗るの二回目なんやからほんま覚えてな！」
「玉葉家…」
ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。
「あぁあの変な関西弁」
「思い出したかと思ったらそれ！？　変なって失礼やろが！！」
「うるさい」
「…この子酷いわー…」
しょぼん、と項垂れる社を横目に見ながら、そういえばなんで自分に話しかけてきたんだろう、と思いあたる。
あれ、と。そこで、気付く。社の服は、自分と同じものだった。つまり、制服。
つまり、自分と同じ高校の。
「…学校同じだったのか？」

「！？　やっと興味示してくれた！？　なんや俺寂しさで泣きそうやったんやで！？」
「いや…言霊遣いでも行くもんは行ってんのか…」
「そりゃ言霊遣いやらなんでもやら、結局のところは華の十代。青春するべきやろ？　謳歌するべきやろ？
…まー、実際のところは、言霊遣いゆうもんはいろんなところにおるからなー…。企業やら政治的なもんやら。言霊遣いと言うのを知られんようにして生きとるもんもおるし、ていうか言霊遣いって普通の人には知られとらんやろ？　知られんように上手く立ち回ってるだけやそんなもん。適度にご近所付き合いして、適度に名を知られてればただのお金持ちの名家となるもんやからなぁ…、それにいろんなところに潜んどるのもおるし。そのためにはやっぱ学校行っとらんとなー。
…ていうかこれ一般常識ちゃう？　もしかして新人さん？」
「いや、無関係です」
「…それもおかしないですか？」

ものすごくジト目で言われた。そりゃあ万葉家にいた時点で関係ないとかは通じないのだが。

「…ところで、お前俺と話してていいのかよ？　俺、一応万葉家のとこにいんだけどさ…、お前は玉葉家の奴だろ？」
「ん、今仕事中でも修行中でもないもん。まぁこまちゃんおったら問答無用でドロップキックかまされそうやな。そんでも無駄に争いとか俺嫌いやもん。俺はただの門下生であって、平和主義、ついでに博愛主義もいれといてもええで？」
「…さまざまなんだな、お前らも」
「まぁもとは同じ家やったらしいしな。俺もいきなりなんで戦い、とかなったんかわけわからん。…まぁ、上の方がどうとかあったんやと思うけど？　でもまぁやっぱり玉葉家の人たちゆうんはようわ

からんけど玉葉家の血、そのものに忠誠誓っとるみたいなんや。盲目的やなんか。それも上の方へ行けば行くほど強なる…。なんや息苦しいよな、んなもん」
「お前やっぱ変だよな」
「え、まじで？」
「まじで」

けどまぁ、いい奴の部類に入るんだろうな、とは思う。敵である万葉家の関係者であるはずの対戯に、万葉家に宣戦布告してくるほど憎んでいる玉葉家の人間がにこにこと話しかけてくるあたり。もしくはただの馬鹿か、だ。

「んで、俺になにかようがあった？」
「用？」
「…話しかけてきただろ」
「話しかけただけやで？」
「……」
「いや、見覚えのある顔やなー思っとったらキミやったから」
「…それだけかよっ！」
「おぉ！？　ようわからんけど突っ込んできおった！？」

ただでさえイライラしていたのに、と言いそうになったが、先ほどより緩和されていることに気付く。
なんでだかこいつの話を聞いているうちに、イライラも少しは引っ込んだようだった。

「まぁなんやかんやで、ところでキミなんて名前なん？」
「…虚室対戯」
「対戯くんゆうんか、俺のことは気軽に名前で呼んだってなー？
…ところで対戯くん、一年生やろな？　先輩なんちゅうことはない

よな？」
「知らん」
「え、いきなりここにきて冷たくなるん！？　えーやんえーやん、友達なろ？　…あ、でもこまちゃんに怒られたらどないしよ…、まぁええか。なぁ？」
「うざい。気持ち悪い。しつこい。うざい」
「うざい二回言われた！？　散々な扱いやなキミ！」

そう怒るわりには、どうにも本気の色が見えない。こっちは割りと本気で怒らせるような言葉を投げつけてみたのだが、どうにも気にしていないらしい。
…それはそれでむかつくが。

「まぁもし戦いになったら、キミとも戦わんといかんしなぁ…、強制参加やし。あんま会わんといてな？」
「はいはい」
「む、これって結構危険なんやで？　死人出てまうかもしれんし」
「…そこまでハードなのか？」
「少なくともものっそい俺のとこ殺気たらたら出しとる。居心地悪くてしゃあないんよ、ピリピリしとってなぁ…」
「うわ…」
「ちなみにこれ環境汚染ちゃう？って思うくらいにはマジしんどい。本当、憎んでるのが凄まじくありありと伝わってくるん…、ってあれ、そういえば…」

そこまで言って急に社はあぁ！？と何かを思い出したように大声をあげた。

「しもうた！今日修行入っとったんや！？　はよいかんと怒られる！！　…ほな、そういうことで！俺行くな？　話してくれとってあ

りがとな、じゃあまた今度ー！！」
「へーへー…」
なんか『バイトのシフト入ってた』みたいな感じで修行って入るもんなんだな…。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

二人の少年が対峙していた。
一人の少年は笑っていたが、その目の奥は空洞のように感情と言うものが薄暗くどろどろと詰まっている。
もう一人の少年は、無表情だったが、どこか、深く暗い影を染み込ませていた。

「ようこそ」

少年が、笑みを浮かべながら口を開く。
もう一人の方は、じっとそれを見つめたままだ。

「玉葉家へ」

そう言って歓迎するかのように手を広げる少年を見て、もう一人は、微かに、だが深く鋭い悲しみがどこか根付いているような気がした。
それを表情には出さず、なんとなく、思う。

もう、戻れない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３　届けるは言霊

万葉家と玉葉家の間に出来てしまった深い溝は、いったいどうして出来てしまったのかと言うことを誰も知らない。古く、古くからの確執。捻りに捻られた過去が、今に至るまで随分と引きずられてきた。
万葉と玉葉。万（よろず）を名にして、玉（ぎょく）をその身に宿した。
引き千切られた糸は繋がることはもう出来ない。
確固たる意思を持った過去の遺物。
言葉は、壁に、隔たれた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「あと一週間もしたら、向こうはこちらに攻めてくるわ。そして、私達もその家に攻めに行く。そうして、ただ潰しあうだけ」
そんなことやって、一般の人に気付かれないんですか？
「大丈夫よ。そういうこともちゃんと『配慮』してある。まぁちょちょっと言霊を使うだけね」
死人が出るという話を聞きましたが。
「…まぁ確かにそういうこともあるかもしれないわ。これまで起こしてきた戦いの中で。完全なる勝利と言うものは存在していなかっ

たけれど、そういう例も、あったわ」
「その場合も、少しずるをして、公にしないようにするんだけどね」
そういうの、辛くないんですか？
「あなたは、どう思う？」
「仲間が、…いいえ家族が傷ついていき、倒れていく。何回も見たわ。何回も、何回も、何回も。けれど、鳴れることはなかったわ。慣れることがあってはいけないことだけれどね」
俺、弱いですよ？
「ふふ、そうかしら。私はあなたに期待しているの。他と空気が違う、のかしら…。まぁ突拍子もない考えだと言われたけれどね。一般人、素人を出すなって」
「けれど、私の目に狂いがあるとでも？　というとみんな黙るのよ」
「え？　期待するなって？　ふふ、あなたはちゃんと来てくれるんだものねぇ。けれど、無理はさせないようにするわ。ただやどりの傍にいてほしいだけなの。もちろんあなたのことも守るわ。けれどね、私の勘なのだけど、どうしてもあなたはあの場所にいなければならない気がするの」
…俺、特別な、人間でもありません。
「率先して戦えっていってるわけじゃないもの大丈夫よ」
「けれどあなた、そんな風に言うのねぇ。怖い、とか、戦いたくない、とかじゃなくて、あくまで相手のことを考えて」
「否定しなくていいのよ。いいえ、否定することは許さないわ。無意識の言葉は本当の言葉。けして嘘はつけないもの」

「…頼んだわよ、対戯くん」

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

「…はぁー…」

結局のところ、言い包められてしまった。というか、あの人にはそもそも勝てる気がしない。口が自慢なのに全力で情けなかった。

「対戯ー、なに縁側で寛いでるのー？　お茶でも入れよっかー？」
「…うぜぇ奴はなんか馴染んでるし」
「うぜぇって言われた！？　え、いきなりなぜ！？」
「そもそも普通に受け入れたあたり馬鹿だよなぁ…、空気読めないうえにヘタレだし馬鹿だし…」
「え、散々言ってるけど俺のこと？　馬鹿って二回言ってるし！？」

こいつは面白いほど怒らない。どれだけ馬鹿にしても、そっけなくしても、…鬼に対してさえも。
そもそもそういう考えすら怒らない。人が良い、とはわかるが、どうにも納得できない。
…もしかしたらこの馬鹿は、自分が殺されたとしても相手を許すんじゃないか？
なんか、それはそれで悲しすぎる。

「…お前、殺されるなよ」
「ん！？　あれー！？　俺殺されるの！？　ってかなんの話！？

今の数秒の間に何があったの！？」
「いちいちうるせぇな…」
「え、俺のせいなの？　そうなの？」
なんだかわけがわからない、というような顔をしたまま対戯の隣に腰掛ける京。横目で睨むとうひぃ、などと変な声をあげた。
「ははは…なんかよくわかんないけど、不機嫌だねぇ…」
「べーつーにー？　怒ってないしー？」
「それ完全に怒ってるときの台詞だよね？　え、俺なんかした？」
「しいていうならば存在そのものが」
「え、俺全否定？　それ酷くない？」
体をしな垂れかけてくるので肘鉄を鳩尾に食らわせた。ふぎゃん、などと変な悲鳴をあげてその場に蹲る。
対戯はそしらぬ顔をして、ふぅ、と腹の中に溜まった重い空気を吐き出した。視覚には見えないそれが空気に拡散して消える。
「――実感わかないよね、対戯」
いまだ痛そうに対戯に攻撃された場所を摩りながら困ったように京が呟いた。
「なんかさ、思いっきりファンタジーじゃん？　今の状況。なんだか俺現実味、湧いてこないんだけど」
「それが普通の感覚だよ。俺だって異常に困ってる。空から幼女降ってきたと思ったら今俺ここにいるし」
「え、それどういう状況なの？　…まぁさ、俺は祝さんとか禊とか青葉ちゃんとか良い人だし、ここ、好きだからさ、血生臭いの、勘弁してほしいんだよねー…」

「…もし目の前に血みどろの男が倒れていたら、正気でいられるか？」
「そんなのそのときになってみないとわからないよ…、対戯は？」
「わかんねぇ。俺、血の臭い好きじゃないし」
「好きな人がいても困るよねそれ」
「大体お前本当に一般人だろ？　なんでいんだよここに。お前ここにいる理由もないだろ？」
「いちゃだめな理由もないでしょ？」
「…お前、馬鹿か」
「ははは、結構ここにいること決定付けちゃってる対戯には言われたくないよ。どうせほっとけないんでしょ？　対戯は優しいからね」
「俺は優しくねぇよ。良い人間でもないし、どうしてお前が懐くのかわかんねぇ」
「懐くって…他に言い方ないの？　俺犬みたいじゃん」

口を尖らせながら京は半目で対戯を見た。

「対戯は覚えてないだろうけど、俺は覚えてることがあるんだ」
「…は？　なんだそれ」
「んー？　それは内緒だけれど」
「はぁ？」

わけがわからない、というように対戯の眉間に皺がよる。京はううん、と大きく伸びをして立ち上がった。
茶色の柔らかな髪が太陽の光を受けて柔らかく透けている。

「俺、青葉さんとゲームの約束してるから行くねー？」
「…暢気だな…、ってかいつの間にそんなに仲良くなってるんだよ」
「実は俺可愛い女の子大好きなんだ」
「言われんでも知ってるわ」

最後に爽やかな笑みを見せてから悠然と去っていった。対戯は不機嫌そうに舌打ちをして、そのまま体を後ろに倒した。
太陽の光が眩しくて、つい目を瞑った。このまま眠ってしまおうか、と考え、やめる。禊に見つかったら面倒くさそうだ。

「…代夜は、どうしてんのかな…」

傷つけてしまった友人。あんな顔、見たことがなかった。見たくも、なかった。
置いてけぼりの、子供の顔。手を振り払われた、子供の顔。普段は大人びていて、対戯がどんなことを言っても、しょうがないな、と受け入れていた。
何が間違えた、何を間違えた？　考えても考えても、少しも対戯には、理解が出来なかった。
どうしても、わからなかった。

少し、方向を変えれば、実に簡単に、理解できるはずなのに。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

禊は実にイライラしていた。一週間後には玉葉家との抗争があるとわかっているはずの禊が従うその人が、何も準備をしていないからだ。
何度言っても表情一つ変化しない。時たま考える素振りを見せるものの、少しもその体を動かさない。

「…奥様、少しは焦ることなどしてはいかがですか？」
「えぇ？　どうしてかしらぁ」
「もう一週間ですよ？　奥様は暢気すぎます。もしこのまま万葉家が負けてしまったらどうする気ですか？」
「あら、禊は私達が負けると思ってるの？」
「い、いえ、それは違いますが…」
「ならいいじゃない。多分、どうにかなるから」
「どうにかなるって…」
「どうともなる、と言うべきかしら？」
「……」
「そんなに怖い顔をしないで禊。あなたが不安がるのもわかるわ。けれど不安でいて、どうにかなるとでも？」
「それは…」
「なるようになる。なるようにしかならない。結局は未来というものは曖昧でしかないの。不鮮明で、ぼやけている。見通せる人なんていたらすごいわ。未来は見通せない。…『見通してはならない』の。決して」
「…奥様？」
「あなたはいつも悪い方に考えすぎるわ。私が何も考えていないとでも思う？　これでも私は万葉家当主、万葉祝よ。少なくとも、今あなたをこの場で悲鳴一つあげさせずに殺せるくらいには、容易に出来るわ」

その言葉に思わず禊の背筋が粟立つ。

「そんな怖い顔をしないで、間違ってもそんなことはしないわ。あなたたちは私の子供のようなものよ。みんな愛しいわ。みんなを傷つけたくないわ。それをわかってほしいの」
「…そんなの、わかっていますよ、とっくの昔から」

少し、目を細めて禊が答える。
眉間には不機嫌そうに皺がよっていたが、これは感情の有る無しに関わらず自然と昔からあった癖だった。
怒っているように見せかけて、あまり人を近寄らせないように、そんな大人びた子供の自己防衛だった。

「ただ、貴方は怖い。正直に言えば、きっとみな心の奥底で思っています」
「でしょうね」
「…まぁ、あの空気読めない馬鹿のことは置いといて」
「京くんのこと？　酷いわねぇそんなこと言うなんて…、可愛いじゃない」
「軽いです。…まぁ、聡いものなら誰だって貴方の恐ろしさをその肌で、本能的に感じる。貴方は怖い。力でなく、その存在だけで人を恐れさせる。…酷い才能だ」
「散々なことを言うのね」
「ですが…、僕は貴方に忠誠を誓っています。この命を懸けてもいいくらいには」

ぴくり、と祝の眉が小さく動く。

「貴方の望むままに、僕達は戦います。ですから奥様、お願いしたいのです。貴方の言葉が、最善のものであることを」
「…わかっているわ。私は貴方達を殺させはしない。それこそ私の一番の望むことだもの」
「……はい」
「もう下がりなさい。自分の今出来ることをこの限られた時間の中で、それこそ最善を尽くしなさい」
「了解しました」

禊は立ち上がり、静かな動作で部屋を出て行く。
だんだんと禊の足音が聞こえなくなるのを待ってから、禊は小さく息を吐いて、眉間に手をあてた。

「…あの子の心は止まっているかのようね。『あの時』から…」

小さく、ぼそりと、祝は弱音のように言葉を零す。
普段とはかけ離れたように、その瞳にありありと感情を灯しながら、遠くを見つめた。

「…貴方が生きていることは、決して罪じゃあないのよ」

自分が言ったとしても、他の人が言ったとしても、きっと彼には届かない。それを理解してもなお、深く望んだことがあった。
祝自身の記憶にも残るあの『出来事』。この家の誰もが心に深く突き立てる、あの『記憶』。
けれど、今、微かな波紋が確かにこの家に流れていた。

あの、嘘吐きの少年。

どことなく、対戯は『彼』に似ていた。顔立ちも口調もまったく違うのに、どこか…似ていた。
おそらく本能的に禊も気付いているのだろう。対戯が、自分の最も尊敬していた人に似ていることを。
だからこそ、本能的に嫌おうと、拒もうとしている。
けれど、どこかで、縋っているようにも感じられた。

「…間違いでは、ないと思うのだけれど」

対戯の存在だけが、祝の想像するこれからのことで不確定なことだった。
対戯を巻き込んだことは、本当に良かったことなのか。いくら言霊遣いとしての力発揮したからといって、まだ知らないこともたくさんあり、何よりも経験がない。
けれど、対戯をここに置いたことは、理性的な何かよりも、もっとなにか、別のことからだった。それが何かは、祝でさえもわかってないのだが。
彼には重いものかもしれないわね、と祝は呟いた。そう、対戯は何一つだって関係ないのだ。それなのに、こちらが無理矢理巻き込んでいる。自覚はしていた。素人の少年に、とそんな声も聞こえた。けれど、…心が、叫ぶのだ。彼をここにいさせるべきだと。

「もう、五年たつのね…」

静かな部屋の中で、祝の声が小さく響いて、空気に溶けた。

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

「…どういうことですか」
「つまりこのままのお前がやどり様をお守りするというのは不安だから訓練してやると言ってるんだ」
「拒否は、」
「却下だ」
対戯はげんなり、という表現が最適な顔をした。

なにこの上司と部下みたいなの。確かに俺はここではあんまり役に立てないかもしれないけどさ、訓練？　言霊の？　是非ともお断りしたいのに、どうにも禊の眼光が鋭く、なんとなくだがどうにもテンションが上がっているように見えた。
…もう、あの携帯の手は使えないだろうしな…。
俺流ペテン術『家族が病気ネタは誰もが弱い』、『持ってる物は有効活用』、『悲劇ぶって同情誘え』三連発食らわせた。多分もうこれらは使えないだろう。予想以上に禊は学習するようだし。

「紫宴（しえん）」
「は、はひゅっ！！」

…ん？　聞き間違いかな？

「…なんで二文字で噛むんだ！」
「す、すひ、すいません！　わざとじゃありませんです！！」
「あと敬語もなってないだろう！」
「わざとじゃありませんです！　癖です！」
「なら直せ！」
「はひゅっ！」

……。

「俺帰るわ」
「帰るな！！」

ついた。予想がついた。限りなく予想がついた。対戯はげんなりした顔をさらにパワーアップさせる。
紫宴と呼ばれた少女は長い黒髪を先の方で括っていて、紫宴が返事をするたびぴょこん、と揺れた。

「なぁ…俺展開読めたよ。ついでに言うならありがちだ。もっと斜め上の方向で攻めて来いよ」
「…なんでお前にそんなこと注意されねばならんのだ…。おい紫宴！」
「はひゅっ！」
「…まぁいい。あとは任せた」
「は、はひ！　任されました！」
「あ、惜しい」

やっぱりな！　そういう展開だと読めてたよ！　禊は対戯と同い年だがどうやらこの家ではそれなりの地位があるようで、様々な人に指示を出していたのを対戯は見ていた。
生真面目で神経質で苦労性で…。対戯は思わず自分の父親に振り回されている部下の人のことを思い浮かべた。対戯の父親は自由奔放だ。いい意味でも悪い意味でも。『帰るの忘れてた！』と電話口で言われたときはすごく殴りたかった。母さんもなんで着いて行ってるんだ。
そう考えると禊は上司のようにも見えるが、あの祝の部下のような存在でもあるんだ、とそう考えると、禊がなんだか不憫に思えてきた。胃潰瘍などになりませんように。

「…なんだか今不愉快に哀れまれた気がするんだが…」
「はい？」
「…まぁいい、僕は行く」
「ひゃい！　お気をつけていってらっしゃいでございます！」
「…もう突っ込まんぞ！！」

ずんずんずん、といつもより不機嫌さをあらわにして禊は去っていく。それをぼんやりと対戯は眺めていたが、まぁどうでもいいか、

という結論になり大きく背伸びをした。

「…じゃあ帰るか」

「いけませんです！！」

さりげなく、を装うとしたが、やはり紫宴に呼び止められる。ちっと舌打ちをして、睨むように振り向くと途端にびくっと怯えさせた。…そこまで怖いか？　禊の方が頻度高いだろ？　内心傷つきつつも睨みを緩めて紫宴を見た。やはり恐る恐るといった感じではあったけれど、その小さな口を開いた。

「あ、あのー…やはり、やどり様の近くにおられますということは、いくら奥様から信頼ある方といわれましても、素人と聞くとやはり不安というものがあるのでございます。大変失礼なことだとおもうのでございますけれども、ここはこちらに配慮していただけないでしょうか…？」

「……俺実は訓練すると寿命が縮む体質なんだ」

「なんと！」

「さらに、言霊を使うと生命力が弱るという効果も付加されているんだ」

「まことか！？」

「…信じるな馬鹿！」

予想外にこいつ馬鹿だ！　口調からまぁアレだ、と思っていたが、やっぱり馬鹿だ！　頭の良さとかなんやら抜いて…馬鹿だ！

それにどこの武士？　忍者？　バラバラすぎる。おかしい。かなり変だ。突っ込みたいのを必死に堪え、大きなため息を吐く。けれどまぁ、言っていることももっともなことだったからだ。

「…一応やるよ。俺もあっさり撃沈とか正直嫌だし」

「！　了解いたしかりました！　ささっ！　私の後に着いてきて下さいでございませ！」

…絶対突っ込まねぇぞ！

連れてこられたのは少し開けた小さなグラウンドのようなところだった。幅にして一軒家の土地分くらいだ。子供の小規模な遊び場の空き地といえば想像しやすいだろうか。
そこには石一つなく、まさに土と砂ぐらいしかない。

「それでは改めて自己紹介を。錦木紫宴（にしきぎ しえん）と申しますです」
「はぁ…」
「もうご存知と存じ上げていることを思うことですが、言霊についてご説明をしたくありますでございますが…」
「もう敬語やめてださい、もう本当何言ってるか意味わかんねぇ…」

対戯の言葉に、ぱちくり、と大きく目を瞬かせたあと紫宴はうんわかった、と美少女的な笑みを浮かべた。
本当に敬語がめちゃくちゃだ。そもそも敬語で扱われても困る。こちらとしては、偉くも何もないのだから。

「じゃあ説明するね。言霊と言うのは知ってるだろうけど、意味を成す言葉は力と為す…、まぁ言っちゃえば、意味のある言葉を、言霊遣いが使うと、その言葉が現象に現れるってことだよね。『浮かべ』といったら浮かぶし、『倒れろ』と言ったら倒れる…。短い言葉だけれど、それは確実に、わかりやすく意味を成した言葉。簡単に言うと『命令』…なのかな。最もわかりやすいのは」

実に砕けた言葉になったが、この方が数段わかりやすい。対戯は頷きながら続きを促した。

「けれどね、浮かべっていうときには、ちゃんと明確なものに対して言わなきゃだめなんだよ。『浮かべ』というのなら、人でも紙でも石でも…。そうじゃなかったら言葉は『独り言』そのものだからね。意味なんて為さなくなっちゃうんだよ。まぁそれが自分に対する言葉だったら自分にかかるけど。まぁその際も明確な『対象』を思い浮かべなきゃ」

「…なるほど…」

「ここまでは簡単。けれど実践となるとそうも行かないんだよね…。…よし、『浮かべ』」

そう言うやいなや、近くの地面が持ち上がる。ぎょっとしながら対戯がそれを見ていると、また紫宴の口が開いた。

「『作れ』」

その言葉が空気に浸透していくのがなんとなくわかる。それらはくるくると地面から持ち上げられた土に向かい、くるくると旋回しながら土から何かを形作っていく。

周りに砂埃が舞って、対戯は思わず口元を押さえる。目に砂が入りそうだったから、一歩後ずさった。

紫宴はと言うと、真剣に目の前で起こっていることに集中している。額に汗をかきながら、土が形作られているのを見ていた。

「――ふぅ」

一仕事終えた、と言うようににっこりと笑いながら額の汗を拭う。
悠然と対戯の方に振り返った。
そこにあったのは、一人の少女と、少女とまったく同じ砂の像。

「言霊は届けるものがないと成立しませんからね」

…。
…。
…舐めてた。
白状すれば正直舐めてた。いや、大変だし、危険なものだとは十分理解していた。死に掛けたし。
だけれど対戯は思う。

やっぱりこれ、魔法とか魔術じゃね？

「…まぁわかったよ一応…、んで、俺はなにをすればいいんだ？」
「そうだねぇ…、じゃあ同じことをやってみて。言葉は人それぞれ。使い方を押し付けることはできないもの。だけど気をつけてね。言霊は武器になる。人を殺せるほどの」
「…すげぇ物騒だな…」
「仕方ないよ、そういうものだもん。ほら、やってみて。初めは犬とかでもいいから」
「んー…そうだな…」

対戯は今いた場所から数歩ほど下がり、先ほどの紫宴の行動を思い出す。それから目を瞑り、息を大きく吸って、吐いた。
どうやったら言葉が力と為すのか、感覚的に自分はもう掴んでいた。
それを、口から放つだけである。

「『浮かべ』」

砂埃が舞い上がりながら、茶色い土が浮き上がり、くるくると旋回する。それからどんどんと形作られていた。
お、出来てる、と思ったけれど、ふと疑問が浮かぶ。
俺は今、『作れ』って言ったか？

「…あれ？　なんで『浮かべ』の一言だけでここまで？」

紫宴も同じように対戯が思ったことをその口に出す。
そういえば、俺の言霊は少しおかしいんだっけ？

「なんか前、禊が言ってたんだけど…、俺の言霊は捻くれてるんだってさ。なんていうか真意…、俺の言葉を汲み取ってくれてるというか…、」
「はぁ…本当にそれはおかしなことだね…。本来言葉は伝えるためにあるのだから、言葉と意味が同じでないんだけど…、君の場合言葉と意味が成立していなくて、言霊が意味をそのまま食い違った言葉に乗せてるのかな…、私にはちょっとわからないけど、変わったものなんだとはわかるよ。まぁ人によって言葉はそれぞれだからね」

そう喋ってる間も対戯は目線は土から離すことができないでいた。
会話をする余裕はあったのだが、どうやら形作る際にはそれなりに意識を集中させなければいけないようだった。

「言葉は伝える相手のことを考えなくちゃいけないからね。『命令形』の言霊は相手も意味が理解できるようにしないと。…君の言霊はちょっと違うみたいだけど…ね？」

ぶわぁ、と今度は大きな砂埃が辺り全面に広がる。紫宴は思わず目

を瞑り、対戯の口の中には小さな砂の粒粒が入り込んだ。土の味が口内に広がって気持ち悪い。
言葉は伝えるべきもの、伝わらなければ意味がわからない。そう教えてもらった通りにしようと、集中を高める。

「……っと、」

こんなもんかな、と出来上がったものを見て少しだけ笑う。紫宴の方を向けば、そこには目を大きく見開いて、あんぐりした紫宴が。その目線の先は当たり前に、対戯が作ったもの。…紫宴が作った像と、そっくりな、もう一つの像。

「こんなもんか…、どうだ？」
「……」
「おい？」
「いや、君…、素人さんであるのでござりまするのですよね？」
「おい口調戻ってるぞ」
「ちょっとというか…すごいですのでございまする」
「はぁ…ありがとう…」

対戯はなんだかわけがわからない、という顔で礼を言っておく。
実際対戯は気付いていないのだ。思考がここまでにあったいろんなことで少し麻痺していたのかもしれないが、長い間門下生として鍛錬をしてきた紫宴が汗を噴出しながら作り上げたものを対戯はあっさりと真似して見せた。まぁさすがに紫宴の物と比べたら形は少し歪んでいるが、それでも上出来だった。

言霊遣いの門下生というのは、もちろん言霊を扱うことに対しての修行だ。その際に様々なことを叩き込まれることになる。知識、力、技術。これも人の感情が篭もりすぎた言葉の成れの果て、『鬼』を

退治するためだ。
けれど対戯にはその知識も経験も圧倒的に少ない。それなのに易々と言霊を使って見せた。これは才能と言うものではなく、限りない『素質』。そして、…『可能性』。どちらにも転ぶもの。
言霊遣いは『言葉』を扱う。体を鍛えるものもいるけれど、言霊遣いにとって大切なのは、『言葉の使い方』。
つまり今まで積み上げてきた対戯の言葉は、言霊遣いとしての力となるのだ。

「…紫宴？　どうしたんだよ」
「ひゃえ！　なんでもごじゃりませぬ！」
「…口調おかしい…」

けれど紫宴そのことを口には出さずに心の中だけに止めといた。なんとなくだけれど、対戯は自分にそういう素質があることを嫌うように思えたからだ。

「さて、続きをしょっか！　対戯くん、今度はあっち！」
「はいはい…」

それから少しだけだけど、紫宴は思ったことがある。
気のせいかもしれないけれど、対戯の言葉は、似ていると思ったのだ。

万葉家の人々に、大きな影響を与えた、あの人に。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４　それぞれの思惑（前書き）

今回は短いです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４　それぞれの思惑

「あ、やどりちゃん」
「ぬ？　おぉ京か…。対戯はおらぬのか？」
「んー、対戯はなんか修行？　らしい。禊がぶつぶつ言ってた」
「そうか…」
「もしかしてなんか用だった？　俺後で伝えとこうか？」
「いや！　たいしたことじゃないのじゃ…」

いかにもしょんぼりとした風のやどりに、京は首を傾げる。

「元気ないね？　どうしたの？」
「い、いや別に…」
「いーや、お兄さんに話してみ？　可愛い女の子が困ってるのは見過ごせないでしょ？」
「……」

口をぱくぱくしながら、言うかどうか迷っているやどり。そんなやどりを京は真っ直ぐ見つめる。
なんとなく、本心から京は、真面目に聞いてくれているんだとやどりは思った。口では軽そうにいいながら、それでも目はやどりから逸らさない。
子供の自分の話は、いつも真剣に取り扱われなかった。実際に起こってからじゃなきゃ、何も聞かれない。そう、対戯が自分を守って怪我をしたときも。

「…対戯に、もうここへ来ないでほしい、と言いたくて…」

「へぇ」

とくに驚いた様子もない京に、俯きながら声を出したやどりは、思わず顔をがばりと上げる。
京は酷く優しげな顔で微笑んでおり、やどりはわけがわからない、と言う顔をした。

「驚かないのか…？」
「驚かないよ」

京はやどりの頭にぽん、と手を置いた。

「やどりちゃんはもう、対戯に怪我させたくないんだよね」
「…う、」
「そりゃあ怖いよね。それにもともと対戯は言霊遣いになるはずなかったし、この戦いに参加するはずもなかった」
「…なら、言ってくれるか？　…もう、ここに来るのはやめて、言霊遣いのことも忘れてほしいと…」
「んー、無理かな」
「っ！　なんで！」
「やどりちゃん、対戯のこと甘く見すぎだよ」
「……！」

京が言い聞かすように呟く。

「対戯は素直じゃないし、嘘吐きだけど…、でも、誰よりも真っ直ぐなんだ。やどりちゃんならわかるだろ？　あいつは、どんなに危険なときだって、見捨てやしなかった。自分も死ぬかもしれないのに」
「…京は、怖くないのか？」

「怖いよ。対戯に縋ってでも止めさせたいくらい、怖くてたまらない」
「…京？」
「でも、それは対戯のことを否定してるのと同じなんだよね、俺の中では」

京はやどりから手を離して、顔を上げて空を見た。やどりからはその表情が見えないけれど、自分と似たような顔をしているんだろうな、と思った。
けれど、とやどりは思う。この京だって、一般人で、本来対戯よりもこの件に関して無関係のはずだ。鬼に襲われた『被害者』。そのはずなのに、ここにいる。

「…京も、ここから出て行っていいのだぞ？」

そう、口からポロリと出た。京は空に向いてた顔をやどりのほうに向けて、悲しそうに笑った。

「…俺は、必要ない？」

ぼそり、と、そう、ただ一言。

「そんな…、そんなことは絶対にない！！！」

やどりはすぐさま否定する。けれど、ここに京がいるということは、巻き込んでしまう可能性が高くなるということだ。やどりはそれがどうしようもなく嫌だった。
京は優しい人だった。見た目とは裏腹に、人のことを心から心配できる人だ。
でも、どうしてもそれが心配になってくる。

「でも…、でも、私は…！」
「んー、やどりちゃんにこっそり俺の秘密教えてあげる。対戯にも祝さんにも言ってないとっておきの」
「…はぁ？」

唐突にそんなことを言われたのでやどりは目を丸くする。それに京は微笑み、内緒だよ、と呟いた。

「昔ね、俺、対戯と遊んだことがあるんだ」
「…それが秘密？」
「うん、大事な大事な思い出。対戯だってもう、覚えていないけど、泣きたくなるほど大事な思い出なんだよ」
「…どうして？」
「んー、まぁ、すごく楽しかったから…かな？　かくれんぼして遊んだんだー。…これは二人だけの秘密だよ？　誰にも言っちゃダメだからね？」
「わ、わかった！　…でも、どうしてそんな話を？」
「あー、俺の秘密やどりちゃんに知られちゃったなー、これはやどりちゃんが喋っちゃわないように見張ってなきゃだめだなー」
「え、えぇっ！？」

急に芝居がかった口調になる京。慌てるやどりをにやり、と見つめた。

「ね？　俺がここにいる理由出来たでしょ？」

…あぁ、そうか。
やどりはなんとなくだけれど京の本質が理解でいた気がする。
対戯にも言っていない。祝に、と祝が出てきたということは聞かれ

たということなんだろう。その祝にさえ言っていない。
自分にだけ、誰にも言っていないことを教えてくれた。
きっと、大事な思い出の話を。

「…ますます、恐くなった」
「ん？」

小さく呟いた言葉が京には聞こえなかったらしい。やどりはなんでもない、と京に返す。
この優しい人は、いつか、自分でさえも犠牲にしてしまうんじゃないかと、そんな、暗い不安を打ち消すように、やどりは大きく息を吐いた。

＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋

「…上達スピードが半端ねぇでございます」
「おい口調」
「違う！　なにこれ！　こんな話あるか！」
「国語得意なんだよ…」
「それだけで私が覚えられなかった言葉とっくに知ってるとか…！」
「…それ単に記憶力の問題なんじゃ…」

「くくっ、やってるなぁ…、」
対戯と紫宴の様子を影からこっそりと眺めているサングラスの女性がいた。口元を歪ませて笑みを作っている。
面白いものを見ているとでもいうようにサングラスの奥の瞳は細められていた。

「…縁、」
「んぁ？　祝か、久しぶりだな」
「…あなたも関わっていたのね」
「何言ってんだ、あたしがこんな面白いもん逃すわけねーだろ？」
「まったくあなたは変わらないわね」
「変わってたまるか。あたしはあたしのままさ。こういう生き方しか出来ないっつーね」
祝はふぅ、と頬に手を当てながらため息をつく。
「頼（らい）」
それから小さく、縁に聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟いた。
瞬間ぴたり、と縁の体の動きが止まる。
うふ、と祝は笑いながら、その目に怪しい光を灯した。
縁の顔に嫌な汗が浮かぶ。…もしこの光景を対戯が見ていたら今頃絶句している頃だろう。
「今ね、家にいるのよ」
「は、どうして…」
「そりゃああなたが最近ここら辺にいるのだからね」
ころころと鈴の鳴るような声で祝は笑う。縁は顔を青ざめながら後

ずさりをした。
嘘だろ…、と小さく呟きながら、視線をあちらこちらに彷徨わせる。
「まったく、本当にこういうところは可愛いのにねぇ」
「可愛いなんて言われたくねぇよ…ったく、家にいやがるとか…、じゃああたしは退散させてもらうよ。もしあいつとばったり、なんてことになったら洒落になんねぇ」
「なぁに？　会っていけばいいじゃない。頼も喜ぶわ」
「い・や・だ！　絶対にな！」

ぐるり、と祝に背を向け、逃げるように縁は祝の視界から消えていく。それを薄く笑いながら、祝はとん、と壁に背をついた。
ふぅ、と小さい息を零しながら、雲一つない、青く澄み切った空を見上げる。
聞こえるのは対戯と紫宴の声。それが優しく耳に馴染む。
「…あなたなら、こんなときも笑ってるのでしょうね」
届かないであろう言葉を、それでも祝は口にした。

＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋　＋＋＋＋＋＋

踏み込んではいけない領域。
知ってはならないこと。
そんなものはどこにでもあるのかも知れない。

「君なら、出来るよね」

そう呟く彼は、なにを望んでるのか。それを自分が知ってはならない、と思うけれど、少しばかりの好奇心でなんとなく考える。
けれど少年は思い直す。彼の瞳の奥の感情を覗き見ようとしたが、霧がかかったようにそれは見えるものではなかった。

「…出来るよ」

だから少年は静かに彼の問いに返す。そこには驕りも何も無い、ただの確信。
少年は嘘をつかない。いや、つけない。彼もそのことをわかっているのか、にこり、と色を見せない笑顔を作るだけだった。

少年はもう、なにも考えたくなかった。深く記憶の海に沈むくらいなら、わけがわからないことでも、わけのわからない知識でも好きなだけ頭の中に詰め込むつもりだ。
あんな思いをするくらいなら。
それならば。

「そうかい、じゃあ頑張ってくれ。――代夜」

「……わかったよ」

深い、深い白の夜に沈んでしまいましょう。
延々と続く記憶の海に覆いかぶさるような、そんな時間を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9946v/

ペテン使いは言霊遣い

2012年1月6日17時54分発行